原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第27集

原の辻遺跡

（はる　つじ）

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書①

2004

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第27集

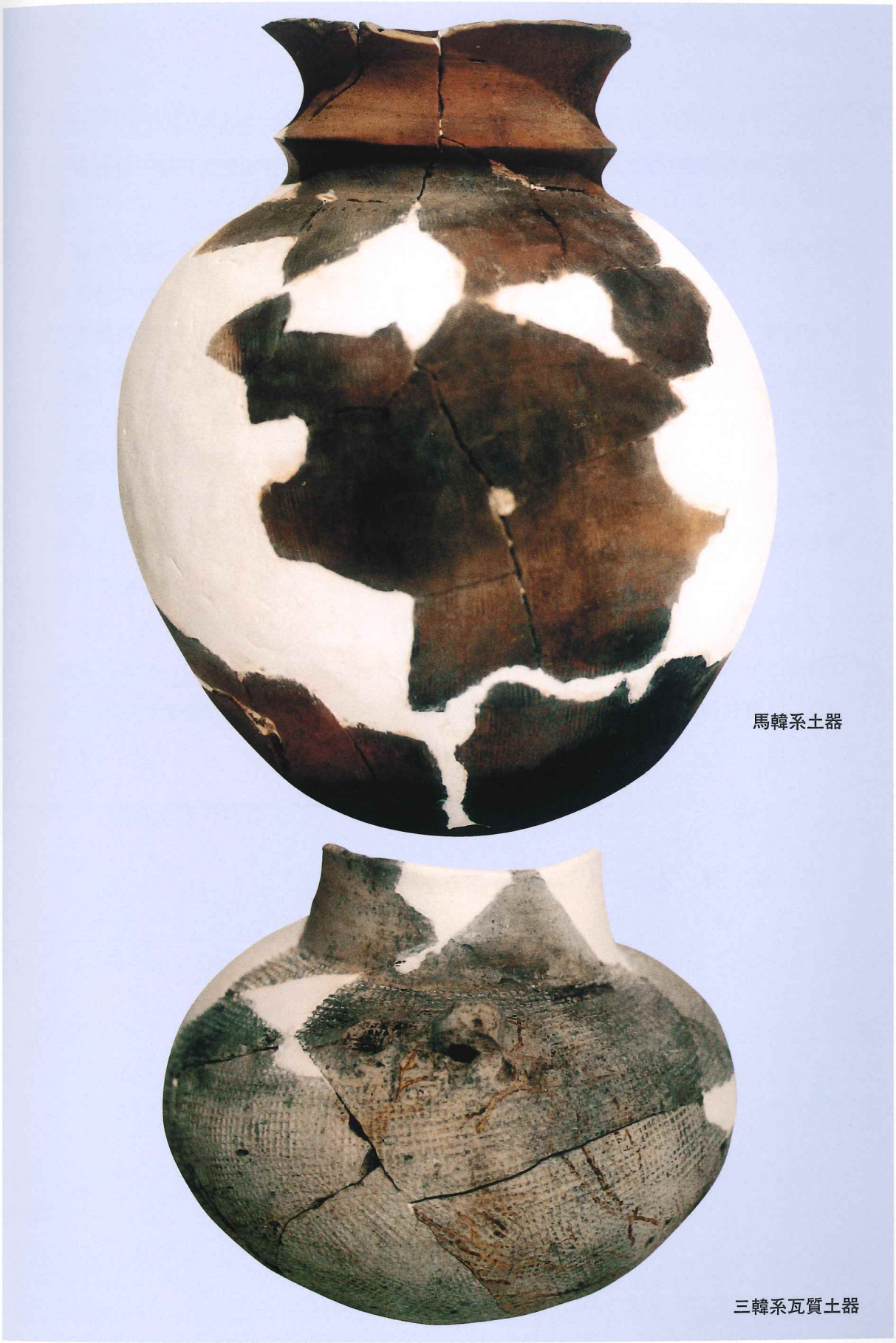
原の辻遺跡

（はる　つじ）

主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書①

巻頭カラー①　調査前西南方向より

巻頭カラー②　ＳＤ－３出土の扉



巻頭カラー③　韓半島系土器

発刊にあたって

本書は一般県道勝本石田線改良工事に伴い実施した，原の辻遺跡発掘調査報告書です。

原の辻遺跡は，既にご存じのように，国の特別史跡に指定された遺跡で，全国の弥生時代の遺跡の中で最もその重要性が指摘されているところです。

今回の調査では，丘陵の西側の低地部を調査しましたが，旧河道・環濠・溝が検出され，遺物も多数出土しました。旧河道は，台地の西側では重要な役割を果たしていたことや，古代にも水田として利用されていたことなど新たな見解をもたらしました。

遺物としては韓半島系の遺物が多く見られ，この遺跡が交流の拠点であったことを彷彿とさせる内容でした。これまでの成果からも，原の辻遺跡を東アジア的視点から捉えなくてはならないとの指摘があったように，交流拠点としての原の辻遺跡の位置づけを補強する内容となっています。

また，古墳時代ではありますが，扉の出土は原の辻遺跡では初めての出土でした。調査の本来の目的は，その成果が県民の皆様にいかに活用されるかであろうと思います。今回の調査報告書が，皆様方に広く活用されることを願い，発刊の言葉といたします。

2004年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　木　村　道　夫

例　　言

1．本書は，一般地方道勝本石田線道路改良工事に伴って実施した，平成14年度の原の辻遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書に収録した遺跡の調査地区は，長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触字八反に所在する。

3．事業は，長崎県壱岐支庁建設部建設課道路班が主体となり，調査主体は長崎県教育委員会が，調査の担当は原の辻遺跡調査事務所がおこなった。また，人間文化都市研究所が調査を補佐した。

調査組織

原の辻遺跡調査事務所	所長		高野晋司	
	課長	（兼）	野中滋生	（壱岐教育事務所）
	係長	（兼）	長岡正記	（壱岐教育事務所） （現明誠高校係長）
	係長		町田利幸	
	主任文化財保護主事		福田一志	（現場担当）
	文化財保護主事		藤村誠	（現長崎県教育センター）
	文化財保護主事		小玉友裕	（現場担当）
	文化財保護主事		中尾篤志	

調査協力　芦辺町教育委員会・石田町教育委員会

4．本書で使用した遺物の実測・製図は，原の辻遺跡調査事務所が行った。遺構の実測については原の辻遺跡調査事務所の指導のもと，人間文化都市研究所が行った。

5．本書収録の遺物・図面・写真類は，原の辻遺跡調査事務所で保管している。

6．本書の遺構・遺物写真は現場担当者が撮影した。

7．本書の執筆は福田・小玉が分担しておこなった。

8．平面直角座標は旧日本測地系を使用している。

9．本書では環濠・溝状遺構にＳＤの略字を使用した。

10．自然化学分析については、古環境研究所に委託した。

11．本書の編集は，福田・小玉がおこなった。

本 文 目 次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境……1
1．地理的環境……1
2．歴史的環境……2

第Ⅱ章　調査にいたる経緯・概要……5
1．調査経緯……5
2．調査概要……5

第Ⅲ章　調査と出土遺物……8
1．第1調査区から第4調査区の調査……8
(1)　土層……8
(2)　遺構……11
(3)　出土遺物……20

2．第5調査区から第8調査区の調査……45
(1)　土層……45
(2)　遺構……47
(3)　出土遺物……50

3．第9調査区から第13調査区の調査……53
(1)　土層……53
(2)　遺構……54
(3)　出土遺物……62

4．その他の遺物……77
(1)　楽浪系，韓半島系の土器……77
(2)　銅鏃……82
(3)　玉類……83
(4)　旧石器時代の遺物……84

第Ⅳ章　まとめ……86

附編（自然科学分析）

挿 図 目 次

第１図　壱岐島の位置図……1
第２図　島内遺跡分布図……4
第３図　調査区位置図（１/10,000）……5
第４図　調査区配置図（１/2,000）……6
第５図　原の辻遺跡丘陵西側の遺構配置図……7
第６図　第１～３調査区土層図（１/60）……9
第７図　第１～４調査区遺構配置図……11
第８図　第１調査区，ＳＤ－２・３遺構・遺物検出状況図（１/80）……13
第９図　第２調査区，ＳＤ－２・３遺構・遺物検出状況図（１/80）……15
第10図　ＳＤ－３内堰状遺構（１/30）……17
第11図　第３・４調査区足跡状遺構図（１/150）……18
第12図　第４調査区足跡状遺構・土師器・杭列出土状況図（１/30）……18
第13図　ＳＤ－２出土土器①（１/４）……19
第14図　ＳＤ－２出土土器②（１/４）……21
第15図　ＳＤ－２出土土器③（１/４）……22
第16図　ＳＤ－２出土土器④（１/４）……23
第17図　ＳＤ－２出土土器⑤（１/４）……24
第18図　ＳＤ－２出土土器⑥（１/４）……25
第19図　ＳＤ－２出土土器⑦（１/４）……26
第20図　ＳＤ－２出土土器⑧（１/４）……27
第21図　ＳＤ－２出土土器⑨（１/４）……29
第22図　ＳＤ－２出土土器⑩（１/４）……30
第23図　ＳＤ－２出土石器①（１/３）……32
第24図　ＳＤ－２出土石器②（１/３）……33
第25図　ＳＤ－２出土木器　（１/８）……34
第26図　ＳＤ－３出土土器①（１/４）……35
第27図　ＳＤ－３出土石器①（１/３）……37
第28図　ＳＤ－３出土石器②（１/３）……38
第29図　ＳＤ－３出土石器③（１/３）……39
第30図　ＳＤ－３出土木器　（１/８）……40
第31図　第４調査区北側出土，土師器（１/３）……42
第32図　第５～８調査区土層図（１/60）……46

第33図　第５～８調査区遺構図（１/160）……48
第34図　第６調査区検出のピット群（１/80）……49
第35図　第５～８調査区出土石器①（１/３・１/４）……51
第36図　第５～８調査区出土石器①（１/４）……52
第37図　第９～13調査区遺構配置図……53
第38図　第９～11調査区土層図（１/60）……55
第39図　第12～13調査区土層図（１/60）……56
第40図　第９調査区ＳＤ－４・５遺構・遺物検出状況（１/80）……57
第41図　第10調査区ＳＤ－４・５遺構・遺物検出状況（１/80）……59
第42図　ＳＤ－４・５出土土器（１/４）……63
第43図　第９調査区ＳＤ－４下層出土土器（１/４）……64
第44図　ＳＤ－４・５出土石器①（１/３・１/４）……65
第45図　ＳＤ－４・５出土石器②（１/４）……66
第46図　第11・12調査区ＳＤ－７遺構・遺物検出状況（１/80）……67
第47図　ＳＤ－４・５出土木器（１/８）……69
第48図　第10～13調査区ＳＤ－７出土土器（１/４）……70
第49図　第13調査区ＳＤ－８出土土器（１/４）……71
第50図　第13調査区ＳＤ－８出土土器（１/４）……72
第51図　第13調査区ＳＤ－８遺構・遺物検出状況（１/80）……73
第52図　ＳＤ－８出土木器（１/８）……75
第53図　第９～13調査区遺構外出土石器（１/３・１/４）……76
第54図　半島系の土器（１/３）……78
第55図　半島系の土器（１/３）……79
第56図　銅鏃（２/３）……83
第57図　玉類（２/３）……83
第58図　旧石器時代の石器（２/３）……85

図 版 目 次

巻頭カラー①　調査前西南方向より
巻頭カラー②　ＳＤ－３出土の扉
巻頭カラー③　韓半島系土器
図版１　ＳＤ－２・３遺物出土状況 ……113
図版２　ＳＤ－３遺物出土状況 ……114
図版３　扉材の出土状況 ……115
図版４　古墳～古代の遺構 ……116
図版５　第５調査区の古代の溝・杭列 ……117
図版６　第９調査区ＳＤ－４遺物出土状況 ……118
図版７　第10調査区ＳＤ－５（ＳＤ－４と同）遺物出土状況 ……119
図版８　第10調査区検出のＳＤ－７，第13調査区のＳＤ－８ ……120
図版９　第13調査区ＳＤ－８遺物出土状況 ……121
図版10　出土土器（甕・壺類） ……122
図版11　出土土器（壺・甕類） ……123
図版12　出土土器（甕・鉢類） ……124
図版13　出土土器（壺類） ……125
図版14　出土土器（鉢・坏・器台） ……126
図版15　出土土器（器台・坏） ……127

表　目　次

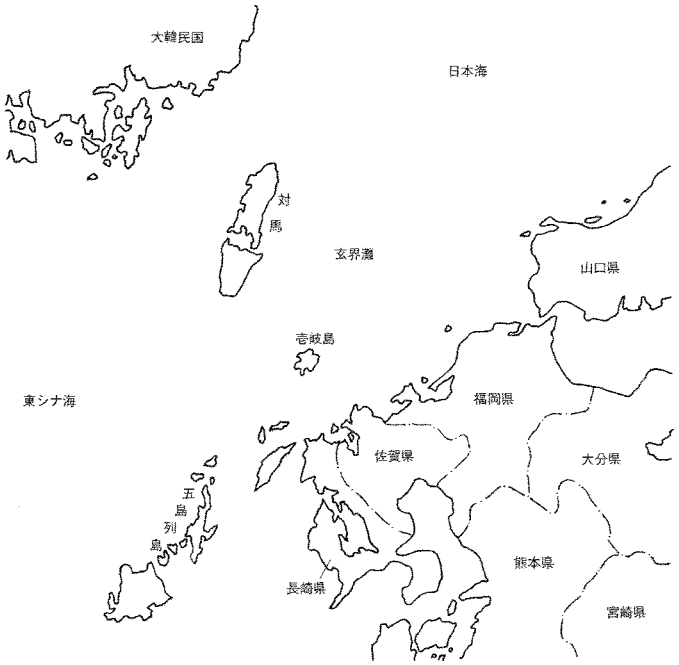
表１　ＳＤ－２出土土器観察表……43
表２　ＳＤ－２出土土器観察表……44
表３　韓半島系土器観察表……81

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

九州の北西海上の玄界灘に位置する壱岐は，対馬及び福岡県博多まで約68km，壱岐から佐賀県呼子までは約26kmの距離に位置する。晴れた日には遥か朝鮮半島を遠望できるこの島は，対馬と並び国境の島と呼ぶに相応しい。南北約17km，東西約15kmのやや南北に長い本島の他，多くの小島から成る総面積約138.8m²，人口約３万４千人の島である。本土との交通手段としては海上交通が主で，福岡県博多まではフェリーで約２時間半，ジェットフォイルで約１時間，佐賀県呼子港までは約１時間で結ばれている。長崎県には直通の交通手段が壱岐－大村間の空路以外にはないため，行政区分としては長崎県に属しているものの，経済的・文化的には福岡県との関係が深い。

島の地形は全体的になだらかな溶岩台地で，高度100mを越す山地が占める面積は極めて小さく，壱岐で最も高い岳の辻でも標高213mで，険しい山々からなる対馬の風景と比較すると対照的である。島の基盤は古第三紀層で，玄武岩がその表面を覆い，弥生時代以降箱式石棺や古墳の石材としてよく利用されている。島の西から東にかけて島内最大の河川である幡鉾川（全長8,834m）が流れ，その下流には沖積平野としては県下最大の平野である深江田原が広がる。海岸線は入りくんでおり天然の良港を形成している。西海岸は出入りが激しいが，東海岸は比較的緩やかで砂浜も多く海水浴場が点在する。『魏志』倭人伝の中で３世紀頃の壱岐の様子を「…やや田地があり，田を耕してなお食べるには足らず…」という記述があるが，この深江田原は県内有数の穀倉地帯であり，原の辻遺跡はこの平野の中にある。



第１図　壱岐島の位置図

2．歴史的環境

朝鮮半島・九州本土を行き来する際に，その中継地としての性格を持つ壱岐は，対馬と並んで古来より交通・交流の要衝であり，また防衛の拠点としての役割も担っていた。

壱岐についての文献上の初見は3世紀の歴史書『三国志』の魏書東夷伝倭人の条，つまり「魏志倭人伝」に邪馬台国などの諸国とともに登場するが，壱岐島における人類の足跡は，旧石器時代にまで遡ることができる。ここでは弥生時代を中心に，旧石器時代以降の壱岐島がどのような活動が行われていたのか，また朝鮮半島・大陸とどのような交流が行われていたかを述べてみたい。

壱岐島における旧石器時代の遺跡は，原の辻遺跡をはじめ，カラカミ遺跡・興触遺跡など島内の数ヶ所において見られる。出土遺物としては，ナイフ形石器・台形石器・細石器を中心としている。この他ナウマン象の臼歯なども出土している。

縄文時代の遺跡は沿岸部に集中的に立地しており，これは漁労や採集を中心とした生活を送っていたことを裏付けるものと考えられる。代表的なものとしては，松崎遺跡・鎌崎遺跡・名切遺跡などで，これらの遺跡は大潮前後の干潮時にだけ姿を現す潮間帯遺跡である。大半の遺跡は島の西側に分布する傾向にあったが，近年では石田町の大久保遺跡など東側でも縄文時代の遺跡が発見・調査されている。

弥生時代の遺跡は島内で66カ所確認されており，遺跡の分布は稲作など農耕社会へ移行したことを裏付けるかのように島の全域にわたり分布しており，漁労・採集に依存していた縄文時代の遺跡の多くが沿岸部に分布しているのと対象的である。『魏志倭人伝』の中では，壱岐は「田畑もなくはないが，農耕だけでは食糧の自給ができず，そこの人々も南や北に海を渡って穀物を買い入れている」と紹介されている。代表的な遺跡としては，原の辻遺跡・車出遺跡・カラカミ遺跡などがあげられる。

原の辻遺跡の発見・報告は古く，大正時代から昭和初期にまで遡る。平成5年以降本格的な調査が始まり，多くの遺構や遺物が発見されている。原の辻遺跡の出土遺物の特徴としては，無文土器や三韓系瓦質土器・楽浪系土器など朝鮮半島系の土器が多く見られることがあげられる。また貨泉・五銖銭・大泉五十などの中国の貨幣や中国製の鏡など各種の金属製品が多く出土することは，『魏志倭人伝』が伝える「南北市糴（なんぼくしてき）」という言葉のとおり海を越えての活発な交流が行われていたことを物語っているようである。

車出遺跡は壱岐島のやや南西，幡鉾川上流の穀倉地帯に位置し，付近には『延喜式神名帳』に記載された旧式内社の天手長男（あまのたながお）神社のある鉢形山がそびえ，その頂上部からは延久三年（1071年）銘の国重文に指定されている滑石製の如来像が出土している。多くの土器類や石器類が出土しているが，丹塗磨研土器の壺や小型供献土器などの出土や，後漢鏡片が火にあたった状態で出土していることなどから，祭祀的な性格も考えられる。また，土器溜まり状の窪地から小型倣製鏡が一面出土し，周囲からはガラス小玉や瑪瑙（めのう）玉，管玉などが出土している。ここには大型の甕がつぶれるようになっていたことから墓地が存在していた可能性もる。一支国の拠点集落の一つとしてこの辺りにも有力者が存在し，北から南に湾入した半城湾からの外敵の侵入に備える役割を果たすと共に，対外交流にも一役買っ

ていたのではないかと推測される。

カラカミ遺跡は中央部やや西側，標高80メートル程の丘陵に位置し面積は約５ヘクタールと確認されている。地形的には遺跡の東側と南側は刈田院川により浸食された急な崖になっており天然の要害となっているが，北側と西側は比較的緩やかな地形のため，防御のために環濠が巡っていることが確認されている。時期は原の辻遺跡同様に弥生時代前期（紀元前２世紀）から後期（紀元３世紀）にかけて最盛期を迎えていたようである。出土遺物としては，土器・石器・鉄器・骨角器など各種遺物が大量に出土しているが，特徴的なものとしては鯨の骨で作ったアワビ起こしや釣針・銛・石錘など漁労的な性格を持つ遺物があげられる。また朝鮮半島製の土器や，占いをする際に用いられたのではないかと考えられる卜骨などが出土している。このことからカラカミ遺跡は，規模としては原の辻遺跡には及ばないものの，漁労を中心とした生活をし，大陸との交流を活発に行っていた集落であったのではないかと推測される。

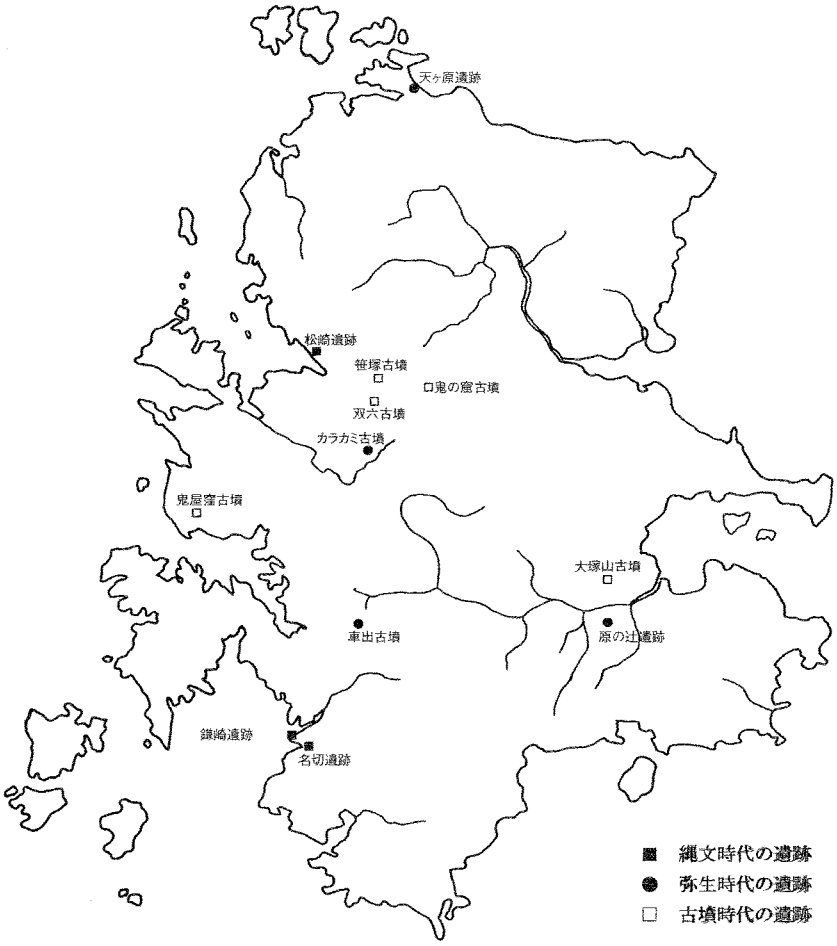
壱岐島の弥生時代の遺跡として前述した３つの遺跡は，いずれも内陸部に位置する遺跡であるが，海岸部にも多く見られる。中でも壱岐島の北部，勝本町に位置する天ヶ原遺跡が注目される。ここでは海岸線の護岸工事中に銅矛が３本同時に出土した。隣の対馬では120本を越す銅矛が発見されているが，壱岐で銅矛が出土することは珍しい。天ヶ原遺跡がある勝本町は壱岐島の最北端で，古代より海外交流に際しての最重要寄港地と位置づけられていることから，大陸に向かって出立する船の航海安全を祈願するために一括して埋納されたのではないかと考えられる。

古墳時代になると壱岐には多くの古墳が築造され，現在でも長崎県全体の約半分の250基以上確認されている。最も早いのが５世紀後半に築造されたものと考えられる大塚山古墳で，深江田原の北側の標高74メートルの山頂部に位置している。その後約１世紀の空白を経て６世紀の後半には，分布の中心は国分地域に移り，多くの古墳が築造されるようになる。金銅製の飾り金具をつけた馬具が出土した笹塚古墳や，隋の二彩・新羅土器が出土した双六古墳などから判断すると，弥生時代と同様に朝鮮半島との結びつきが強かったようである。また，石室内部に船や捕鯨の線刻絵画を持つ古墳もあり，海との結びつきが深かったことを示している。

律令制度下において壱岐は対馬とともに下国とはいえ一つの国としての扱いをうけている。そのため国分寺が設置されることになったが，経済的な理由のためか在地豪族である壱岐直の氏寺を国分寺に転用した旨が『延喜式』に書かれている。ここで用いられていた瓦が平城京の瓦と同笵であることから，壱岐直は中央との結びつきが強かったことがうかがえる。この時代は対外的な動きも活発で，遣新羅使が始まり，９世紀まで派遣された。

壱岐島は国境に近いため，対馬とともに文化交流の窓口としての役割を担うが，一旦大陸との関係が緊張状態になると状況は一変する。663年の白村江の戦後，唐・新羅の侵入に備えて防人が派遣され，烽火を置いた。その後律令体制の崩壊とともに中央政府の外敵に対する防衛意識が希薄になるにつれ，９世紀の後半から壱岐島はたびたび襲撃を受けている。特に1019年には中国東北部に拠点を持つ女真族刀伊の襲撃を受け，国司藤原理忠までが戦死するという甚大な被害を受けている。

中世は，元による文永の役（1274）・弘安の役（1281）があり，大きな被害を受けた。また倭寇の活動が沿岸部で目立つようになり，特に壱岐で大きな勢力を持つことになったのが松浦党で，松浦党五氏による分治がおこなわれた。しかし，15世紀後半には肥前上松浦の岸岳城主波多泰が壱岐に攻め込み松浦党五氏を降伏させ，波多氏による壱岐統治が始まった。その後は波多氏の内紛や波多氏と家臣である日高氏の対立が続き，平戸の松浦氏と組んだ日高氏が波多氏を破り，日高氏が松浦氏に従属したことから壱岐は明治を迎えるまで平戸藩松浦氏が領有した。（小玉）



第２図　島内遺跡分布図

【参考文献】

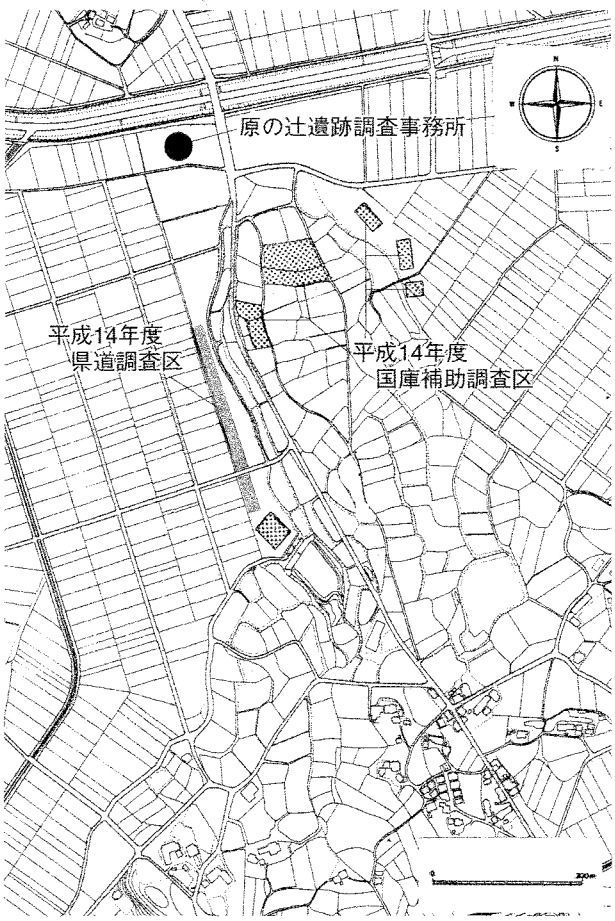
長崎県教育委員会1996『原始・古代の長崎県』資料編
唐木田芳文・早坂祥三・長谷義隆編1992『日本の地質９　九州地方』共立出版
宮崎貴夫2002「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第４号
山口麻太郎1982『壹岐國史』

第Ⅱ章　調査にいたる経緯・概要

1．調査経緯

主要地方道勝本石田線は現在，原の辻遺跡の丘陵部西側を南北に走っているが，道幅が狭いことや道路の老朽化が目立ち，改良工事に取り組むこととなった。改良工事について当初は，既存の高台部分の道路を拡幅する案もあったが，遺跡の中央であることから台地西側の低地部に建設することとなった。平成７年に壱岐支庁建設部建設課から基本設計が提出され，文化財の調査について協議がなされた。文化課としては，丘陵部から遠隔の地に道路を取り付ける案を当初出したが，現在の道路が以前からの道路で大幅な路線変更が無理とのことであった。

その後の何回かの協議をおこない，丘陵下に路線を取り付けることとなった。なお，道路の施設については，遺跡と道路の調和を考えていくことが今後必要になってくるものと思われる。

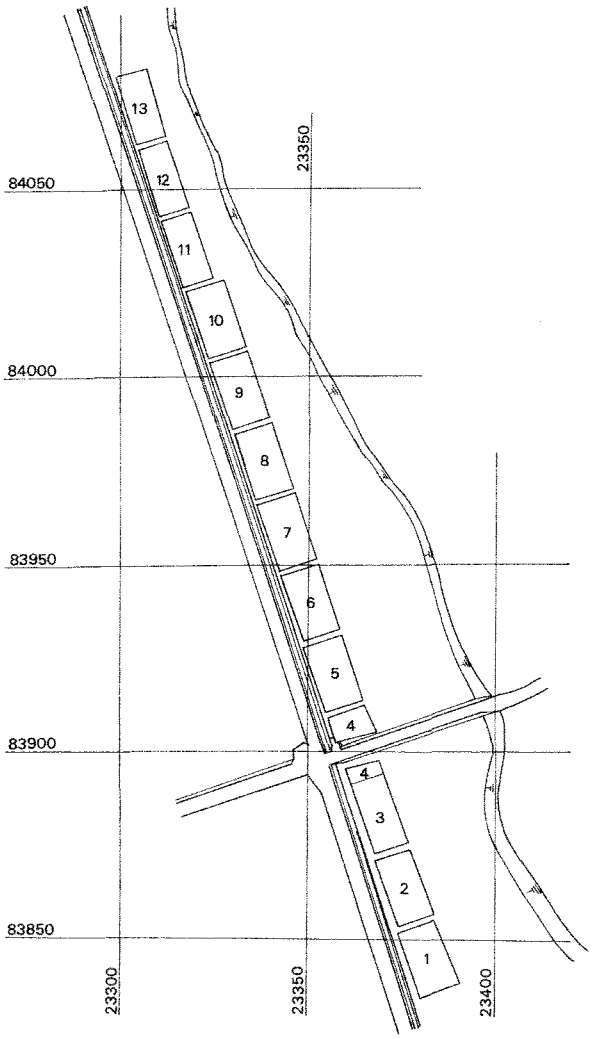


第３図　調査区位置図（１/10,000）

道路建設に伴う文化財の調査面積については，約20,000㎡の調査が必要となった。調査は平成14年度から実施することとなり，用地買収の関係から八反地区の南側から調査に入ることとなった。調査については，原の辻遺跡調査事務所がこれをおこない，業者がこれを補佐することとなった。

2．調査概要

調査は南側から道路予定幅に沿って南北20ｍを１調査区とし，調査区間に１～２ｍ幅のベルトを残して第13調査区まで設定した。また，調査区中央にも幅50㎝のベルトを設定した。当初は，調査幅については道路予定幅までの調査を考えていたが，農道脇にある水路が現在も使用されている関係から予定道路幅全体を調査することはできなかった。水路部分については壱岐支庁道路班との調整の上で最終年度に調査することで合意を得た。調査区は南側から第１調査区とし，第１調査区から北側に向かって調査をおこなった。今回の調査区周辺は，東側に平成13年度特定調査（2002，安楽編）・平成13年度国補調査（2002，町田編）・平成13年度緊急雇用調査（2002，小石編），西側に平成11年度農道調査区（2002，村川・西編）との間に位置する。以前の調査で溝・旧河道等がすでに検出されていることから，今回の調査は，検出遺構の繋がりや広がりを追認する形の調査となった。遺物の取り上げ



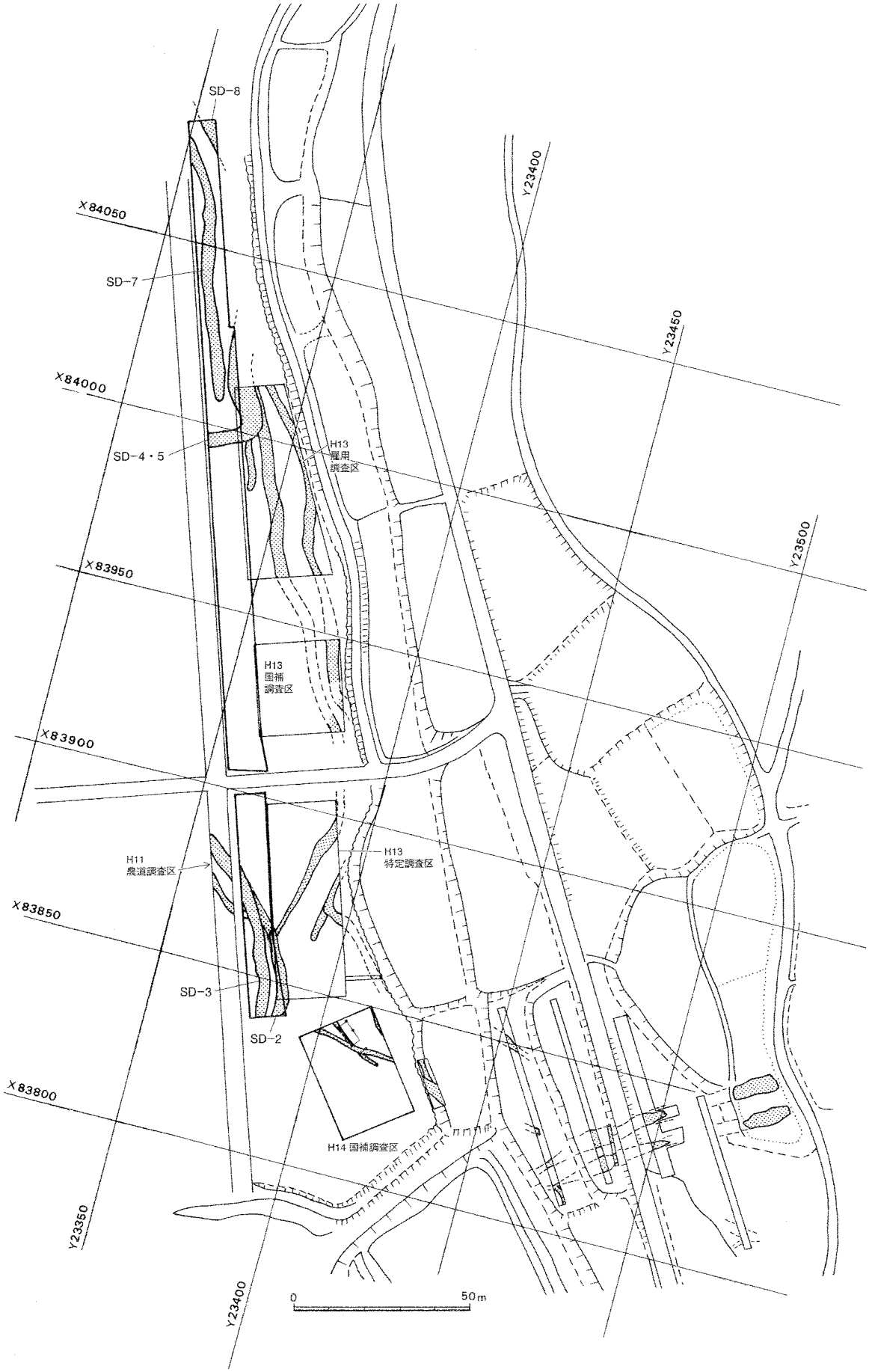
第４図　調査区配置図（１/2,000）

については，調査時に重要と思われる遺物については座標をもとに取り上げ，その他の遺物については座標杭をもとに５×５ｍの小調査区ごとに一括取り上げをおこなうこととした。調査区が幅約10ｍで第13調査区までと細長い調査区となることから，報告については遺構との絡みもあり，第１～４調査区・第５～８調査区・第９～13調査区の調査という形で報告する。以下，調査区ごとに概要を説明する。

第１～４調査区は，第４調査区が農道下にかかることから，第４調査区の北側が一部農道の北側に位置するという変則的な調査区となった。遺構は，第１調査区でＳＤ－２とＳＤ－３の溝を確認し，この溝が第２・３調査区まで続くことを確認した。ＳＤ－２については，平成13年度の調査で確認されたＳＤ－２と同じ遺構で，弥生終末から古墳時代初頭の遺物が多量に出土している。

ただしＳＤ－２の一部については，構築時期がさらに古いものと判断した。ＳＤ－３は，第２調査区で西側に蛇行し，第３調査区の南隅で農道側に入り込む。時期的にはＳＤ－２の上部の遺物と大過ないことから，ほぼ同時期のものである。この溝の上に堰を造るなど，古墳時代初頭にいくらか手が加えられている。第３調査区の北側では古墳時代の足跡状遺構を検出した。また，**第４調査区**では古代の祭祀に関連すると思われる座標軸の南北方向に並ぶ緑釉陶器・土師器群を検出した。

第５～第８調査区では第４調査区で確認した古代の遺構に伴う杭列・溝を検出した。この区域については，以前の調査でも弥生に関連する遺構は検出されていない。出土する土器が摩滅していることから，後世の削平や，水つきの場であったと思われる。**第９～第13調査区**では旧河道・溝を検出した。旧河道は平成13年度緊急雇用の調査で確認されたＳＤ－８が，北側に延びることを確認し，これをＳＤ－４・５とした。ＳＤ－４・５は，第10調査区で丘陵側に一端入り込み，第13調査区で確認したＳＤ－８に繋がる可能性が高い。第10調査区から第13調査区にかけては，ＳＤ－７・８を確認した。ＳＤ－７については遺物の出土は少ないが，後期初頭の丹塗り壺などが出土することから弥生後期初頭の溝と判断した。ＳＤ－８については，先述したように，ＳＤ－４・５に通じるものと判断した。また，ＳＤ－８の縁に重なるような溝を１条検出している。遺物から弥生中期後葉のものと思われ，さ



第５図　原の辻遺跡丘陵西側の遺構配置図

らに一段階古い溝があったことが判明した。以上のように今回の調査では，弥生時代後期終末から古墳時代前期の溝３（ＳＤ－２上面，ＳＤ－３），弥生後期？の環濠１（ＳＤ－２の下部），弥生中期から古墳時代初頭の旧河道２（ＳＤ－４・５，ＳＤ－８），弥生時代後期初頭から後葉の溝１（ＳＤ－７）を検出した。旧河道については，いくつもの時期に跨って遺物が検出される傾向にあり，長い間川として存続していたことが推定できる。この他古代の溝，古墳時代初頭や古代の足跡状遺構なども確認している。弥生時代のみに限定できる遺構としては，環濠と溝，各１条づつであったが，これらの遺構についても，特に古墳時代前期に再度使用されていた痕跡がある。遺物も古墳時代前期の遺物がかなり出土することから，原の辻遺跡の古墳時代前期の遺跡利用についても考慮する必要がある。また，旧河道が２本特に，今回の調査では灌漑施設については弥生時代に比べ技術的が進歩していたことを表すかのように，丘陵部際まで水田址に関連すると思われる遺構が検出されている。これは，環濠の機能が衰退するとともに，埋没した窪地を灌漑施設への転用した結果である。

また，古代・中世になるとさらに丘陵側から造成をおこなうなど，水田開発が著しかったことが考えられる状況にあった。それぞれの遺構についての詳細は，第Ⅲ章のそれぞれの遺構の項で説明する。

第Ⅲ章　調査と出土遺物

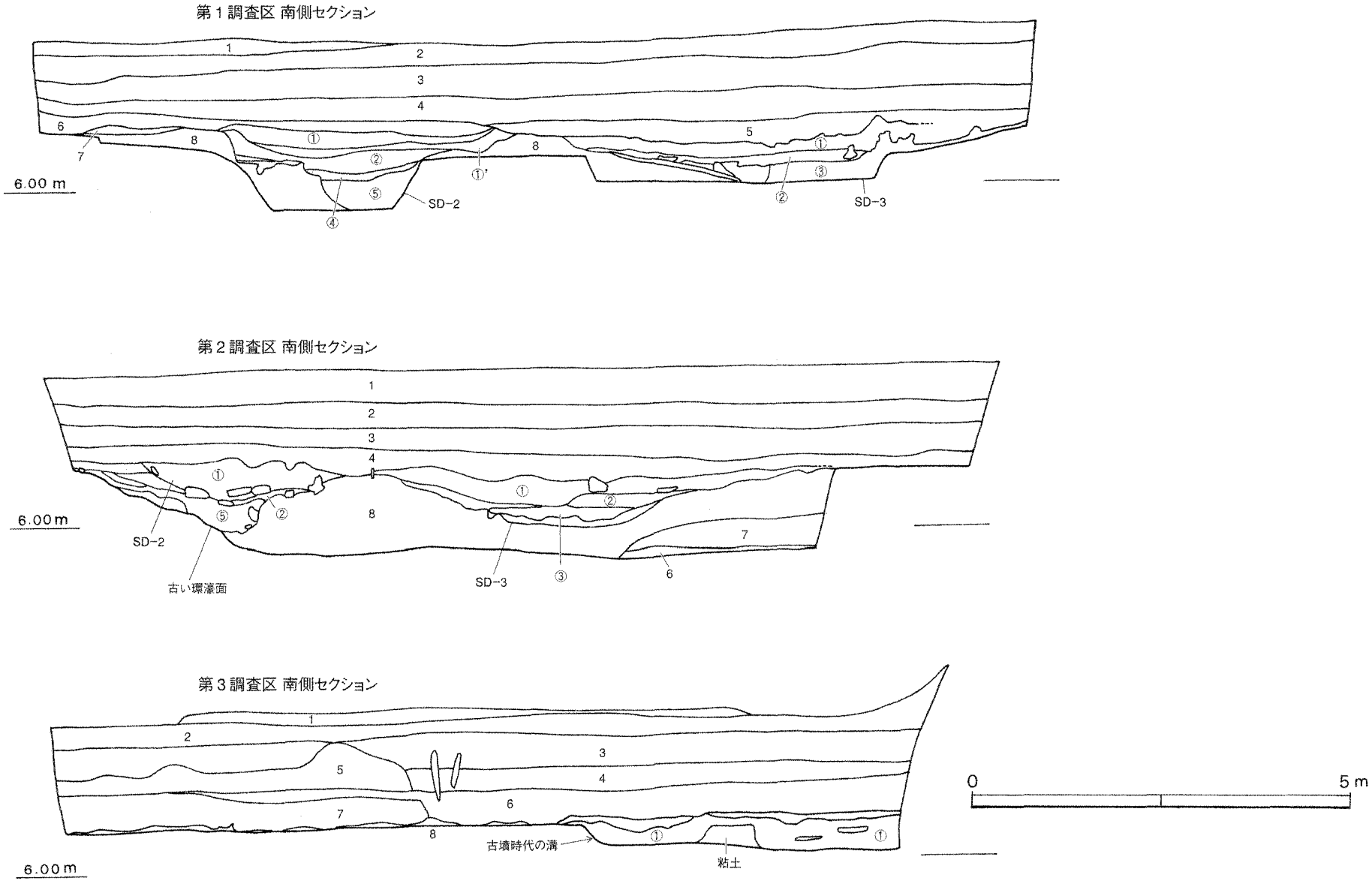
１．第１調査区から第４調査区の調査

(1) 土層（第６図）

第１調査区～第３調査区の南側のセクション図について説明する。各セクション図には溝ＳＤ－２・３が断面に観察される。１層から４層においては近世から古代までの層が堆積しており，遺構の検出面は表土下約１ｍにある灰白色の粘土層上にある。今回の調査区での遺構検出面までの土層変化は少ないが，一部中世の削平面や，古代の削平面があり，古墳時代から弥生時代の面が消滅する調査区も見受けられる。全体的に土壌は粘質であり，水田として利用され続けた痕跡を残す。弥生時代の水田面については，標高が一段低い西側部分に造られたものと思われ，これまでの弥生時代の畦畔等の検出例でも，今回の調査区より一段低い西側に水田面を確保しているようである。

第１調査区南側のセクション

１層表土，２層赤褐色粘土層で近世の水田面と思われる，３層は灰赤褐色土で，中世の水田面と考える。粘土質で，赤褐色の鉄分と思われる斑が多量に入ることから，水田として利用されていたのであろう。この面にも南北方向に杭列が検出される。４層は灰褐色粘質土で，各調査区で検出される層である。中世から古代の層と思われる。５～６層を下げると灰白色の粘土層である８層が確認され，この面が古墳時代前期からの遺構の検出面にあたる。ＳＤ－２内の覆土について説明する。①層は，黒褐色土で粘質をもった層である。弥生終末から古墳時代前期の遺物が多量に出土する。カーボンも多量に出土するなど，生活用品を一括して投げ込んだ状況を呈する。ＳＤ－２の上位に堆積する層で，弥生終末から古墳前期にかけて溝として利用したときの堆積物。①｀層は①層に似るが，やや締まり



第６図　第１～３調査区土層図（１/60）

があり炭化物を含まない。②層は灰褐色砂層で①①`層と③層との間層となる。遺物はほとんど含まれていないが，炭化物・流木等が散見される。②層の状況は，③層の堆積後に砂が堆積する環境が一時期あったことを表している。砂はやや粗いが，水の流れがあったことを彷彿とさせる。③層は暗茶褐色の粘質土で，粘性が強く小枝などを若干含む。平成13年度の調査ではこの層から，弥生時代後期中頃から後期終末の土器が出土している。今回は，手斧の柄，建築部材が出土しているが，土器の出土はない。この層がＳＤ－２の基底部で，今回土器の出土はなかったが，前回の調査で弥生後期中頃の遺物が出土していることから，ＳＤ－２の上限をこの時期に比定できるものと考える。ＳＤ－３の土層は，上部はＳＤ－２と同様であるが，浅い溝状を呈している。遺物量もＳＤ－２に比べ少なく，流木が多いなど水が流れていた状況を呈する。

これらのことから，①層は弥生終末～古墳時代前期の堆積物で③層は弥生時代後期中頃の堆積物と考える。その間に②層の砂が堆積していることから，ここに一定の時間幅があったと捉える。また，ＳＤ－２は，弥生時代後期中頃か，それ以前の構築物と判断できよう。

第２調査区の南側セクション

１層～４層は基本的に第１調査区と同じで，ＳＤ－２・３のセクションが観察される。ＳＤ－２の基底部はこのセクション付近で立ち上がって消滅することから，底の部分ではＳＤ－３の底のレベルとほぼ同一レベルとなっている。また，このセクション付近は，再掘削のＳＤ－２上位（弥生終末から古墳前期）と，ＳＤ－３との合流地点にも近い。ＳＤ－２のセクションからは，上位①層と③層との間には幾つかの間層が見られることから，いくらかの時間幅があったことが確認でき，弥生後期中頃と弥生終末・古墳前期の間層として捉えた。

第３調査区の南側セクション

この調査区も第１・２調査区とほぼ同じ様相を呈している。ただし，古墳時代のＳＤ－３の分岐点が確認されることから，下層の層位について説明を加える。①層はＳＤ－２・３の①層に対応する。セクション図西側中央部の下部に粘土帯が観察されるが，これは古墳前期の粘土貼り付けで，第２調査区で確認した堰遺構に関連するものである。東側の①層が堰に関連する溝である（第10図）。西側の地山は灰褐色の粘土と，スコリア状の堆積物が確認され，本来の地山と思われる。

第４調査区は，北側のセクションを示した。第１～第３調査区の層位に古代の層，３ａ層が加わる。３ａ層は第３調査区の北側から検出されはじめ，北側にいくにつれて顕著となる。３ａ層はやや砂質気味で，この層上から杭列を多数確認している。地山直上にはＳＤ－２・３の①層と同じ黒褐色の粘質土が乗る。この層は第３・４調査区で検出された足跡状遺構の充填土と同質であることから，足跡状遺構を古墳時代のものと判断する手がかりとなった層である。

第１～第４調査区の土層要点

・古墳時代前期から弥生時代終末の遺構検出面は灰褐色粘土層である。
・古墳時代前期・弥生時代終末の包含層は，基本的に漆黒色粘質土である。
・灰褐色粘土層下に有機物を含む粘土層があり，地山は砂礫層となる。

・地山とした砂礫層には，弥生中期中葉から後葉の土器が貼りついていることから，この時期に丘陵南側は河川流れがあったものと推定できる。

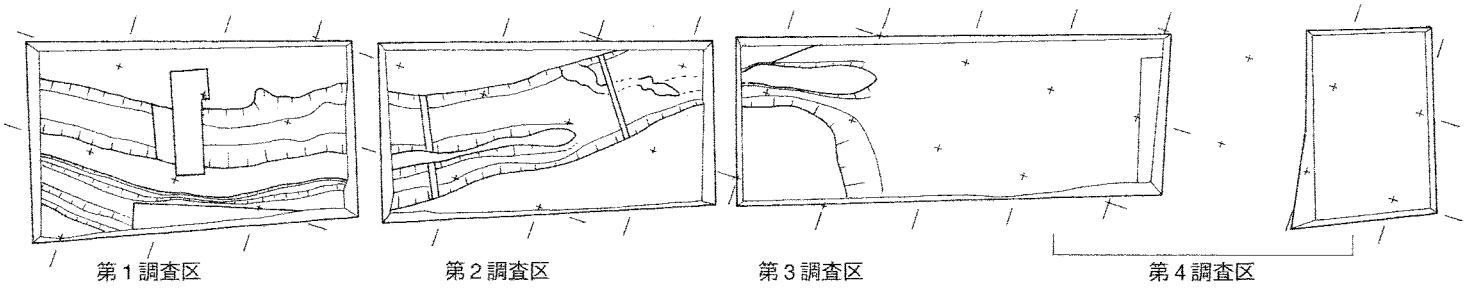
課題

・砂礫層下までの調査をおこなっていないことから，砂礫層下にどのような時代が想定できるか判明していない。

(2) **遺構**（第７～12図）

ＳＤ－２（第８図）

平成13年度特定調査でＳＤ－２が検出されており，ＳＤ－２の西側の部分が今回の調査で検出されることが予想された。このことから，今回の調査でも遺構番号については，平成13年度のＳＤ－２を生かしていくこととした。今回検出した溝の幅は，ほぼ３ｍ，深さ1.2mで，２段掘りの様相を呈していた（第６図）。２段掘りで逆台形を呈することから人為的に掘削した濠として捉えた。遺物は遺構上位にほとんどが集中しており，環濠であるＳＤ－２が埋没していく段階で，溝状の流れの中に弥生の後期終末から古墳時代前期に遺物を一括廃棄したことが遺物の出土状況や層位から確認された。土層の項で触れたように，環濠の構築時期については③層からの土器の出土がなく不明である。平成13年度の調査では，最下部の③層から後期中頃の土器が出土していることから，いまのところ，この時期，あるいはそれより古い時期に構築されたものと判断しておく。上位の弥生時代後期終末から古墳時時代前期の①層からは，弥生時代後期初頭のものもある程度出土していることから，この時期まで遡る可能性も示唆しておく。環濠ＳＤ－２が埋没した後の弥生時代後期終末から古墳時代前期にかけて溝状の流れは，第２調査区でＳＤ－３と合流する。その後合流した溝は古墳時代前期に堰を設けてＳＤ－３と合流させ，第３調査区へ水が流れ込む灌漑施設を構築している。構築期の環濠ＳＤ－２については，第２調査区の南側で急に立ち上がり消滅する。後期終末から古墳時代に使用されたＳＤ－２については，かなり浅いＵ字形のものであり，灌漑用の溝の性格を持っていたものと判断している。ＳＤ－２上部の遺物については古墳時代前期や弥生時代後期終末の甕などを中心に多数出土したが，弥生時代と古墳時代を層位としては分離できる状況はなかった。遺物は，一括して廃棄された状況にあり，なかには祭祀を伴うような行為が看守できる配置を行った例もみられた。第２調査区ＳＤ－２上部の南側では後期終末～古墳時代初頭の遺物が多数出土し，その中に鉢が入れ子状態で出土した例がある。このような行為は，水場の祭祀に関係があるものと判断する。ＳＤ－２の埋没年代を推



第７図　第１～４調査区遺構配置図

定する資料として，出土した炭化物について炭素年代測定を行った結果，1700±40という値が出ていることから，この炭化物については３世紀の終末から４世紀初頭に廃棄されたことが想定でき，遺物もこの間に廃棄されたものがあったことを示している。また，第２調査区の堰遺構の北側からは，地山の層に貼りついたように中期中葉から後葉の土器が出土しており，溝が造られる以前に中期の生活面が存在していたことが想定される。

ＳＤ－２については，平成15年度にこの南側を調査する予定であることから，この下位の環濠の時期等を含め再度検討する必要性を感じた。

ＳＤ－２の要点
・ＳＤ－２は，弥生時代後期の段階に２段掘りで設営された環濠である。
・後期の２段掘りの環濠は，途中（第２調査区南側）で立ち上がる。
・ＳＤ－２は，後期以後自然に埋没し，後期終末から古墳時代前期に溝として再利用されていたが，溝として機能しなくなった段階で遺物を多量に廃棄するようになった。

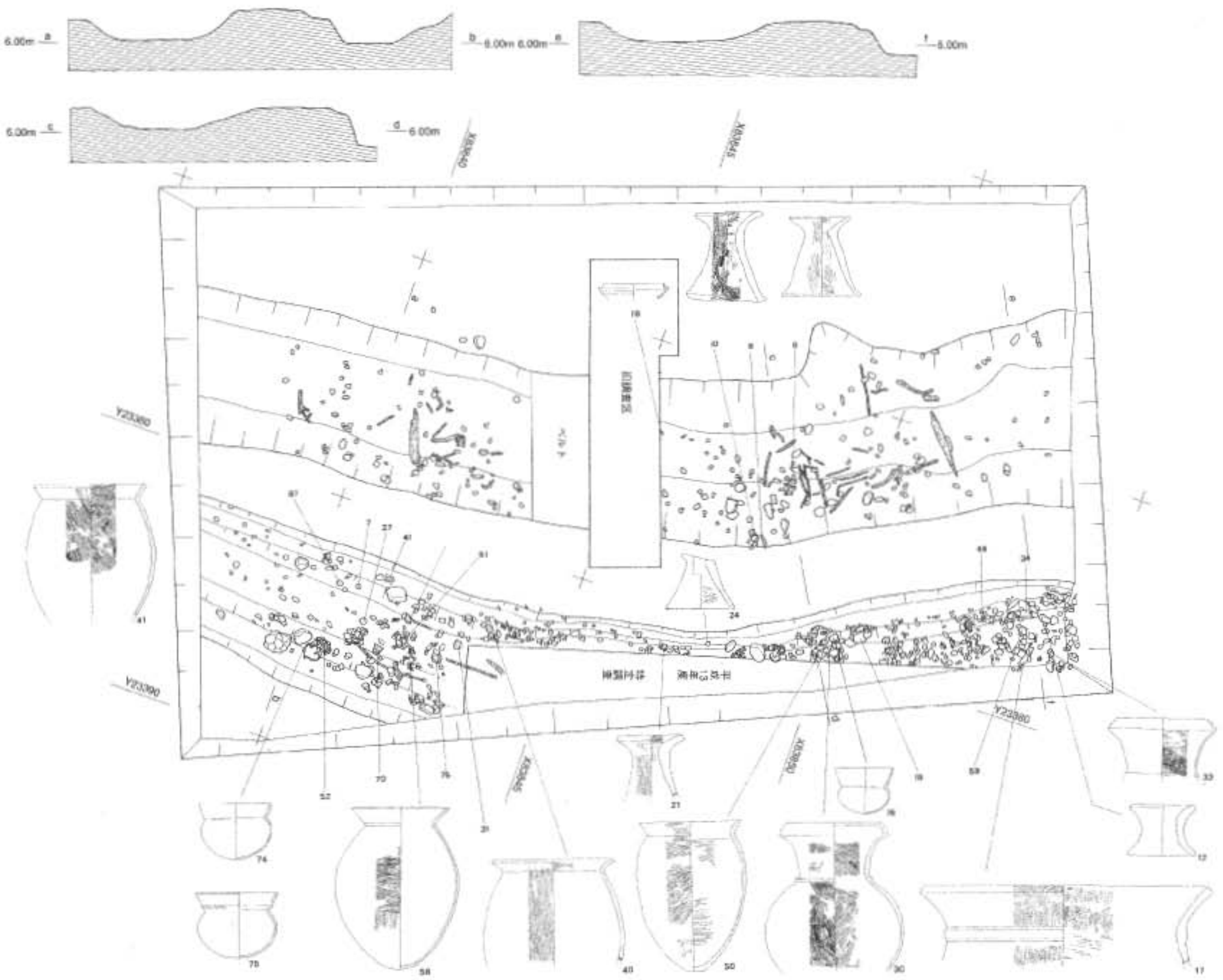
ＳＤ－３（第８・９図）

平成10年度に農道の取り付け工事の際に検出された溝に続く遺構である。ＳＤ－２の西側に並行するように設営された，幅約３ｍ，深さ約１ｍでレンズ状の浅い溝である。遺物はＳＤ－２に比べ散漫的に出土し，流木等が目立つ傾向にある。時期は，ＳＤ－２の上部と同じで，弥生終末から古墳初頭の遺物を多く含む。第２調査区北側では西に蛇行し，農道調査区の溝に繋がっていくが，古墳時代初頭の段階で粘土や扉材を使用して堰を設け，第３調査区の方向に流す施設を造っている。このことから，ＳＤ－３本体は弥生終末から古墳時代初頭の溝として施設され，時間をあまりおかずに古墳時代初頭に堰が設けられたと判断する。流木が多いことや，底に砂層が認められることから水の流れがあったことが推定され，水利施設の機能を持っていたのであろう。遺物的には，鼓型器台・陶質土器・馬韓系土器の出土が特筆される。

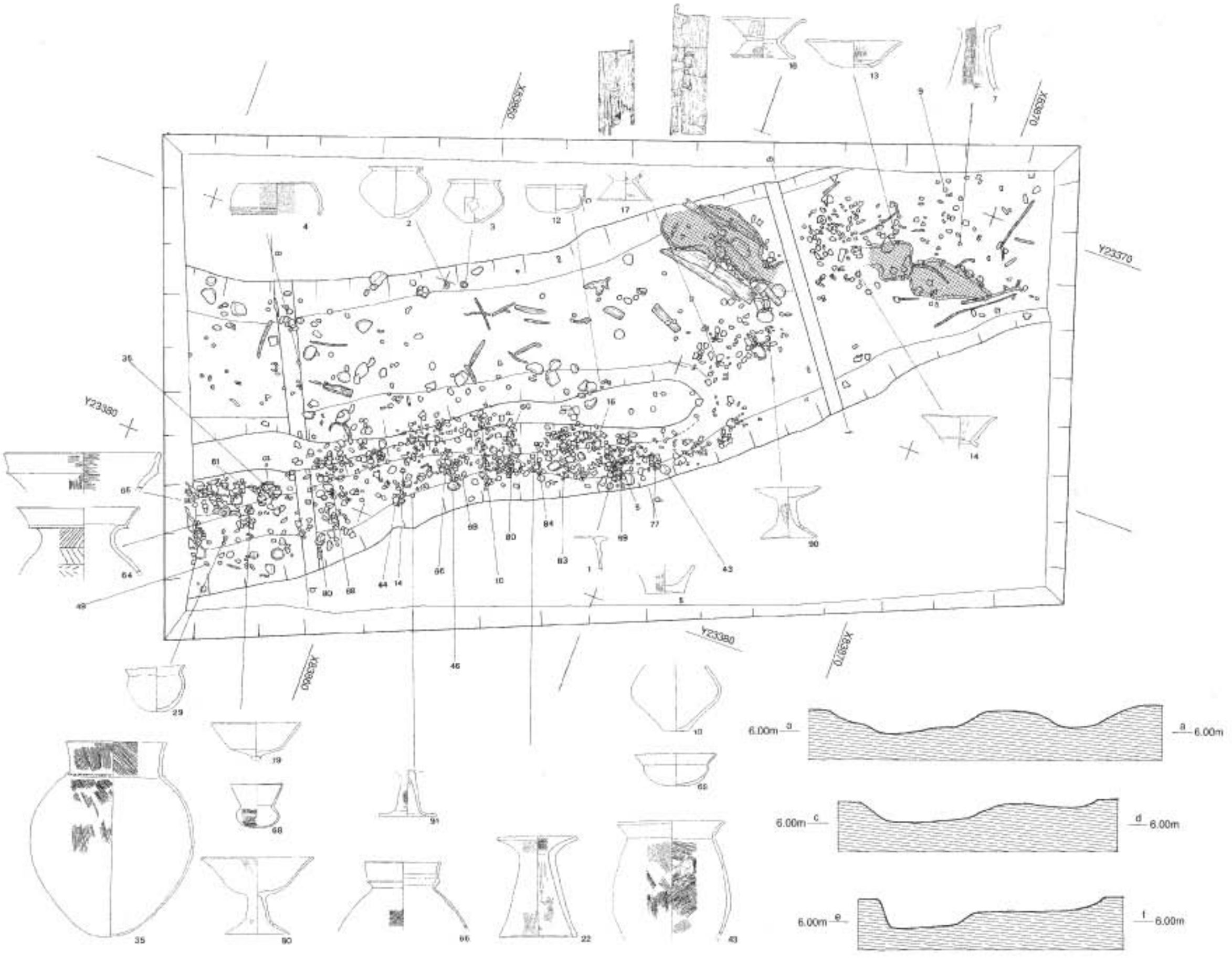
ＳＤ－３の要点
・ＳＤ－３は弥生時代終末から古墳時代前期の溝。
・水の流れがあり，堰を設け，北側に水を確保している。管理が行き届いていたとみえ，SD－３のような，集積するような遺物の出土は見られない。
・自然に埋没したとみられる。埋没後にかなりの踏み跡痕（偶蹄目）がみられることから，古代には水田化していたものと判断する。

堰遺構（第10図）

第２調査区の北側で古墳時代初頭の堰遺構を確認した。北西側に杭を打ち込んで板を置き，板材や大きな円礫を敷いた後，粘土を充填させて堰としている。粘土の厚さは約30㎝で，堰の外側（南東側）に板材や扉を堰に並行して敷いており，粘土の流出を防ぐ効果をねらったものと考えられる。粘土の下や，板材の上に古墳時代初頭の土師器・陶質土器などが出土していることから，この施設が古墳時代前期頃に設置されたことが判断できる。板材は，扉を転用したものが２枚あり，北側の扉は残存状



第８図　第１調査区ＳＤ－２・３遺構・遺物検出状況（１/80）

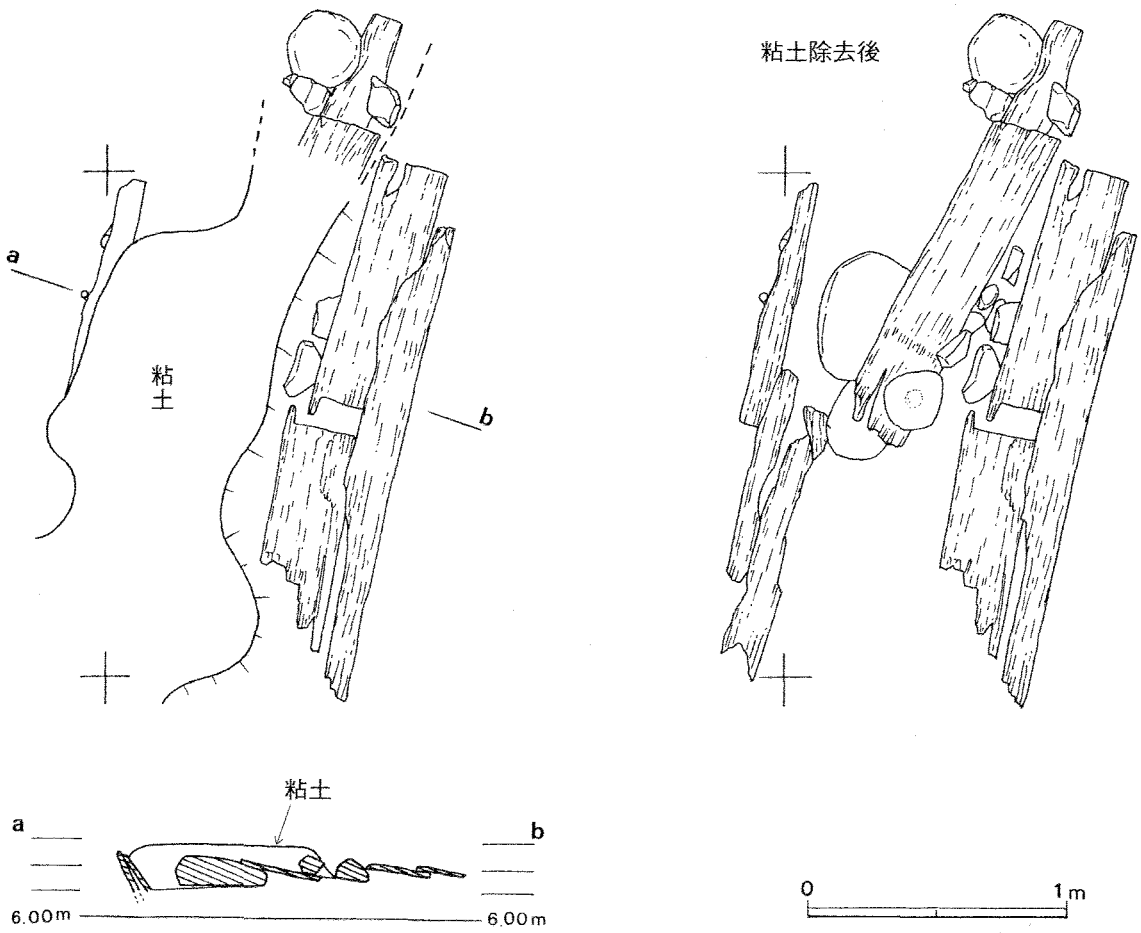


第9図　第2調査区ＳＤ－２・３遺構・遺物検出状況（1/80）

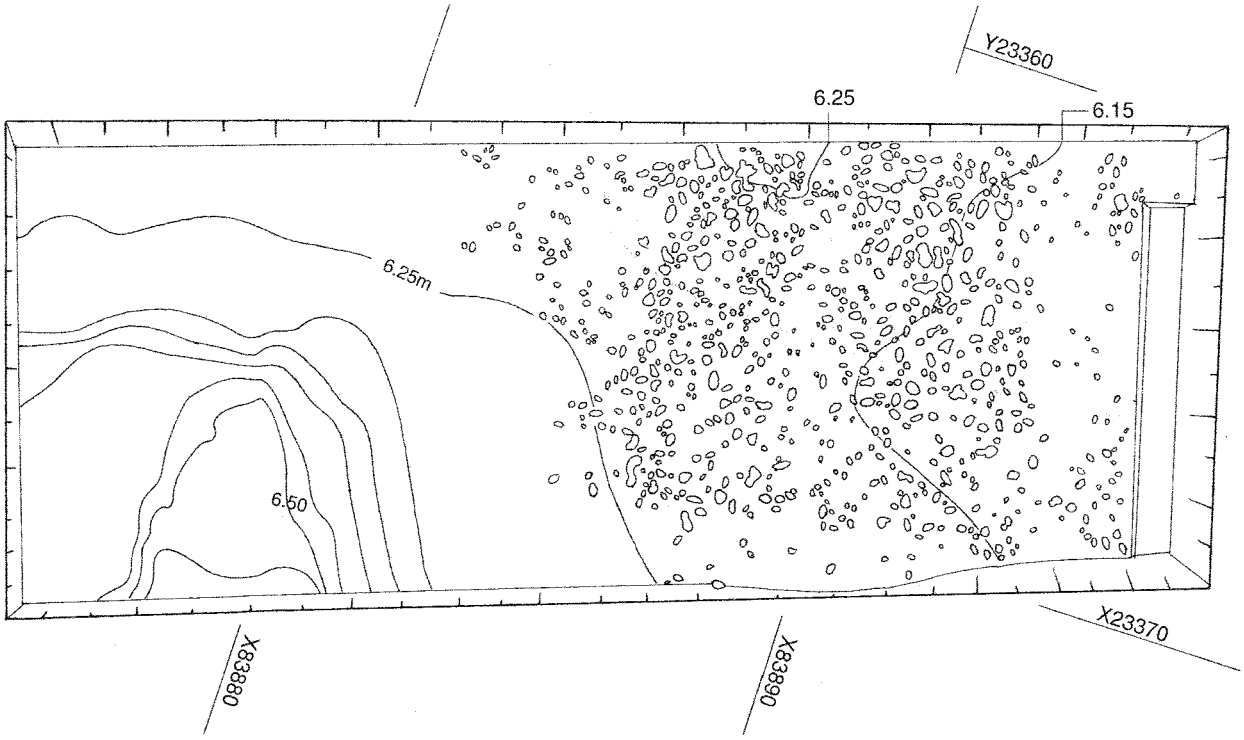
況は良好であるが，南側のものは劣化が激しい。この２枚の扉を裏返しにして，交差させるように配置している。他の板材については扉の前面にある板材が長さ約１m93cm，厚さ１cmを測る。板材の出土はこの付近だけだが，粘土塊は第３調査区にまで及ぶことから，第３調査区北側の足跡状遺構に関連する遺構と考えられる。つまり，本来溝が西側に蛇行して水を供給していたものを，堰を造ることによって北側に水の流れを調節した施設であろうと考える。扉については，（３）出土遺物の木製品の項で説明する。

足跡状遺構（第10・11図）

第３調査区北側から第４調査区にかけて，不定形の小さな落ち込みが確認された。大きさは長さがほぼ15～20cm，幅10cm前後である。充填している土はＳＤ－２・３の①層で確認された漆黒色土である。遺構は，堰遺構との関係が強いものとみて，古墳時代初頭頃ものと判断する。水田との関係が指摘されるところであるが，畦畔等については検出することはできなかった。遺構は足跡の形状を呈するものもあったが，多数は不定形を呈していた。深さは10cm内外あり，かなり軟弱な地盤に足を踏み込んだものと考えられる。第３・４調査区で確認した足跡状遺構は，漆黒色土を充填するものであったが，漆黒色土を充填する足跡状遺構は，この地区に限られた。第５～８調査区でも確認した足跡状遺構は全て円形が基本で，最下部に偶蹄目の足跡が確認される場合が多く，漆黒色土充填のものは古墳時代前期，茶褐色土充填のものは古代のものと判断している。



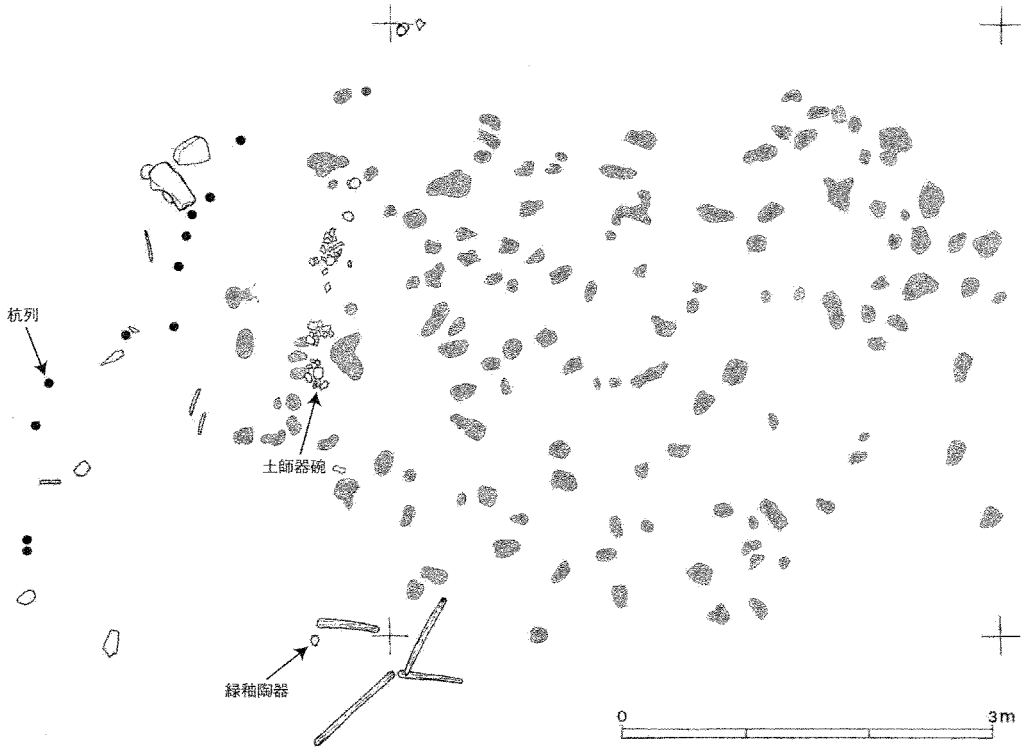
第10図　ＳＤ－３内堰状遺構（１/30）



第11図　第３・４調査区足跡状遺構図（１/150）

足跡状遺構の要点

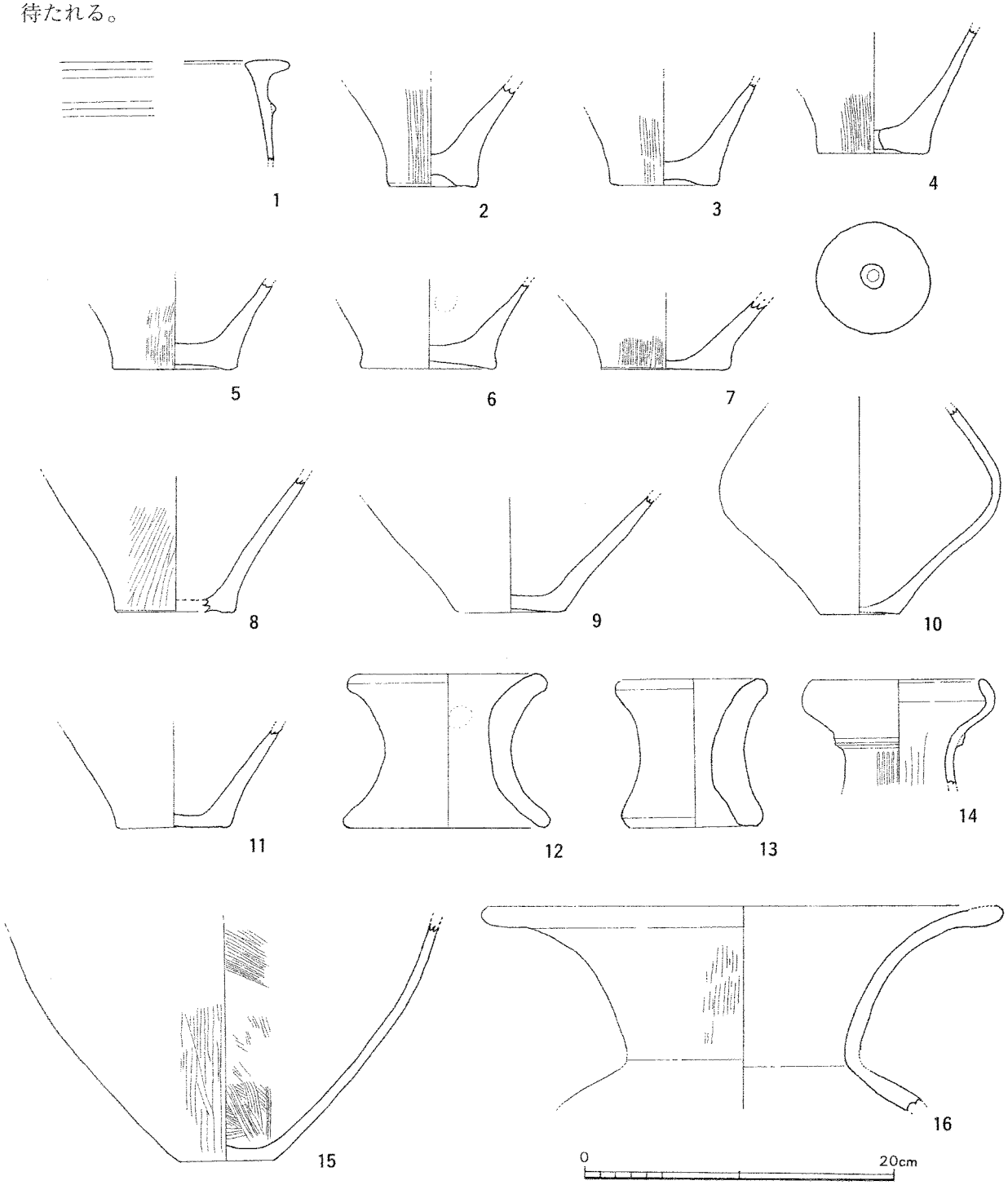
・遺跡全体に広がり弥生の遺構検出面上に形成され，遺構面にまで検出されることから，古墳時代から古代の足跡と思われる。
・足跡は，検出時には丸い形であるが，下部では蹄状になることから偶蹄目の足跡と考えられる
・充填土は２種類，漆黒色土・茶褐色土あり，漆黒色土が古墳時代前期，茶褐色土が古代。



第12図　第４調査区足跡状遺構・土師器・杭列出土状況図（１/30）

古代祭祀遺構（第11図）

第４調査区北側から，ほぼ主軸を南北に取って土師器・緑釉陶器が多数出土した。遺物から９世紀後半から10世紀前半代のものと判断される。周辺には杭列や足跡状遺構も検出され，出土状況から灌漑に関連する祭祀行為と考えられる。遺物の出土軸が南北方向であることは，原の辻遺跡の古代の地割りがこの方向を意識していたのではないかと想像される資料であるが，今後同じ様な資料が検出が待たれる。



第13図　ＳＤ－２出土土器①（１/４）

(3) **出土遺物**（第13図～31図）

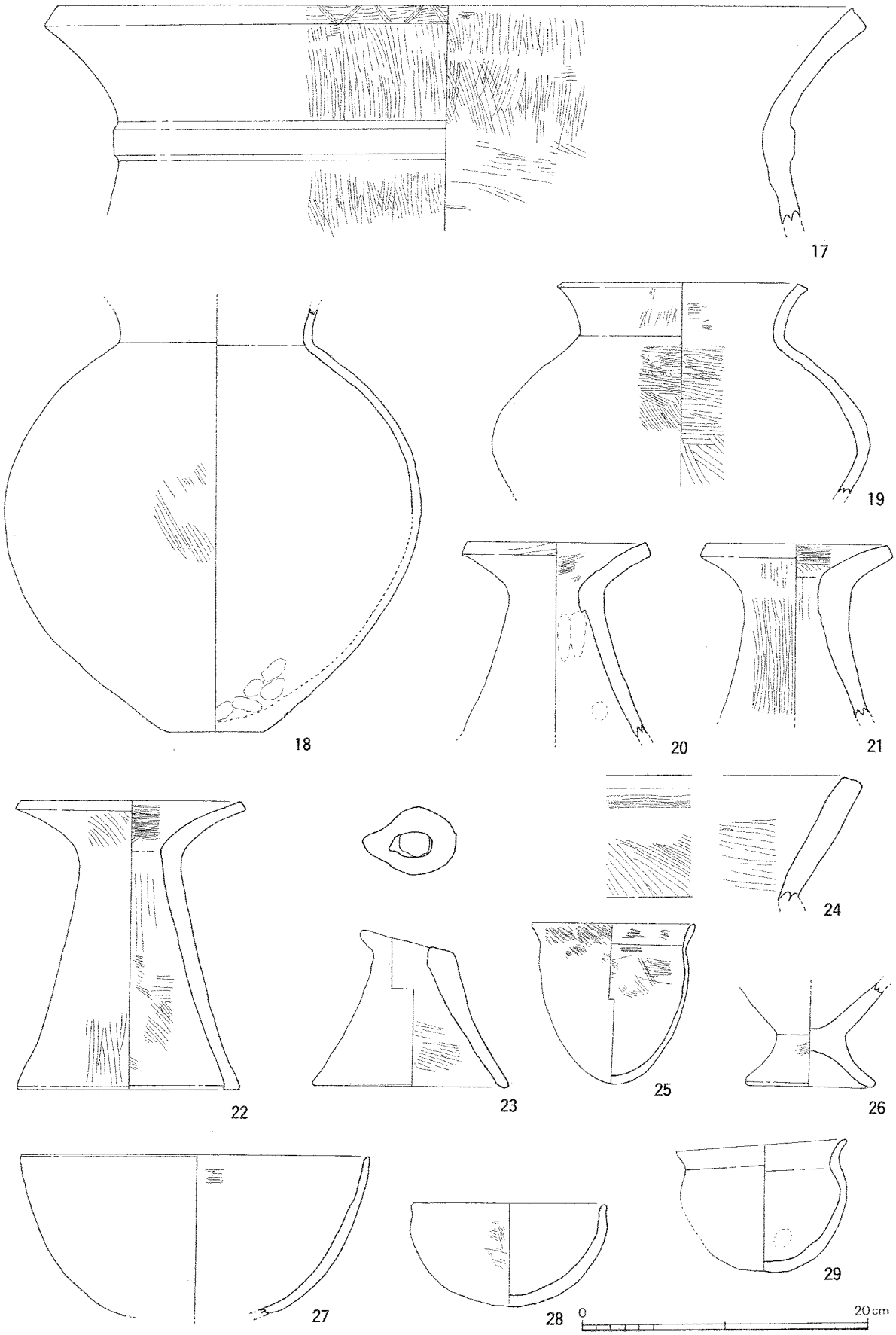
ＳＤ－２出土土器（第13図～22図）

弥生後期終末から古墳時代初頭に至るまでの土器が多量に出土している。なかでも，ＳＤ－２・３からは古墳時代初頭の遺物が多く，溝の終焉に際しての土器の廃棄が著しかったことを彷彿とさせる出土状況にあった。この中に混じって弥生中期中葉から後期初頭の土器も出土しているが，後期終末から古墳初頭の土器と同じ層位から出土していることから，周辺から取り込まれたものであろう。

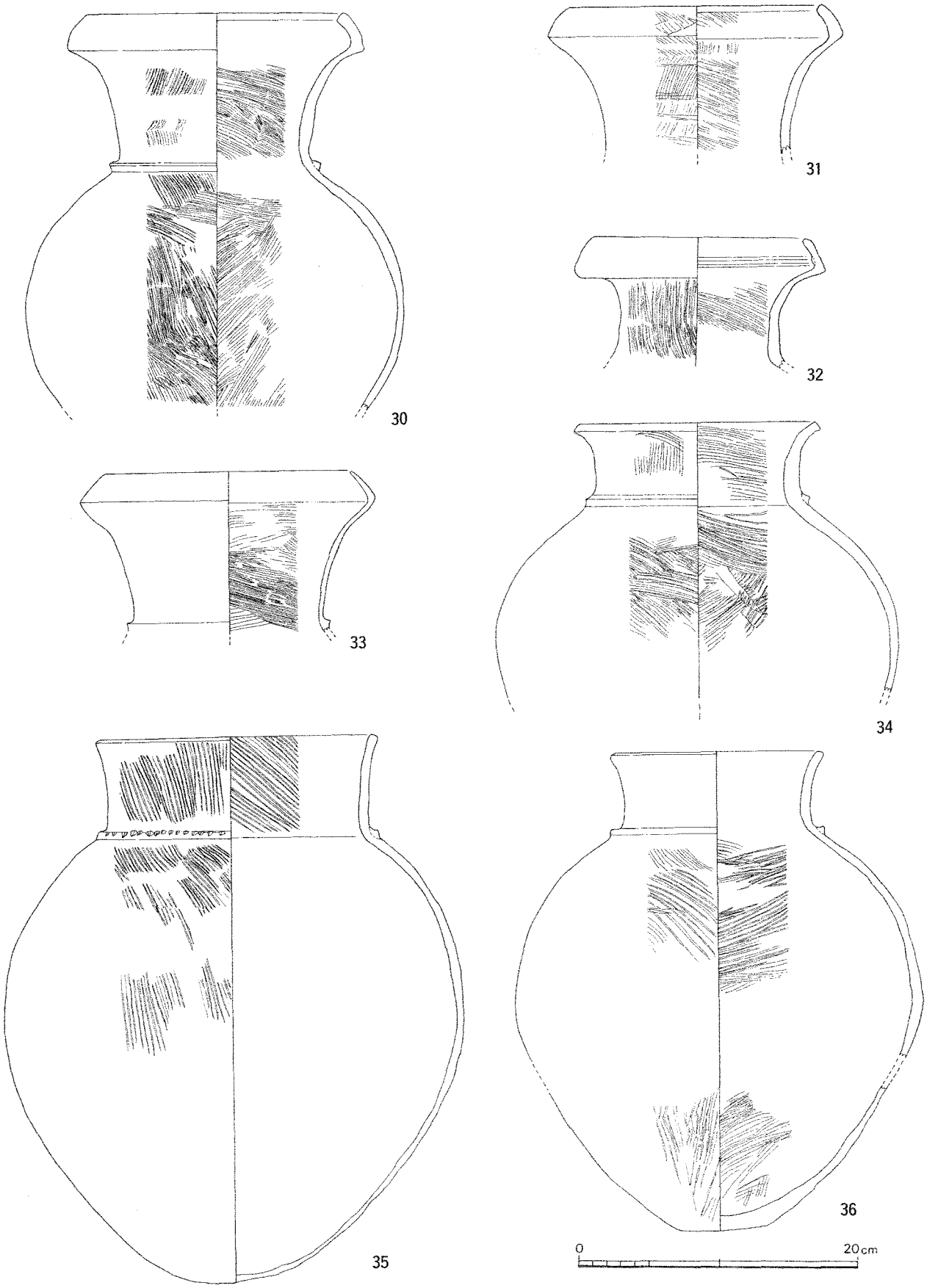
第13図は，中期中葉から後期後葉までの土器を取り上げた。**1**は，甕の口縁部で，口縁部直下に一条の突帯を持つ。**2**は，底部径が小さく，内部が大きく窪む。底部際が絞まり，胴部にかけて緩やかに開き気味になるもので，この付近の遺物中一番古い段階のものであろう。**3**～**8**の底部資料は，中期中葉から後葉段階のもので，やや上げ底気味になる。底部からハケメ調整をおこなう一群である。**4**については底部に外側から穿孔している。穿孔した部分にスス状の付着物があり，使用法について興味深い資料である。**9**・**10**は胴部中央に最大径がある丹塗り壺である。底部はわずかに上げ底となり，体部にかけて急に広がり中央部で大きく屈曲する。内面はナデ調整。**12**・**13**は低い器台で，ほぼ上下対称となる。厚みがあり，指押さえ痕が明瞭に残る。**14**は袋状口縁壺の口縁部。頸部に２条の突帯があり，そこから内碗する。内部はしぼり込んだ粘土のシワが観察される。外面は暗文状の縦方向のナデをおこない外面は丹塗り。**16**は広口壺で，頸部が締まり口縁が急に広がる。口唇部に剥落痕があり，頸部にも１条の突帯が剥落した痕が残されている。口縁部が広いことから後期後葉のものか。第14図**17**は大形の甕口縁部。口唇部にハの字状の刻み目を入れ，内外面ともにハケ目調整をおこなう。頸部に一条の大きな突帯を巡らせる。胴部から口縁部に至る傾斜は緩く屈曲度が弱い。**18**は胴部中央部に最大径を持ち，頸部から口縁部にかけては急激に立ち上がる。外面にハケメ調整が見られ，内面底部には指押さえによって調整している。**19**は**18**以上に胴部が張り，頸部は丸みをもって外反する。頸部は横方向のハケ目，体部は内外面ともに細かなハケ目調整をおこなっている。**20**～**23**は器台及び支脚で，上方に屈曲部があり高さもあることから，弥生後期終末頃のものであろう。内外面ともに丁寧なハケ目調整をおこない，内面のくびれ部分には指押さえ，あるいは棒状の当て具痕が顕著である。**23**は内部を中空とし，突出部分周囲は平滑にナデている。**25**～**29**は鉢，台付甕類である。**25**は口縁部に最大径をもつ砲弾型の小型の鉢である。口縁部外面にハケ目が目立つ。**27**・**28**は鉢で，球体状に底部に続く。表面にハケ目が目立ち，焼成は堅緻である。第13図の中では**18**・**19**がやや古く，他は弥生終末から古墳時代初頭のものである。

第15図は壺を挙げた。**30**から**33**は頸部が幅広く，口縁部も幅広い２重口縁壺である。口縁部付近の屈曲は鋭く折り返し，口唇端部は平滑に納める。内外面ともに全体的にハケメ調整をおこなう。

34～**36**は口縁部を胴部から直立するものと，外反する壺で，肩部に一条の突帯を巡らしている。**34**は口縁部を外反させ，胴部が球体状になるもので，**36**は口縁部が開き気味でやや外反し，底部はやや平底気味であることから，後期後葉のものと思われる。**35**は胴部から直立する口縁部が特徴的で，ハケ目調整が他の２点に比べやや粗い。**30**～**36**の壺については，弥生後期後葉から，終末にかけての資



第14図　ＳＤ－２出土土器②（１／４）



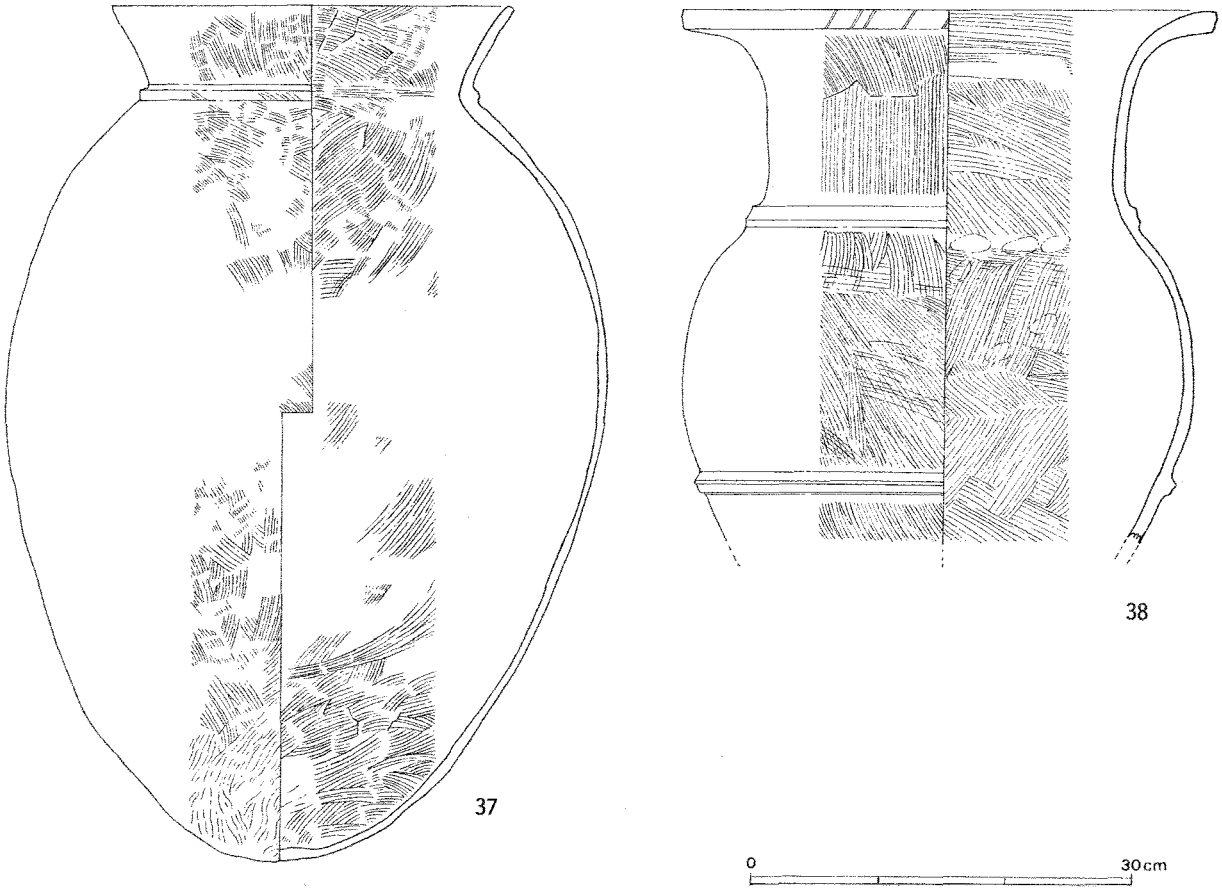
第15図　ＳＤ－２出土土器③（１/４）

料と思われる。

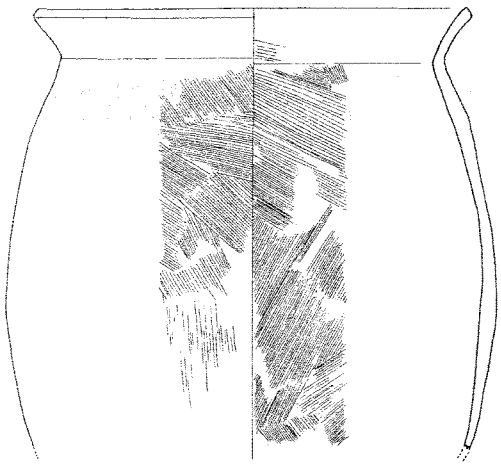
第15図の**37**・**38**は，第２調査区の南側で一括廃棄された状態で出土したもので，ほぼ原形を保った大形の壷である。**37**は短頸壷で，胴部に対する頸部の比率が極端に小さい。肩部に一条の三角突帯を巡らす。内外面ともに丁寧なハケ目調整をおこない，底部付近はタタキによる調整をおこない，やや凹凸が目立つ。**38**は胴部から垂直に頸部を立ち上げ，口縁部を外反する。肩部と胴部下半部に帯状の突帯を貼り付けている。頸部の大きさに対し全体の形状は寸づまりの傾向にある。内外面ともに丁寧なハケ目調整をおこなう。この資料についても後期終末のころのものか。

第17・18図はくの字状口縁の長胴甕である。**39**・**42**口縁部はくの字状に開くが，胴部に張りがない。これに対し**40**・**41**などはやや胴部ぶやや張りがあり，口縁部もはっきりしたくの字状を呈する。**40**の表面のハケ目はやや粗い縦方向を基調とする。第18図の**45**は，胴部が張り出すが，形状的に歪な造りとなっている。底部が胴部より薄く仕上げている。

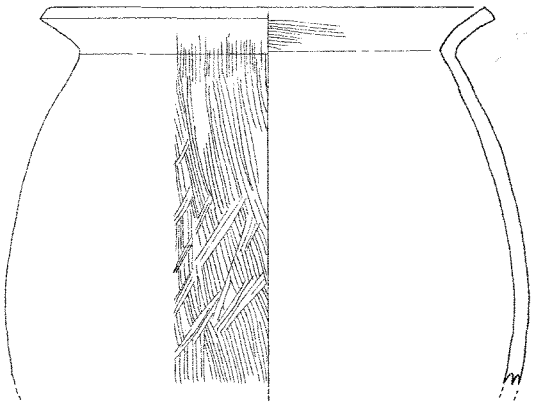
第19・20図は，くの字状口縁の甕，及び布留系の甕類である。**52**は胴部の最大径がやや下部にあり，口縁部は急激に外反し，くの字状を呈する。口唇部はややつまみ出している。**53**は胴部中央部に最大径をもつもので，球心状の胴部で口縁部から口唇部にかけて緩やかに内湾させている。外面は丁寧なヘラによる細かな調整をおこなっている。**54**は，直線上の口縁部を呈するが，口唇部をつまみ出す。



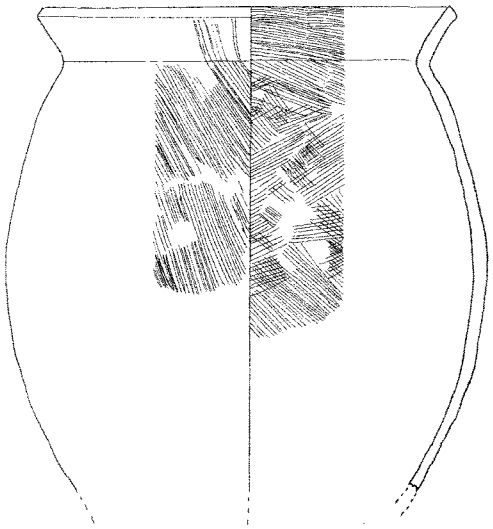
第16図　ＳＤ－２出土土器④（１/４）



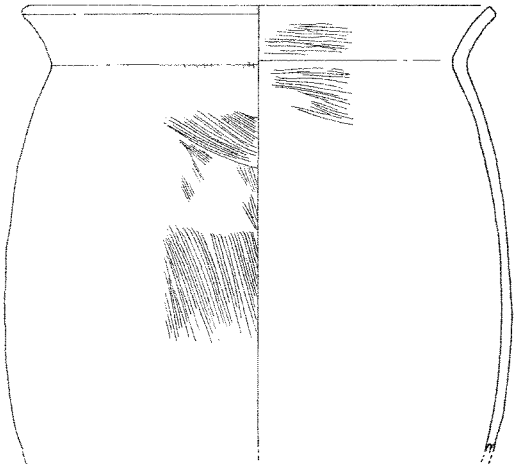
39



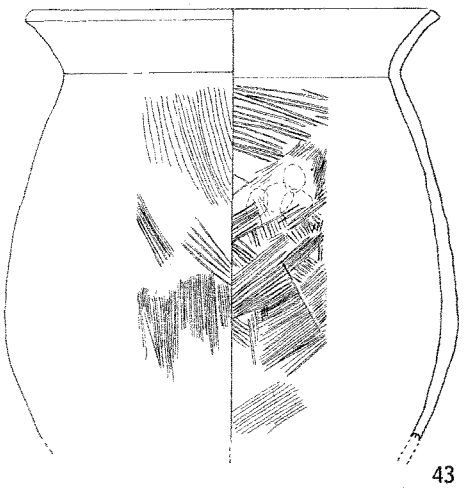
40



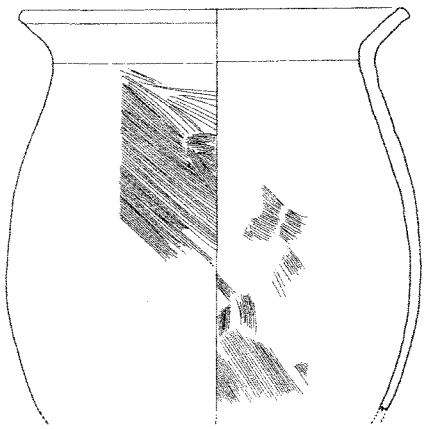
41



42



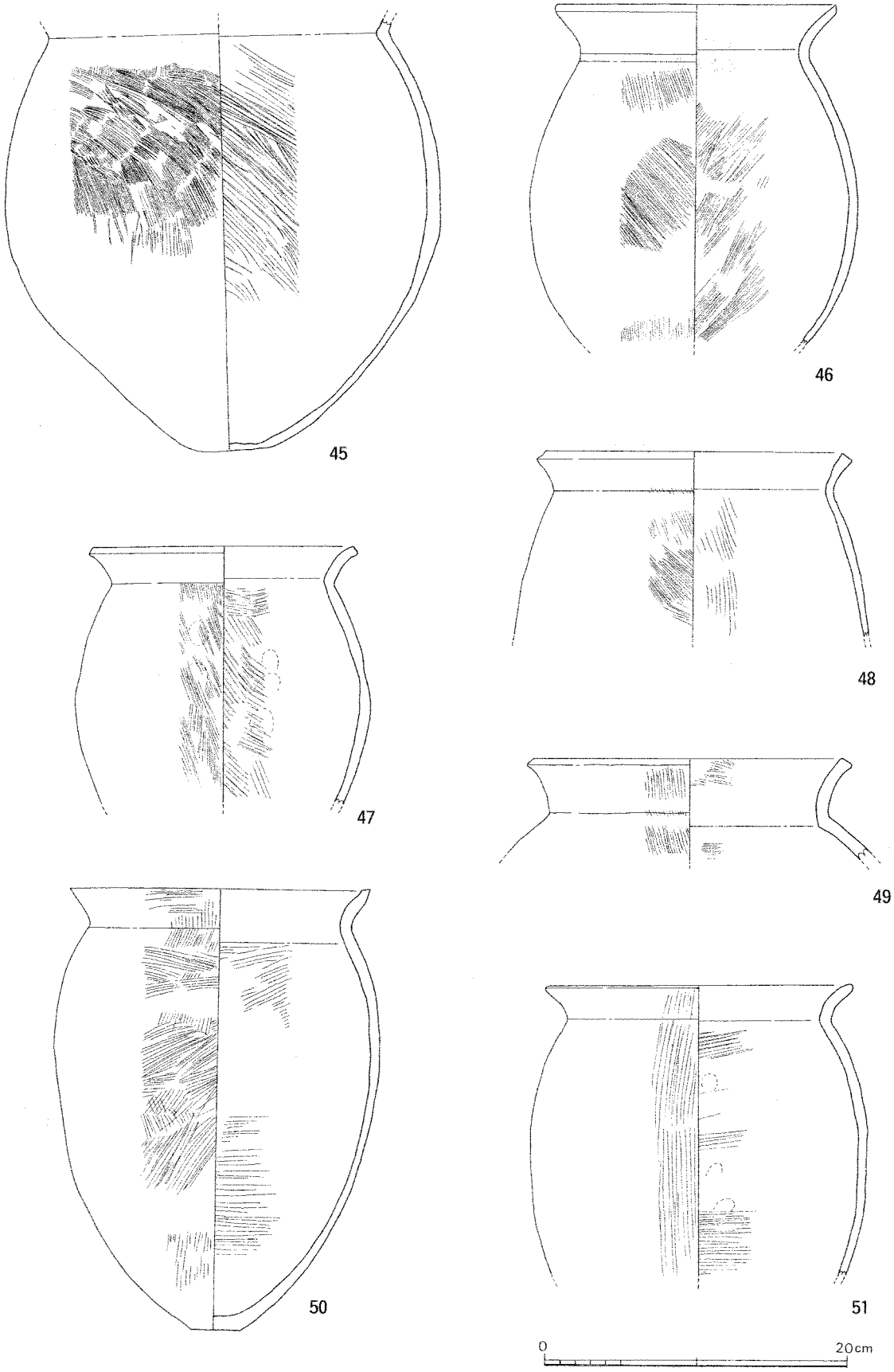
43



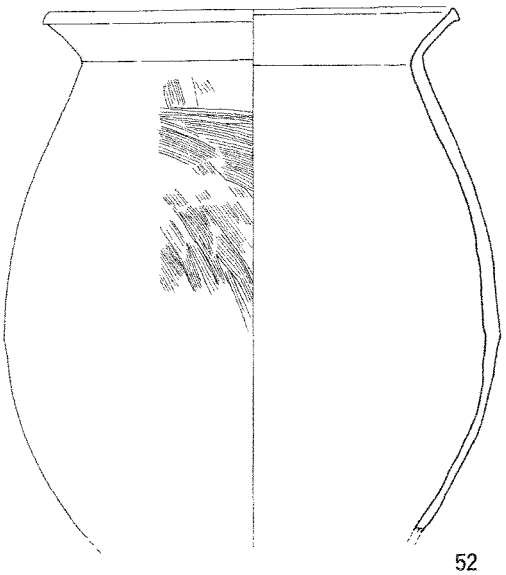
44

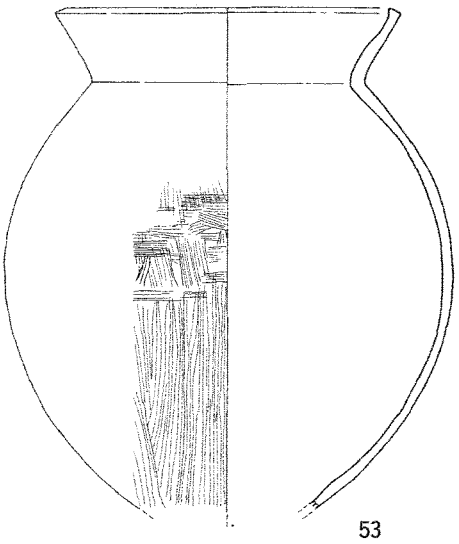
0 20cm

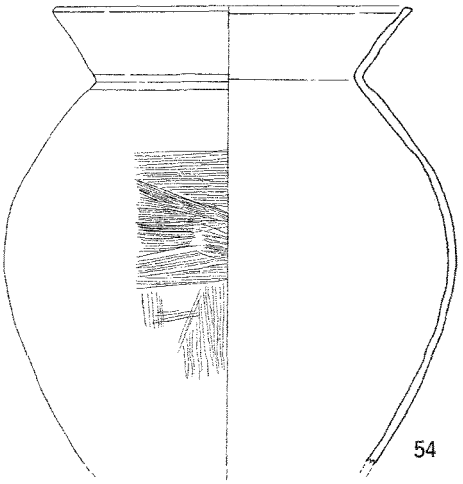
第17図　ＳＤ－２出土土器⑤（１/４）

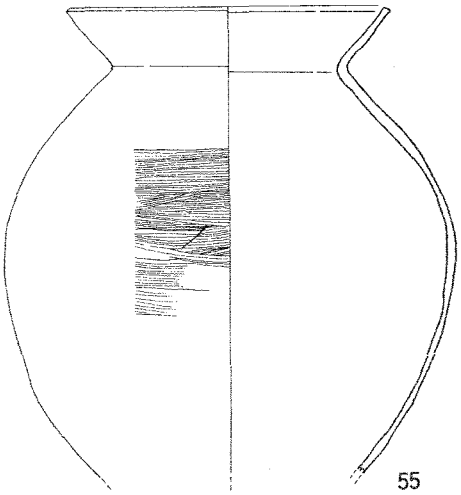


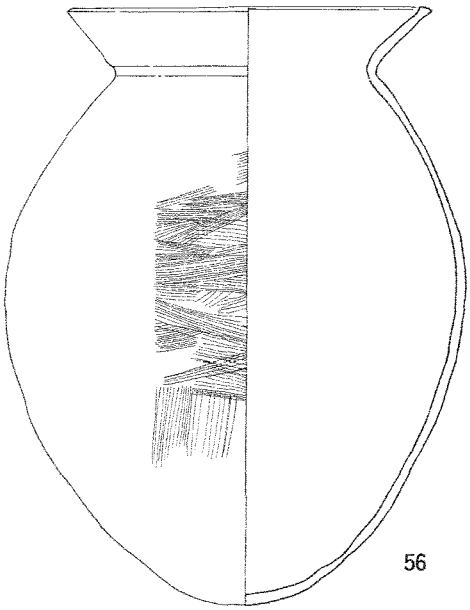
第18図　ＳＤ－２出土土器⑥（１／４）

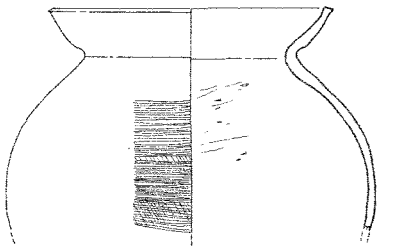


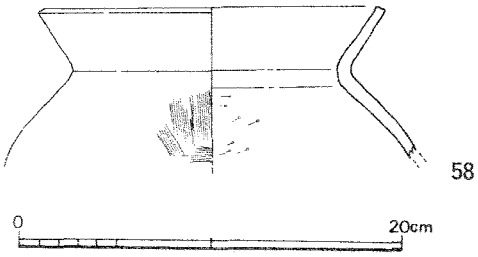






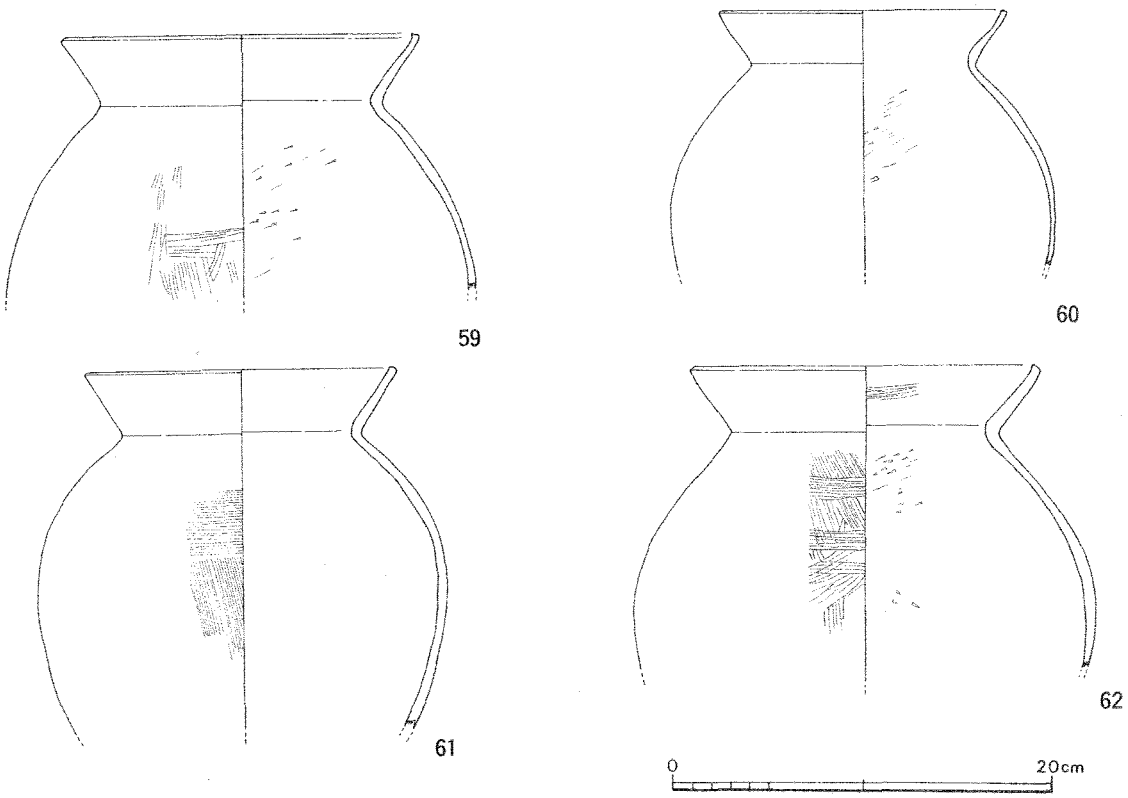






第19図　ＳＤ－２出土土器⑦（１/４）

外面は全体にヘラ調整を施す。55は口縁部がやや内湾し，胴部は球心状であるが頸部付近はやや張った状態である。56はやや尖り気味の底部で，口縁部は54の形状によく似ており，やや直線状で口唇部を摘み出す。頸部周囲にナデを施し，胴部はナデ調整。57は球心状の胴部に内湾する口縁，摘み出す口唇部をもつ所謂布留系の甕である。内部はヘラ削りを，外面は丁寧な並行するヘラによる調整をおこなっている。第20図59～62は，内面ヘラ削り，口縁部がやや内湾することで共通する。特に59・62は口唇部の摘み出しが顕著で，口唇部が内湾している。第19・20図に示した甕類は，布留系に属する物や先のくの字状口縁の長胴甕の系譜を引くもの等があり，弥生時代後期終末から，布留系の土器までの範疇で捉えられるものであろう。特に口縁部の形態や，胴部の張り，内部調整に変化が認められる。ＳＤ－２出土の土器は，これらの土器の出土量が一番多いことや，ほぼ復元できる資料が多いことから，ＳＤ－２の主要時期とした土器群である。

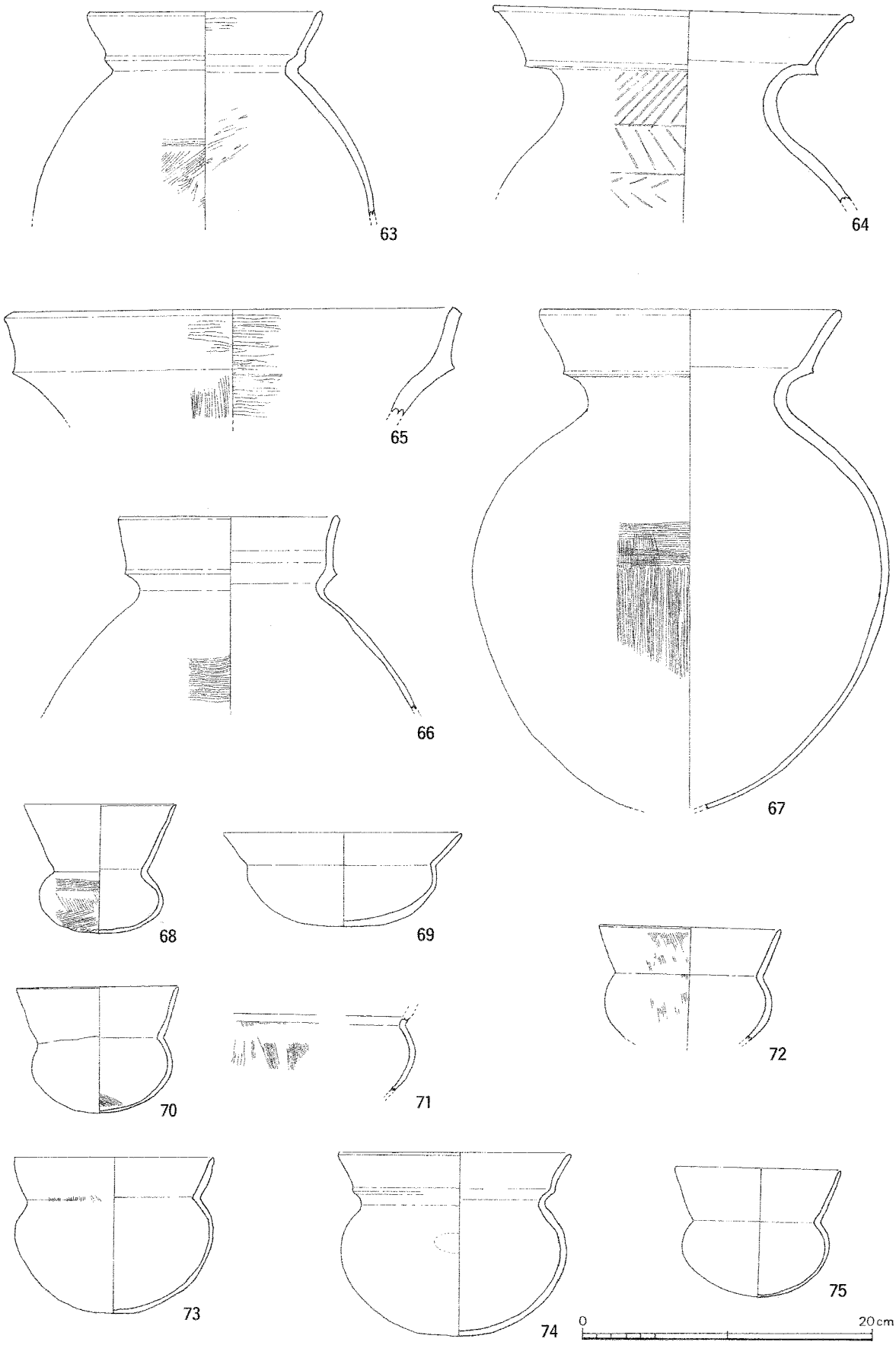


第20図　ＳＤ－２出土土器⑧（１/４）

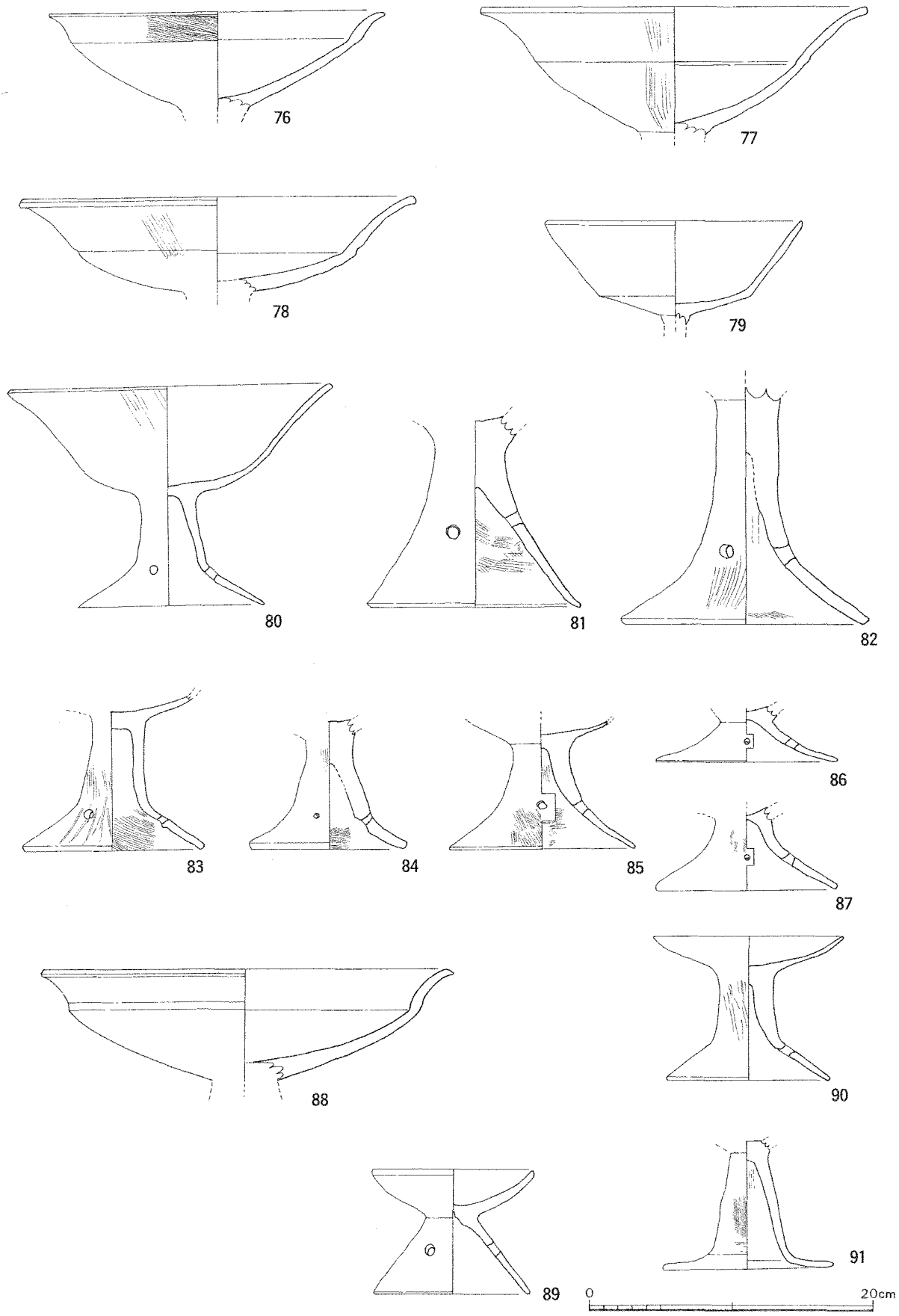
第21・22図は，山陰系の甕・坩・坏類を図示した。63は頸部直上に段を持ち，口縁部が短い。頸部から胴部へはやや球体状になる。胴部はハケ目調整を，内部はヘラ削りをおこなっている。64は頸部から胴部にかけて矢羽根状に短斜線を描き，頸部から口縁部にむけては，反転するように外反させて段をつけ，やや外反するような口縁部を造りだしている。頸部と口縁部との境は，突起状につまみ出している。また，口唇部もやや折り返し気味である。65は，口縁部下に屈曲部をもつもので，比較的に分厚い。内外面に粗いハケ目調整をおこなっている。66は口縁部が直行気味に立ち上がり，頸部付近に突起を造り出し，頸部にくびれをもつ。やや胴長を呈し，胴部には細かなハケ目の調整をおこなう。67は胴部が半球形のもので，頸部に屈曲部をもち口縁部がやや開き気味になる。頸部直上に突起部がある。66に比べ口縁形態が相違する。胴部には上位に横方向の，下位に縦方向の細かなハケ目調整が施される。68は，頸部が長く底部が半球形になる坩である。丁寧な造りで，ナデ調整を全体的に施すが，底部はヘラ調整の跡が残る。69は鉢で非常に薄く整形されている。口縁部に最大径をもち，器高が低い。70は胴部と口縁部の比率がほぼ半々になるもので，屈曲部が中央にある。内面の底にヘラ調整の跡が残る。73については，屈曲部が上位にあるもので，全体における胴部の比率が大きい。74については，頸部上位に２段の屈曲部があり，外側に突起がある。指おさえ痕が残る。75については，70とほぼ同じ形態のもので，かなり薄手に仕上げられる。

76～91については高坏の一群である。76は上位に屈曲をもつもので，坏部は直線状に延びる形態である。段になった部分に細かなハケ目調整が入る。77は，坏部中央に弱い屈曲をもつもので，坏部は粗い縦方向のハケ目調整をおこなう。78は器高が低いが，口径は広い。口唇部に一条の沈線を入れ，坏部にも明瞭な段をもつ。79は坏部の屈曲部が下方にあり，口縁部に向け直線状に立ち上がるもので，焼成良好である。脚部は細くなるもので，坏内部は深くなる。80は坏部に明瞭な段を有しない。坏部はやや丸く，口縁部がラッパ状に広がる。脚は径が大きく裾部に屈曲部を有し，３つの穿孔をおこなう。81は脚部のみの資料であるが，頸部が太く脚部は台形状に開く。内部に明瞭なハケ目痕を残す。82は脚部が棒状を呈し裾部が急に広く形態で，外にハケ目調整，内に棒状のものでの整形痕が見られる。83～87，88～91は器高が低い一群である。83は外がヘラで調整をおこなった後にヘラ整形をおこない，内側は細かなハケ目調整をおこなう。このような調整は他も同様である。86・87は脚部は低いが，器高に対して口径が大きい一群で，丁寧なナデ調整をおこなう。上部に半円状の坏が乗るタイプで，古墳時代の前期のものであろう。91は棒状の脚から直角に裾が広がるタイプのもので，この中では一番新しい時期のものであろう。やや古いものとしては76・88があげられる。

坏については多くの資料を得たが，多くのものが弥生終末から古墳時代前期のもので，特に古墳時代前期の資料が多い傾向にある。



第21図　ＳＤ－２出土土器⑨（１/４）



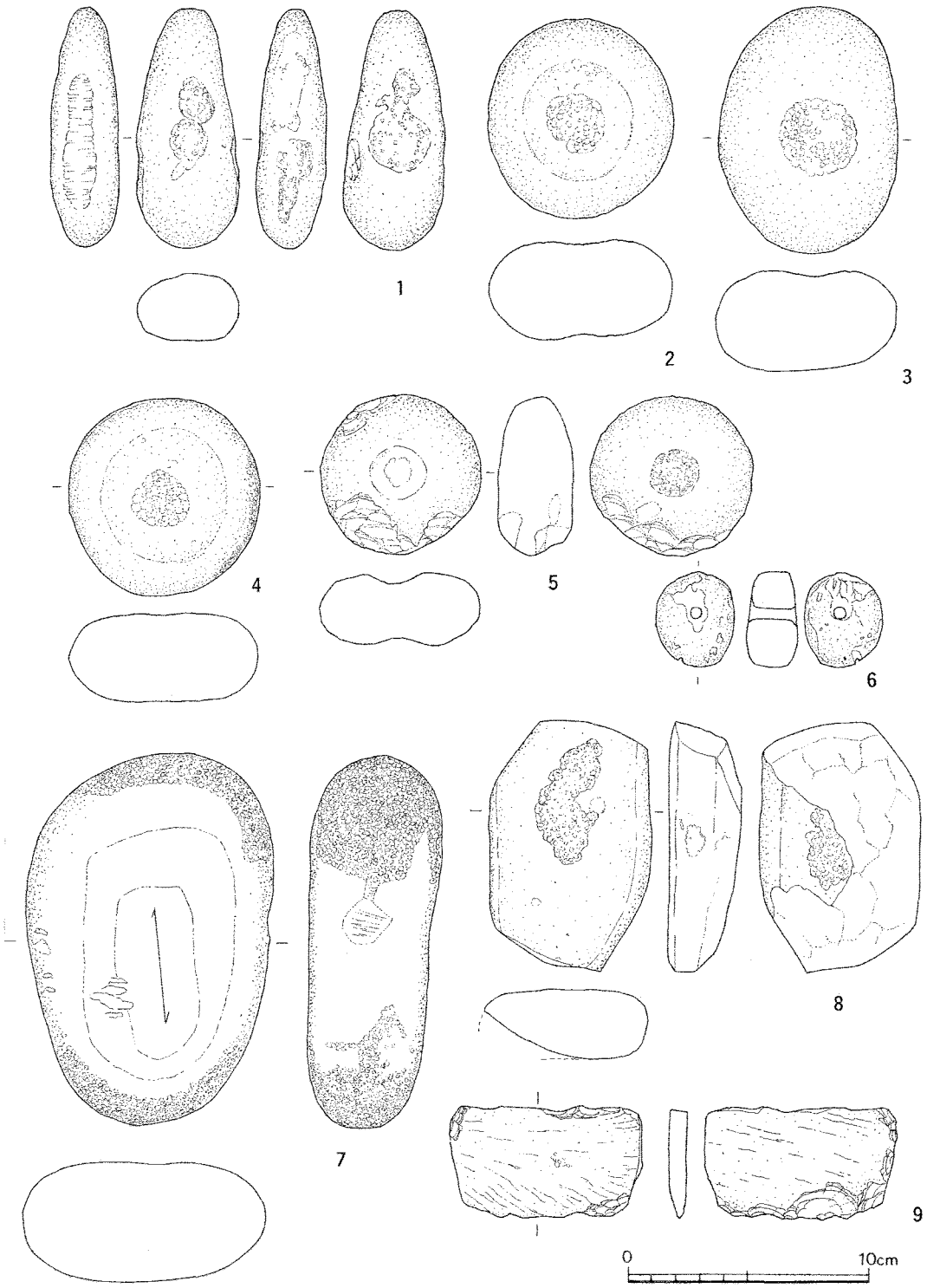
第22図　ＳＤ－２出土土器⑩（１／４）

ＳＤ－２出土石器（第23・24図）

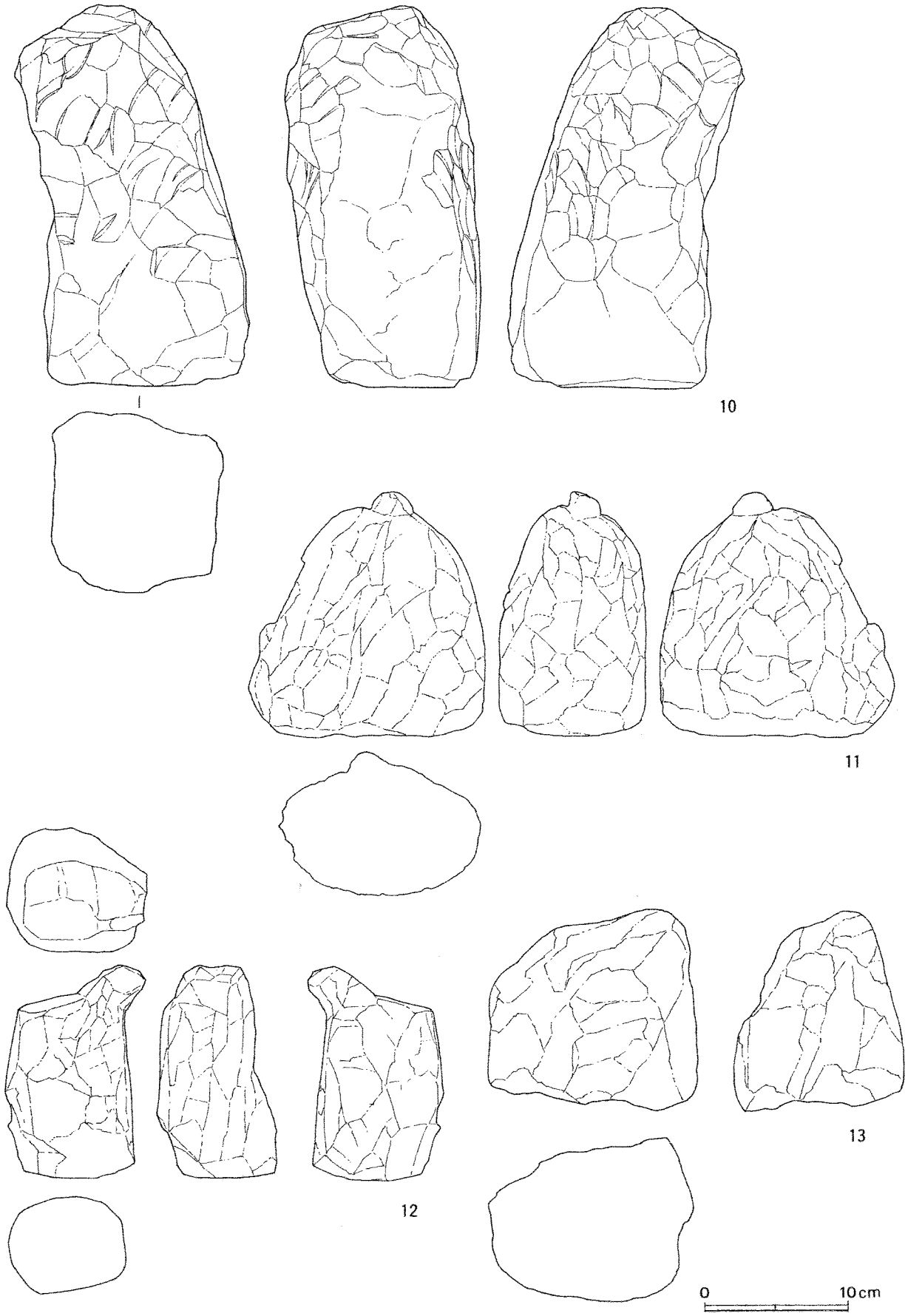
敲石が多量に出土している。敲石は，いままでの調査でも多量に出土しており，原の辻遺跡の石器のなかでも特に多用されていたことが知られている。ＳＤ－２が後期終末から古墳前期であることから考えると，金属器がある程度普及してもなお敲石の機能に頼らざるを得ない作業工程があったものと考えられる。原の辻遺跡出土の敲石は，形態・使用痕からいくつかに分類されるが，個々の遺物の特徴の中で説明していく。**1**は長楕円形のもので，側辺に窪みをもつタイプである。上下端，表裏にも敲打痕が観察される。両側辺の窪みは，かなり鋭角のものによってつけられたと思われ，線状痕のようなキズが認められる。側辺に窪みをもつ敲石は，窪みが左右対になって本資料のように１対のものと２対のものとが認められる。敲石の中でも数的には少数であることから，通常の敲石と違った工程の中で使用されたのであろう。**2**～**5**は円形の一般的に見られる敲石である。表裏の窪みの深さの相違は，使用回数の相違と判断してよかろう。敲打痕は，表裏と，円周上に認められるが，敲打痕の付く範囲は様々である。表裏の窪みは敲打を被った跡であり，周囲は敲打を行った際の痕跡である。窪み石については，縄文時代から引き続き使用される石器であるが，その機能については堅果類の加工として捉えられる場合が多い。このことを踏まえるならば，今回の出土量からしても，かなりの食糧加工に対応していたと捉えられよう。ただし，後期から古墳時代前期に属することから堅果類に対してだけというより，米・麦等を踏まえた加工を想定する必要があり，敲打痕等の在り方や，磨り痕などの使用痕観察から今後検討すべきであろう。

6は軽石を用いた浮子であろう。穿孔具によって孔を中央よりやや上位に穿孔している。**7**は上下に無数の敲打痕と表面には磨痕が認められる。通常の敲石よりかなり大きく，表面は磨った状況があることから磨石としての機能をも併せ持ったと思われる。側辺の窪みは**1**と同じものである。**8**は表裏中央部に細かな敲打痕が観察される。石材が硬質であることや方形に近いなど，対象物の相違があるかもしれない。**9**は石鎌状の石器で刃部と背部の一部に加工を施しただけの簡素な造りとなっている。

第24図**10**～**13**は角礫凝灰岩製の支脚形石製品である。**10**はやや硬質であるが，ノミでの加工の痕跡が明瞭である。前面に火を受けた痕跡があり，赤く変色している。**11**は全形が丸く，頂部に突起が付くものだが，このような頂部に突起をもつタイプは少ない。**12**は一側辺に突起が非常に発達したもので，体部から突き出すように造り出されている。**13**は形状的には歪であるが，全面被熱痕がある。このように形状は歪でも，被熱痕跡がある角礫凝灰岩は遺跡からある程度出土することから，このようなものも支脚として使用していたと考えられよう。支脚形石製品は，原の辻遺跡ではかなりの数が出土しいる。今回出土したものは，弥生時代終末から古墳時代のものとして捉えて差し支えないであろう。特に，石を削り出す技術は，鉄ノミの使用がなければ到底無理と思われ，支脚形石製品の普及は鉄ノミの普及が前提となるであろう。角礫凝灰岩は石田町の海岸線に露出するものがあり，これが素材となっていることは間違いないであろう。地元産出の素材を使用し，原の辻遺跡独特の支脚を製作している事実は，煮沸という事象に他と相違する点があるものと予想される。



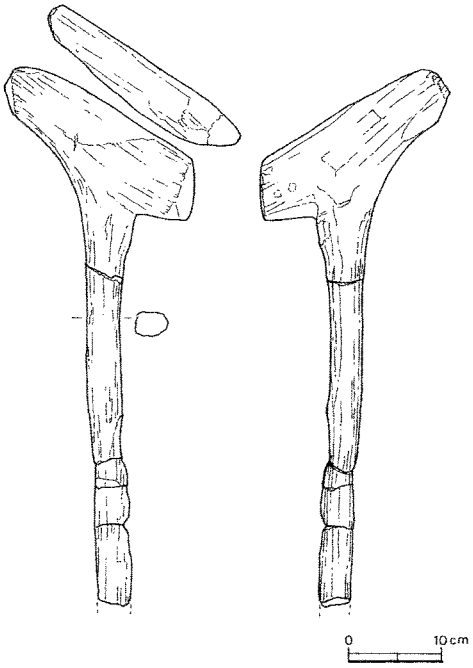
第23図　ＳＤ－２出土石器①（１/３）



第24図　ＳＤ－２出土石器②（１/３）

ＳＤ－２出土木製品（第25図）

後期終末から古墳初頭と考えられる上位の堆積物からの木製品の出土はなかったが，③層とした溝造営期の層から手斧が出土している。長さ57.35cm，握りの直径３cm，斧台の長さ約19cm，厚み５cm，握り部と斧台とのなす角度は，約55度である。全面劣化が激しく，カット痕については図面左側の斧台側面に，加工痕が認められるくらいである。斧台上部と，一側面はカットされているが，斧台の一則面はカットされずに上面観がカマボコ型を呈している。このことから，製作途中のものを廃棄したものと考えられる。斧台の先端部は短く，後半部が長いことから，斧台に溝を掘って手斧を埋め込むタイプのものか。



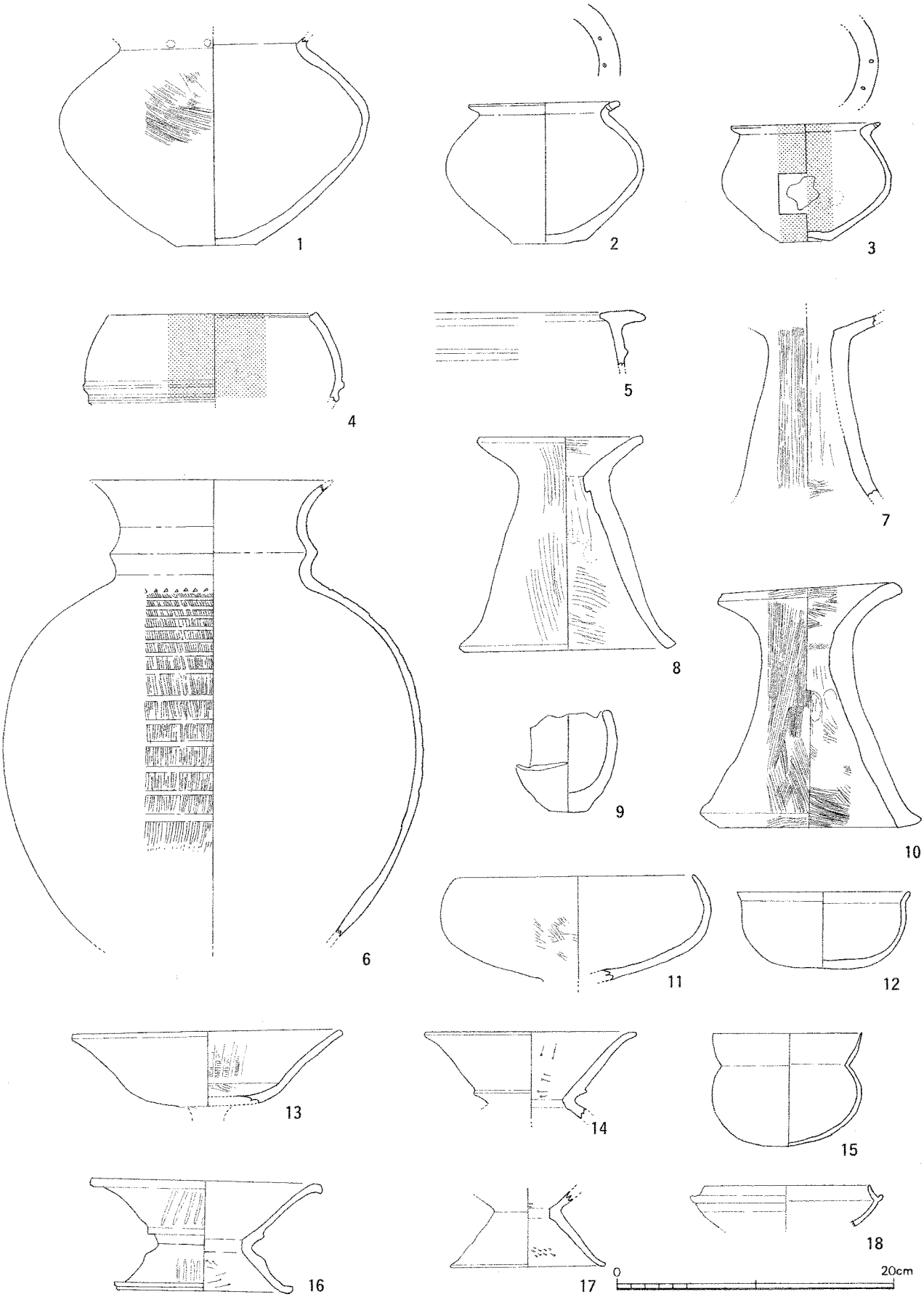
第25図　ＳＤ－２出土木器　（1/8）

ＳＤ－３出土土器（第26図）

土器の出土は，ＳＤ－２に比べかなり少ない。溝として機能し，廃棄の場としての利用は生活地である丘陵に近いＳＤ－２のほうに偏り，ＳＤ－３までは廃棄されなかったとみられる。出土した土器も小片が多く特に弥生時代後期終末から古墳時代前期のものが多く見られた。また，須恵器も１点ではあるが出土していることから，この時期も考慮する必要がある。

1～**3**は胴部中央部に最大径をもち口縁部を強く外反させた壷である。すべて口縁部に孔を２穴穿っていることから蓋付きのものと判断される。底部は**3**がやや上げ底となる以外，平底となる。本来丹を塗っていたものと思われるが，表面がやや劣化しているためその痕跡を見ることはできない。**4**は丹塗りの坏で，胴部が球体となり下半部は欠落しているが，台付となる。胴部下半部に２条の突帯を巡らせ，口唇部は内傾するように平滑に調整されている。焼成良好で堅緻である。ＳＤ－３が，弥生時代終末から古墳時代初頭のものと判断する以上，**1**～**5**のような弥生時代中期末の遺物についてはこの周辺の古い生活面からの取り込みと考えられる。**7**・**8**・**10**は上部が開く器台で，頸部が上部にあり高さがあることから，弥生後期後葉の時期のものであろう。**9**は，小型の鉢状の土器で，表面が暗褐色を呈し，全体にてづくね状の凹凸が見られる。一見，坩堝状であるが被熱痕等や付着物等は見られない。**11**は台付の鉢，**13**は高坏であるが，共に脚部を欠いている。**11**については，中期まで遡ると思われるが，**13**については古墳時代初頭のものか。**14**・**16**・**17**は鼓形器台で，扉材周辺から出土している。**18**は須恵器坏で，口唇部の形態から７世紀代のものであろう。この他，馬韓系土器が出土しているが，朝鮮半島系土器の項で報告する。

ＳＤ－３は浅い溝で，遺物の出土が希薄であるが，鼓型器台や馬韓系土器が出土するなど，特殊な土器が出土している。堰遺構などからも，溝の管理が行き届いていたと考えられる。



第26図　ＳＤ－３出土土器①（１/４）

ＳＤ－３出土石器（第27・28図）

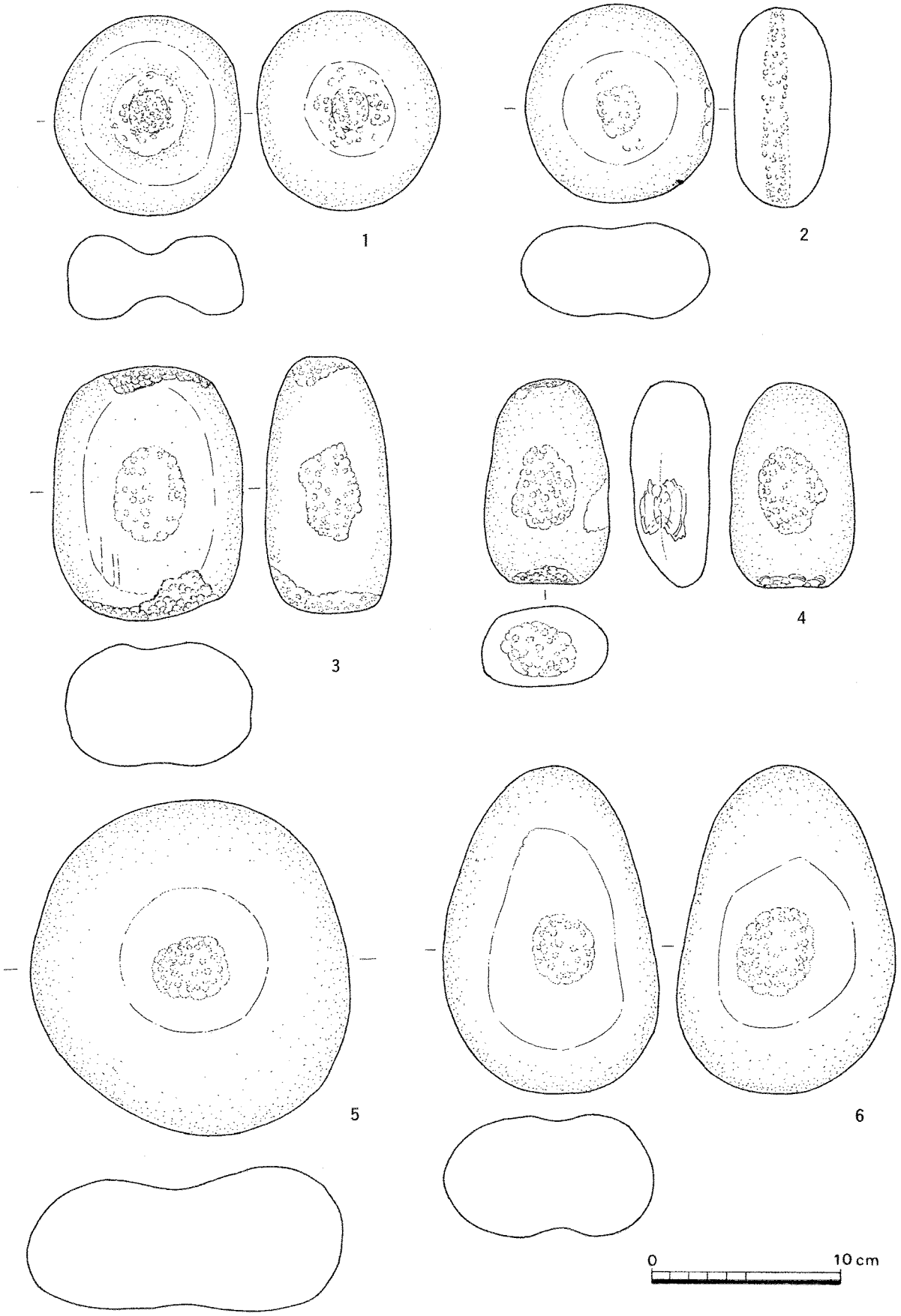
土器に比べ石器の出土は多く，特に敲石の出土が多いことが特徴的である。古墳時代前期にも敲石が多用されていたと判断される。

1～**6**は円礫を使用した敲石，あるいは敲打を被った痕跡のある石器である。すべて中央部に窪み痕を伴う。特に**1**は中央部の凹みが深く，中央部に何らかの潰す対象物を置いて，かなり敲打を続けた結果であると捉えられる。**6**はやや大形のもので長楕円形を呈している。周囲に敲打痕は見られないが，中央部に表裏とも敲打を被った痕跡を残す。**3**については，中央部の表裏に敲打を被った跡があり，下部にはかなりの敲打をおこなった形跡があり，かなり潰れている。これらの石器は，敲打する道具でありながら，敲打された形跡を併せ持っている。中央部の窪みが台石状の役割をもっていたのか，あるいは道具の形状を整えるための加工なのか２つの視点から見る必要がある。**5**のように，かなり大形で中央部に窪みをもつものもあり，作業台としてのみ使用したと考えられる例もある。**7**～**11**・**14**～**17**は砂岩製の砥石である。**7**・**8**は上下から研ぎ出し，中央部に力がはいるような研ぎをおこなった結果，中央部が磨り減っている。鎌など刃部が長いものの研ぎ出しをおこなっていたのであろう。砥石には**7**・**8**のように表裏に研ぎ痕があり，断面四角形を呈するものと，研ぎ痕が複数箇所あり多面体となるもの（**14**・**15**）。数条の線状痕があるもの（**16**）など幾つかのパターンが存在する。平坦な研ぎ痕があるものは，並行な刃部を研ぎ出すものであり，数条の線状痕を残すものについては，先鋭な道具を研ぎ出したものとの予想はつく。ただし，研ぎ出し面に敲打痕がある例も見受けられるなど，使用については複雑な工程があったものと考えられる。石質としては，ほとんどが砂岩であるが，**11**・**17**については硬質の頁岩を使用している。表面に敲打痕をやや残すことから，砥石と台石の両方の機能をもつものに対しては，砂岩以外の石を使用したものとみる。

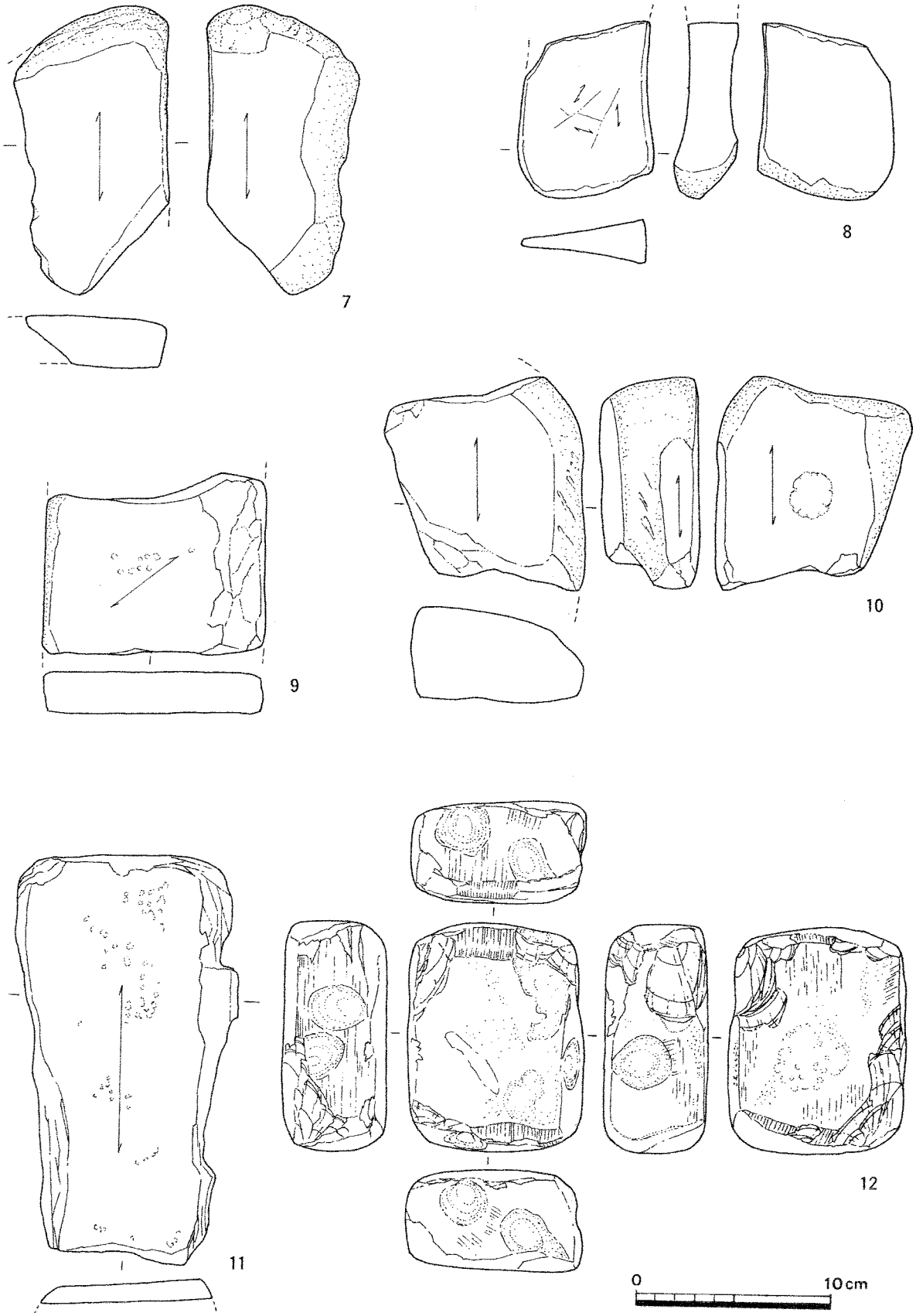
12は方形ながら側辺それぞれに窪み痕をもつものである。それぞれの面は磨って方形に形を整えており，側辺にほぼ２個ずつの窪みを持つ。この窪みについては細かな打撃によって形成されたと考えられる。角には加撃して剥離した面が確認され，積極的に使用した面と被敲打痕で成り立っている。

形も４角形を意識していたものと思われる。**13**は石斧であるが，軟質の石材を使用しているからか，整形時の敲打痕等は不明瞭である。裏面には，衝撃による剥離痕が末端部にまで及んでおり，この破損により廃棄されたものであろう。

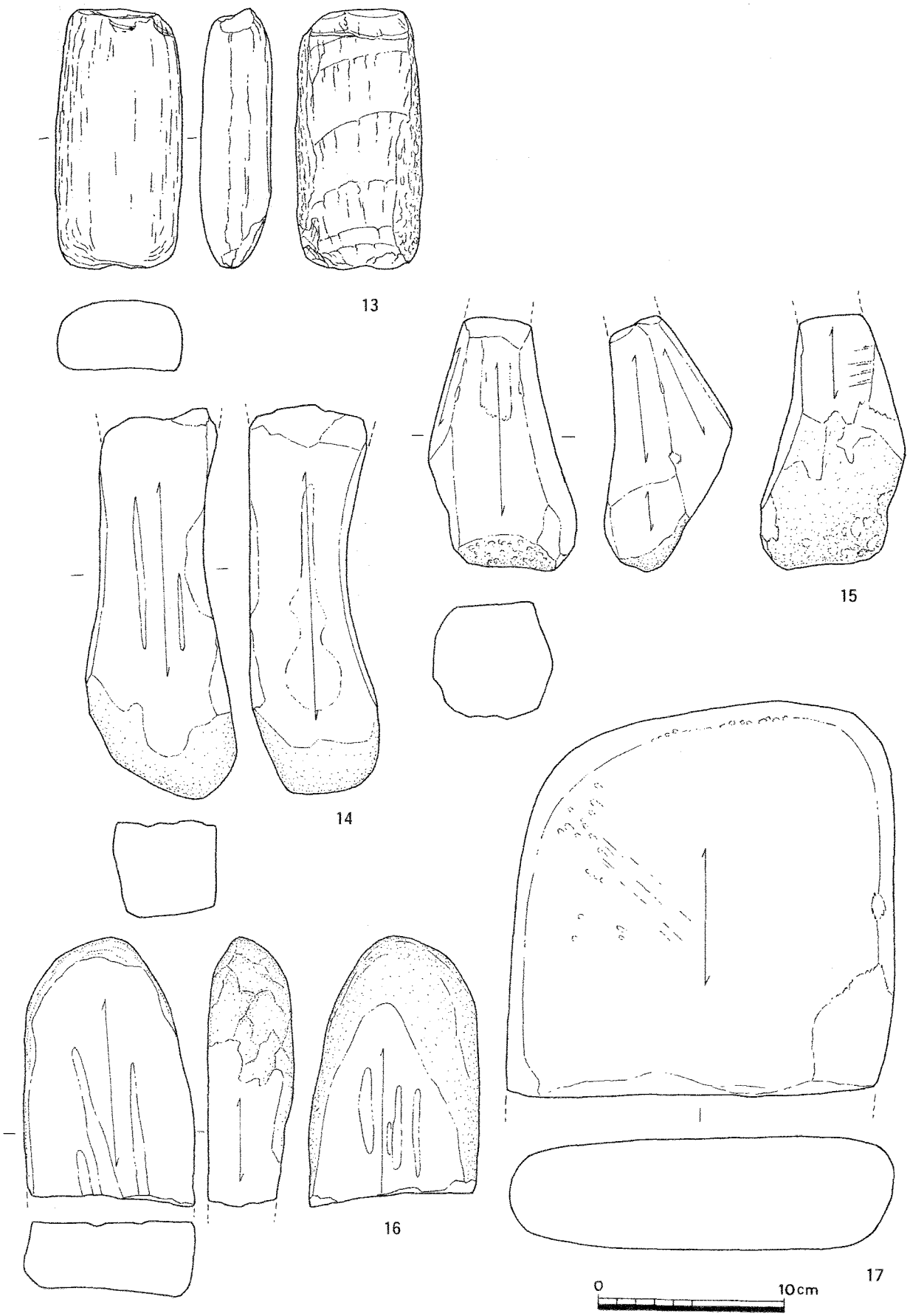
これらの石器の中で，**5**と**14**は堰遺構の補強材として転用されていたものであることから，古墳時代初頭のものとすることができる。ＳＤ－３出土の石器は，敲石，砥石を中心に出土し，石庖丁や石斧などが見られない。ＳＤ－３が古墳時代のものであることの証左として追認出来るものである。



第27図　ＳＤ－３出土石器①（１/３）



第28図　ＳＤ－３出土石器②（１/３）

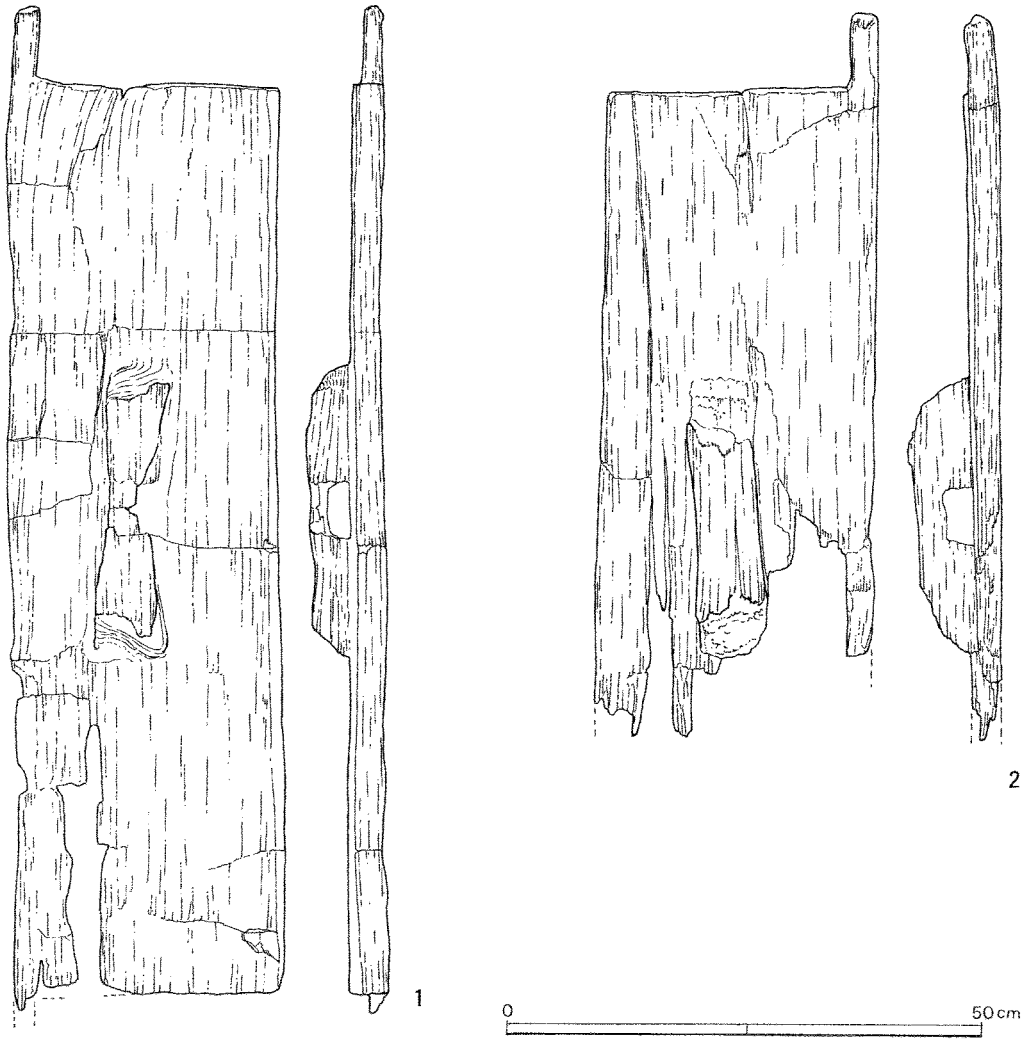


第29図　ＳＤ－３出土石器③（１/３）

ＳＤ－３出土木製品（第30図）

出土した木材は未加工の流木が多く，かなり劣化が進んでいた。加工材としては扉の他，扉の周囲から検出された板材があるが，劣化が著しかったことから，ここでは出土した扉２点について説明する。扉２点は，粘土の堰遺構の前面に立て掛けるようにおかれていたもので，交差するような配置をおこなっていた。周囲から出土した土器から古墳時代前期のものと判断される。

扉１は，全長107.1cm，幅29cm，厚さ約３cmを測る。扉軸の長さは，7.5cmで，下部については消滅している。このことから，扉そのものの高さは約１m前後であることが解る。把手は劣化が激しいが，推定長31cm，幅14cm前後，高さが５cm前後あったものと考えられる。扉の幅に対する把手の位置は，図からはやや左よりに見えるが，把手右側の劣化が激しいことから，本来中央部までの幅をもっていたものと思われる。また縦に対する位置もほぼ中央部に位置する。扉２は，下部が欠損しているが全長77.9cm，幅29.6cm，厚さ３cmを測る。扉軸の長さは7.8cmである。把手部は，高さ約6.5cm，孔の長さは約６cm，高さ約3.5cm程度である。扉１・２ともにほぼ同じ値を示す。



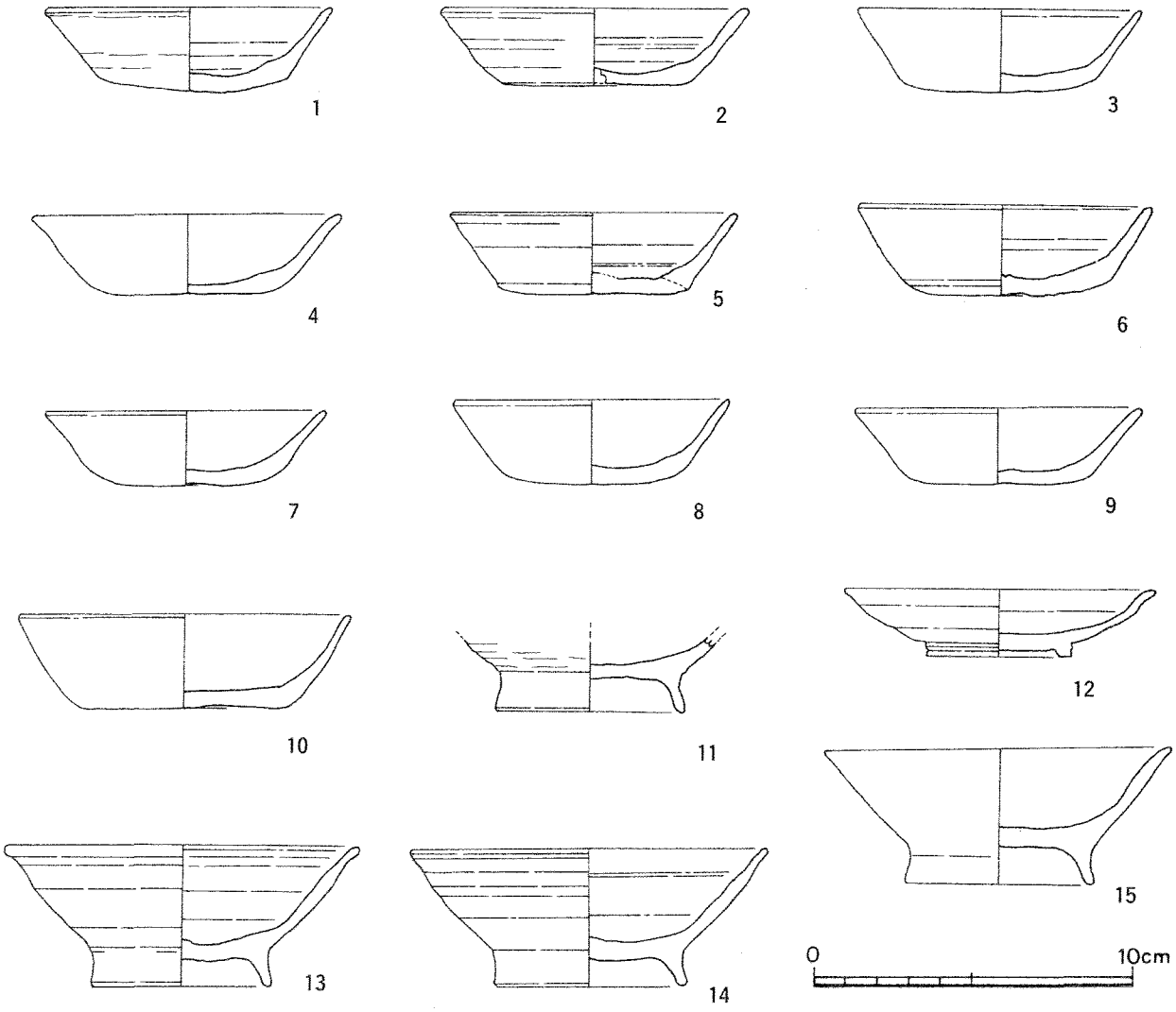
第30図　ＳＤ－３出土木器　（1／8）

1・2ともに同じ建物の扉を堰遺構に転用したものと思われるが，扉の大きさとしては長さ，幅ともに小さいように思われる。ただし，全国の出土資料でも長さが1m内外のものが多いことから，本資料がことさら小さなものであるとは言えない。扉の大きさは，その建物の規模や，間口を推定する遺物として重要と思われる。この2点の扉からいえることは，1枚の扉の幅が約30cmであり，2枚で60cmということになる。他に出土している扉材についても先述した如く，ほぼ同様の値を示している。この30cm内外という値は家屋の建築上，なんらかの指標となっていたと考えられる。

第4調査区出土土器（第31図）

第11図で示したように，第4調査区の北側から土師器坏・碗，緑釉陶器皿が出土している。遺物は，足跡状遺構の上位から出土している。遺構の項で記したように，南北方向に並んで出土していることから，何らかの祭祀のために配置したものと考えられる。このことから一時期内に納まるものと判断する。1～10は坏である。胎土・焼成から3つに分類できる。1・2，5～7はやや明るいピンク色を呈し，胎土に赤褐色の鉱物を多量に含む一群で，3・4は赤褐色の鉱物を含むものの，先のものほど入らず，黒色の鉱物が目立つ。全体的に灰色を呈する。8・9は内外面の一部が黒褐色を呈しており，器高も他に比べやや低い。焼成は良好で，胎土も緻密である。10は，他と明らかに相違し，全体赤褐色を呈し，口径，器高ともに大きい。これらの違いは，産地の相違と考えられ，いくつかの流通経路で土師器を求めていたと考えられる。11・13～15は碗である。15は口縁形態が歪で，重厚感があるのに対し，11・13・14は，口唇部が丸く，体部にロクロ回転の条線が残る。胎土は灰白色で11に比べ焼成も良好である。12は緑釉陶器皿である。全体鉛色を呈しているが，釉薬の色が変色したものであろう。高台は輪高台で高台内は露胎である。接地面は平坦で，高台内に鋭角に外傾する。高台際は竹の節状に削りだす。内低はヘラ磨きをおこない，体部上位に段を有する。器高に対し，口径が大きいのが特徴である。これらの土師器坏・碗・緑釉陶器皿から時期的には9世紀後葉から10世紀前葉の時期のものと考える。古代の遺物に関する遺跡として，原の辻遺跡南側の大川地区の調査で，初期貿易陶磁が出土しており，「延喜式」に書かれた石田郡に関連するものとの説明がなされている。今回の遺物についても，緑釉陶器が1点ではあるが出土しており，大川地区の遺物との関連の中で考えていかねばならないであろう。出土状況からすれば，水田や水利施設を造営する際の祭祀に関する遺物と考えられるが，このような祭祀においても緑釉陶器を道具に使用するこの地域の特殊性を考えると，付近に有力な豪族が存在していたことを考慮しなければならない。石田郡における水田の管理者における祭祀行為と考えることも出来よう。原の辻遺跡周辺が古代においても，重要な水田地帯として利用されていたことを示す事象として重要な意味をもつものと考える。この土師器類の出土状況については，古代の祭祀行為に伴うものとして先に説明した。また直線状に並んで出土することから，この方向がこの付近の水田の区画の方向を表している可能性をも示唆した。第5～8調査区では古代の水田と思われる杭列や偶蹄目の足跡状遺構も検出されている。弥生時代の水田遺構についてはさらに西側の低地部分が水田として利用されていたと考えられるが，古代においては東側まで水田として利用されていたことの証として土師器類の出土を捉えなければならないであろう。

また、中世以降は以前の調査からも丘陵に近い部分で杭列などが確認されている。原の辻遺跡の西側低地における水田化が，始めは現在の農道よりも西側で行われ，以後，古代中世になるにしたがって削平や埋土を繰り返しながら徐々に丘陵側際まで水田化していったものと判断している。このことは，弥生時代には低地は環濠や溝として利用されていたものが，古代・中世に入り水田利用のみをおこなうようになったという土地利用の形態そのものが，大きく変化していった過程を示しているのであろう。



第31図　第４調査区北側出土，土師器（１/３）

報告番号	調査区	種類	色調(表)	色調番号(表)	色調(裏)	色調番号(裏)	胎土	残存状況	調整手法	備考
1	第2	甕	にぶい黄橙色	10YR6／3	浅橙色	10YR8／3	長石・石英	口縁～胴部	外：ハケ目調整	
2	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR6／3	黒褐色	10YR3／1	長石・石英	底部	外：ハケ目調整	底にスス痕
3	第1	〃	灰白色	10YR7／1	灰白色	10YR8／1	石英・長石・砂粒	底部	外：ハケ目調整	
4	第2	〃	にぶい褐色	7.5YR5／3	明褐灰色	5YR7／1	石英・長石・雲母	底部	外：ハケ目調整　内：指おさえ	底部に穿孔
5	第2	〃	橙色	2.5YR6／6	明褐灰色	7.5YR7／1	石英・長石	底部	外：ハケ目　内：ナデ，底部に押さえ痕	
6	第1	〃	にぶい黄橙色	10YR7／2	灰白色	10YR7／1	石英・長石	底部	内：指おさえ	
7	第1	〃	にぶい黄橙色	10YR6／3	にぶい黄橙色	10YR7／2	長石・石英・金雲母	底部	外内：ナデ	
8	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR7／3	灰黄褐色	10YR4／2	長石・石英	底部	外：縦方向のハケ目　内：ナデ，指おさえ	底部にスス痕
9	第1	壷？	明褐色	2.5YR5／6	にぶい黄橙色	10YR7／3	石英	底部	内：ナデ，指おさえ	丹塗り
10	第2	壷	灰白色	2.5Y7／1	灰白色	2.5Y7／1	石英・長石	胴部～底部	外：丹塗，ヘラナデ　内：ナデ	丹塗り
11	第1	甕	にぶい黄橙色	7.5YR6／4	浅黄橙色	7.5YR8／6	石英・長石	底部	内：：ナデ	
12	第1	器台	灰黄褐色	10YR5／2	灰黄褐色	10YR6／2	長石・石英・角閃石	ほぼ完形	外：ナデ　内：指おさえ	
13	第2	〃	にぶい橙色	5YR7／4	明褐灰色	5YR7／1	長石・石英・砂粒	ほぼ完形	外：指おさえ　内：指おさえ	
14	第1	二重口縁壷	赤橙色	10R6／8	灰白色	10YR7／1	長石・雲母・石英・砂粒	口縁部	外：ヘラナデ　内：横方向ハケ目，シボリ	外丹塗り
15	第2	甕	にぶい橙色	7.5YR6／4	にぶい橙色	7.5YR7／4	長石・石英・金雲母・角閃石	底部～胴部	外：ハケ目　内：ハケ目	
16	第2	壷	明褐色	5YR5／6	橙色	5YR7／6	長石・石英	口縁部～胴部	外：薄いハケ目　内：ハケ目，ナデ	
17	第1	甕	灰黄褐色	10YR5／2	にぶい黄橙色	10YR7／3	長石・石英	口縁部	外：縦のハケ目　内：粗いハケ目	口唇部にハ状刻み
18	第1	壷	にぶい黄橙色	10YR7／3	淡橙色	5YR8／3	長石・石英・黒雲母	胴部～底部	外：胴部付近にハケ目，内：底部に指おさえ	
19	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR6／3	灰黄褐色	10YR5／2	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：粗いハケ目	
20	第2	器台	にぶい橙色	7.5YR7／3	にぶい橙色	7.5YR7／3	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ナデ，口唇部を粗いハケ目　内：口縁部付近に横方向のハケ目，内：に指おさえ	
21	第1	〃	灰黄色	10YR5／2	灰黄褐色	10YR5／2	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：縦方向のハケ目　内：口縁部付近にハケ目	
22	第2	甕	明赤褐色	5YR5／6	橙色	5YR6／6	石英・長石・角閃石	口縁部	外：ハケ目　内：粗いハケ目	
23	第2	器台	にぶい黄橙色	10YR5／3	にぶい黄橙色	10YR5／3	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	外：全体に粗いハケ目　内：口縁部付近に横方向のハケ目，上部にしぼり痕	
24	第2	支脚形土製品	にぶい橙色	5YR6／4	にぶい橙色	5YR6／3	長石・石英・金雲母	完形	外：ナデ　内：ヘラ，指おさえ	
25	第1	鉢	にぶい橙色	7.5YR7／4	にぶい橙色	7.5YR7／4	長石・石英・砂粒	完形	外：口縁部付近にハケ目　内：ハケ目，口縁部指おさえ	口縁部付近にスス痕
26	第2	台付甕	橙色	5YR6／6	灰褐色	7.5YR4／1	長石・石英・金雲母	底部	外：ナデ，ハケ目	
27	第1	鉢	にぶい橙色	7.5YR6／4	橙色	7.5YR7／6	長石・石英	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：口縁付近にハケ目	
28	第2	〃	にぶい褐色	7.5YR5／8	にぶい褐色	7.5YR6／3	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	外：細かなハケ目，ヘラ削り，口縁部付近は横ナデ　内：ナデ	
29	第2	壷	にぶい褐色	7.5YR6／3	明黄褐色	10YR6／6	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	内：指おさえ	
30	第1	二重口縁壷	明褐色	7.5YR7／2	橙色	7.5YR7／6	長石・石英・砂粒	口縁部～胴部	外：ハケ目，口縁部ナデ消し　内：ハケ目	
31	第1	〃	にぶい黄橙色	7.5YR6／4	にぶい黄橙色	7.5YR6／4	長石・石英	口縁部	外：縦方向のハケ目に横ナデで区画　内：口縁部付近に横ナデ，ハケ目	
32	第1	〃	にぶい黄橙色	2.5YR6／3	橙色	2.5YR6／6	長石・石英・砂粒	口縁部	外：ハケ目　内：ハケ目	
33	第1	〃	灰黄色	2.5YR6／2	にぶい橙色	7.5YR7／3	長石・石英・金雲母・黒雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目　口縁部付近をナデ　内：ハケ目	
34	第1	壷	にぶい橙色	7.5YR7／4	黄橙色	10YR8／8	長石・石英・砂粒	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：ハケ目	胴部中央にスス痕
35	第2	〃	灰褐色	7.5YR5／1	明褐灰色	7.5YR7／1	長石・石英・砂粒	ほぼ完形	外：縦方向のハケ目　内：口縁部付近に粗いハケ目，底部付近に粗いハケ目	
36	第1	〃	褐灰色	5YR6／1	にぶい黄土色	10YR7／3	長石・石英・砂粒	ほぼ完形	外：ハケ目　内：粗いハケ目	
37	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR7／4	にぶい黄橙色	10YR7／3	長石	ほぼ完形	外：ハケ目調整，底部ヘラ撫で　内：ヘラ調整	
38	第2	〃	灰白色	5YR8／2	浅黄橙色	7.5YR8／3	長石・石英	口縁部～胴部	外：ハケ目調整，底部ヘラ撫で　内：ヘラ調整	
39	第2	甕	にぶい黄褐色	10YR4／3	橙色	5YR7／6	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：胴部全体ハケ目，口縁部横ナデ　内：全体ハケ目，口縁部付近横ナデ	
40	第1	〃	にぶい黄橙色	10YR5／3	にぶい黄橙色	10YR7／3	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：口縁部付近にハケ目，胴部にナデ	
41	第1	〃	明褐灰色	7.5YR7／1	灰黄褐色	10YR6／2	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：斜行するハケ目　内：口縁部付近横方向のハケ目，胴部は交差するハケ目，指おさえ	
42	第2	〃	にぶい橙色	7.5YR6／4	にぶい橙色	7.5YR7／4	長石・石英・金雲母・角閃石	口縁部～胴部	外：ハケ目，口縁部横ナデ　内：ハケ目	
43	第2	〃	にぶい褐色	7.5YR6／3	にぶい橙色	5YR6／3	長石・石英・砂粒	口縁部～胴部	外：縦方向のハケ目　内：ハケ目，指おさえ	
44	第2	〃	灰褐色	10YR4／1	にぶい橙色	5YR6／3	長石・石英	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：ハケ目	
45	第1	〃	褐灰色	10YR5／1	にぶい橙色	7.5YR6／4	長石・石英・砂粒	胴部～底部	外：細かなハケ目　内：粗いハケ目	
46	第2	〃	淡橙色	5YR8／4	褐灰色	5YR4／1	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：ハケ目	

表1　ＳＤ－２出土土器観察表

番号	調査区	種類	色調(表)	色調番号(表)	色調(裏)	色調番号(裏)	胎土	残存状況	調整手法	備考
47	第2	〃	灰白色	10YR 7／1	灰白色	10YR 7／1	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：斜め方向のハケ目，口縁部横ナデ　内：粗いハケ目，ゆび押さえ，口縁部横ナデ	
48	第1	〃	灰褐色	7.5YR 4／2	にぶい褐色	7.5YR 5／4	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：ハケ目，口縁部ナデ	スス痕有り
49	第2	〃	灰黄褐色	10YR 6／2	にぶい橙色	5 YR 7／3	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：ハケ目	
50	第1	〃	灰褐色	7.5Y 6／1	灰白色	10YR 7／1	長石・石英・金雲母	完形	外：全面ハケ目，口縁部ナデ　内：横方向のハケ目，指おさえ，口縁部から胴部に横ナデ	
51	第1	〃	灰黄褐色	10YR 6／2	灰黄褐色	10YR 6／2	長石・石英・雲母	口縁部～胴部	外：縦方向の粗いハケ目，口縁部横ナデ　内：横方向のハケ目，口縁部横ナデ	
52	第1	〃	灰褐色	7.5YR 5／1	褐灰色	5 YR 6／1	長石・石英・砂粒	口縁部～胴部	外：胴部にハケ目　内：ナデ	
53	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR 6／3	にぶい黄橙色	10YR 7／2	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目，口縁部ナデ　内：口縁部ナデ，削り	
54	第1	〃	にぶい黄橙色	2.5YR 6／3	にぶい黄橙色	10YR 7／3	長石・石英・砂粒	口縁部～胴部	外：ハケ目	
55	第2	〃	にぶい黄褐色	10YR 5／3	にぶい黄橙色	10YR 5／4	長石・石英	口縁部～胴部	外：ハケ目，内：削り	
56	第1	〃	にぶい橙色	5 YR 6／3	にぶい橙色	5 YR 7／3	長石・石英・角閃石	ほぼ完形	外：ハケ目，ナデ　内：ナデ，削り	全体的にスス痕
57	第1	〃	にぶい黄橙色	10YR 7／3	黄灰色	2.5Y 5／1	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：横方向のハケ目　口縁部から胴部上位にナデ　内：斜め方向削り，　内：する口縁	
58	第2	〃	褐灰色	7.5YR 4／1	橙色	7.5YR 7／6	石英・長石	口縁部～胴部	外：口縁部横ナデ，胴部ハケ目　内：口縁部横ナデ，胴部削り	スス痕
59	第1	〃	褐灰色	10YR 6／1	灰黄褐色	10YR 6／2	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：削り（口縁端部を折り返す）	胴部一部にスス痕
60	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR 7／3	にぶい黄橙色	10YR 7／3	長石・石英・金雲母・角閃石	口縁部～胴部	外：ハケ目，口縁部横ナデ　内：削り，口縁部横ナデ	
61	第2	〃	褐灰色	7.5YR 5／1	にぶい橙色	7.5YR 7／3	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：上部横方向，中部縦方向のハケ目　内：斜め方向削り	三角刺突5点
62	第2	〃	にぶい橙色	7.5YR 6／3	にぶい橙色	7.5／YR 6／4	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：斜め方向のハケ目に横方向のハケ目　内：削り	
63	第2	二重口縁壺	灰黄色	10YR 5／2	灰黄色	10YR 6／2	長石・石英・金雲母・角閃石	口縁部～胴部	外：ハケ目　内：削り，指おさえ	
64	第2	〃	橙色	5 YR 7／6	橙色	5 YR 7／6	長石・石英・雲母	口縁部～胴部	外：ナデ，斜格子沈線　内：ヘラ削り	
65	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR 6／3	にぶい橙色	10YR 7／3	長石・石英・金雲母	口縁部	外：ハケ目　内：横方向のハケ目	
66	第2	〃	明褐灰色	7.5YR 7／2	明褐灰色	7.5YR 7／2	長石・石英・角閃石・雲母	口縁部～胴部	外：横ナデ，胴部ハケ目　内：横ナデ，口縁部ハケ目，削り	
67	第1	〃	灰黄褐色	5 Y 6／1	灰白色	5 Y 7／1	長石	口縁部～底部付近	外：胴部ハケ目，口縁部付近ナデ　内：口縁部付近ナデ	
68	第2	鉢	にぶい橙色	5 YR 7／3	にぶい橙色	5 YR 7／3	長石・石英・砂粒	ほぼ完形	外：口縁部横ナデ，底部ハケ目　内：ナデ	
69	第2	〃	黄橙色	7.5YR 8／3	黄橙色	7.5YR 8／3	長石・石英	ほぼ完形	外：ナデ　内：ナデ	
70	第1	丸底壺	黄橙色	7.5YR 7／8	黄橙色	7.5YR 7／8	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	外：底部に削り，口縁部ナデ　内：底部にハケメ調整	
71	第2	〃	灰白色	10YR 7／1	橙色	5 YR 7／6	長石・雲母	胴部破片	外：ハケ目　内：ヘラナデ	
72	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR 7／3	浅黄橙色	10YR 8／3	長石・石英・金雲母	口縁部～胴部	外：細かなハケ目　内：ナデ	
73	第1	〃	にぶい黄橙色	5 YR 7／4	橙色	5 YR 7／6	長石・石英・金雲母	完形	外：横ナデ，削り　内：ナデ	
74	第1	丸底壺	にぶい橙色	7.5YR 7／4	にぶい橙色	7.5YR 7／4	長石・石英・角閃石	ほぼ完形	外：頸部にハケ目，横ナデ　内：横ナデ，削り	
75		〃	明褐灰色	7.5YR 7／1	明褐灰色	7.5YR 7／1	長石・砂粒・金雲母	ほぼ完形	外：ナデ　内：ナデ	
76	第1	高坏	黄橙色	10YR 7／3	にぶい黄橙色	10YR 6／3	長石・砂粒・金雲母	口縁部～坏部	外：口縁部に横方向のハケ目　内：ナデ	口縁部にスス痕
77	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR 6／3	にぶい橙色	10YR 7／2	長石・石英・金雲母	口縁部～坏部	外：ヘラナデ　内：ナデ	
78	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR 6／3	にぶい橙色	10YR 7／3	石英・長石	口縁部～坏部	外：ハケ目，ヘラ磨き　内：ナデ	
79	第2	〃	にぶい橙色	7.5YR 6／4	にぶい橙色	7.5YR 7／3	長石・石英・金雲母	口縁部～坏部	外：ナデ内：ナデ	
80	第2	〃	淡橙色	5 YR 8／4	淡橙色	5 YR 8／4	石英・長石・角閃石	ほぼ完形	外：ハケ目，ナデ　内：ハケ目，横方向のナデ消し	脚部穿孔
81	第2	〃	明褐色	7.5YR 7／1	褐灰色	7.5YR 6／1	長石・石英・砂粒	脚部	外：ヘラナデ　内：ハケ目	脚部3ヶ所穿孔
82	第2	〃	にぶい黄橙色	7.5YR 7／3	にぶい黄橙色	7.5YR 7／3	長石・石英・雲母	脚部	外：縦方向のヘラナデ　内：ハケ目	脚部3ヶ所穿孔
83	第2	〃	にぶい橙色	5 YR 7／4	浅黄橙色	7.5YR 8／3	長石・石英・金雲母	脚部	外：ハケ目，ナデ　内：底部付近に細かなハケ目	脚部穿孔
84	第2	〃	にぶい橙色	7.5YR 6／4	浅黄橙色	7.5YR 8／3	長石・金雲母	脚部	外：ハケ目　内：底部付近に細かなハケ目	脚部穿孔
85	第1	〃	にぶい橙色	7.5YR 6／4	橙色	7.5YR 7／6	長石・石英・金雲母	脚部	外：ハケ目　内：細かなハケ目，ナデ	脚部穿孔
86	第1	〃	にぶい黄橙色	10YR 7／3	橙色	5 YR 7／6	長石・石英・金雲母	脚部	外：ナデ　内：ナデ	脚部穿孔
87	第1	〃	にぶい黄橙色	10YR 6／3	にぶい黄橙色	10YR 7／2	長石・石英・金雲母	脚部	外：ハケ目　内：ナデ，細かなハケ目	脚部穿孔
88	第1	〃	にぶい橙色	7.5YR 7／4	にぶい橙色	7.5YR 7／4	長石・石英・雲母	口縁部～坏部	外：ヘラなで　内：ヘラなで	
89	第2	〃	にぶい黄橙色	10YR 7／3	にぶい黄橙色	10YR 7／3	長石・石英・金雲母	ほぼ完形	外：口縁部ハケ目　内：ヘラなで	脚部3ヶ所穿孔
90	第2	〃	浅黄橙	7.5YR 8／6	浅黄橙色	10YR 8／3	長石・石英	ほぼ完形	外：ヘラなで　内：ヘラなで	
91	第2	〃	にぶい黄橙色	7.5YR 6／4	にぶい黄橙色	7.5YR 6／4	長石・石英・金雲母	脚部	外：縦方向のハケ目　内：上部にしぼり痕，ナデ	

表2　ＳＤ－２出土土器観察表

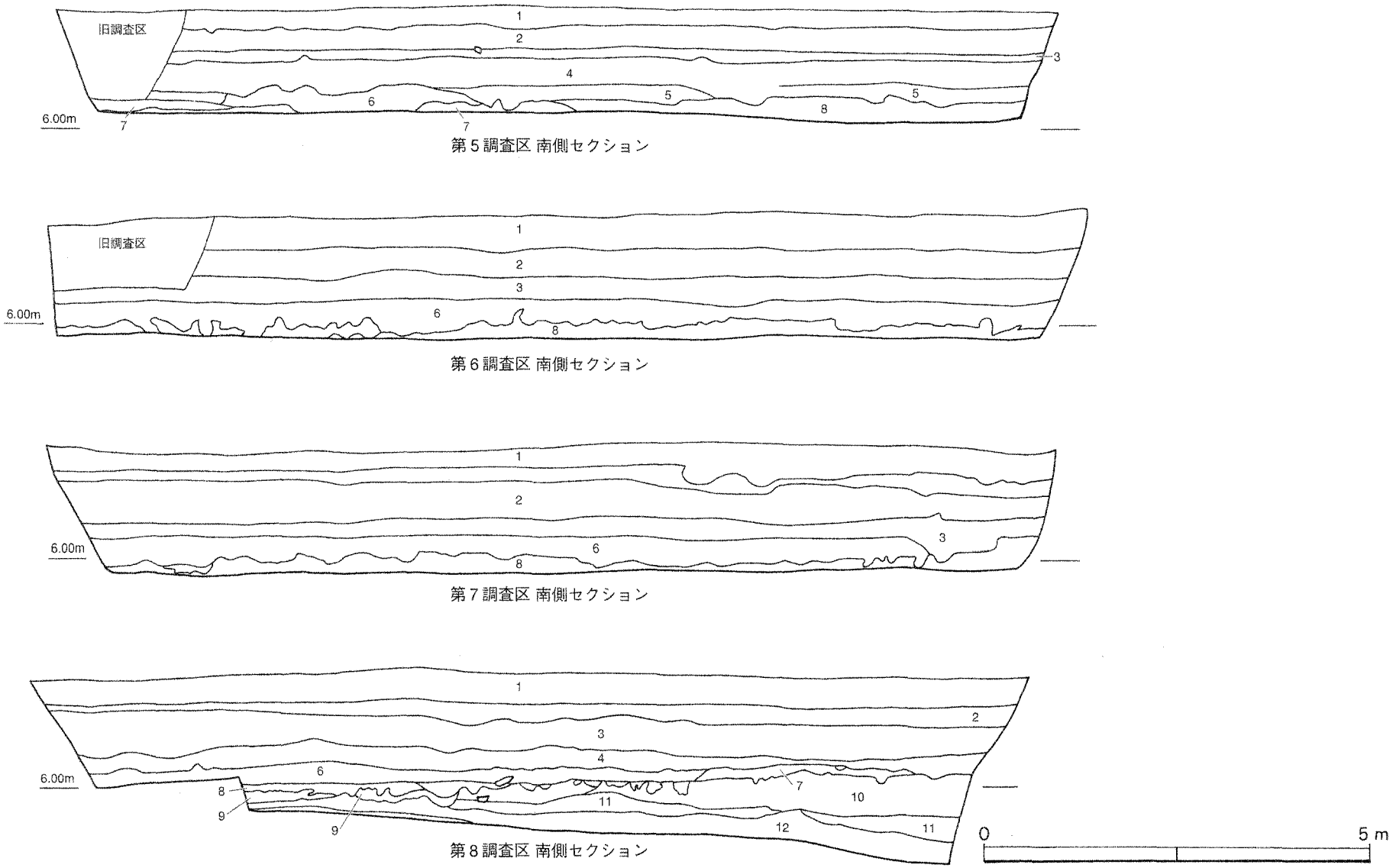
2．第5調査区から第8調査区の調査

第5調査区から第8調査区では，弥生時代に関連する溝等の遺構は検出されなかった。この地域は，以前の調査でも空白部分であったが，今回の調査でも古代関連の溝，杭列等を確認したものの，弥生時代の溝等の確認はなかった。第3・4調査区で確認された黒色土を充填する足跡状遺構が減少し，変わって茶褐色土を充填する足跡状遺構が全面に広がる。この茶褐色を呈する土は，古代の層に相当する土で，古代においては水田耕作がおこなわれていた場所と判断する。第6調査区では，足跡状遺構下部から，いくつかの小ピットを確認した。弥生時代のピット群と判断したが，ピットから遺物を検出することができず，その帰属時期まではおさえることはできなかった。このことから第5～8調査区は，第4調査区で出土した土師器や杭列に伴う古代の遺構がこの地区までおよんでいることが明らかとなった。この場所に弥生時代の溝等が検出されなかったことについては，それなりの意義を見出す必要があろうと考える。

(1) **土層**（第32図）

第5調査区では，1～3層については第1～第4調査区と同様である。3a層は，3層下部に灰黄色の斑が出土し始めた時点で3a層として捉えた。第4調査区から始まる層で，やや砂質に富み，細かな有機物や動物の骨片も含む層である。黄褐色の斑については，鉄分と考えられ水田との関連が指摘される。この地区では3a層は東側でより顕著に堆積し，古墳時代の堆積層と考えられる3b層を一部切って堆積している。ちなみに，第6調査区の3a層から出土した炭化物を年代測定にかけた結果，1280±40の値が得られている。第4調査区の土師器の時期よりもやや古い値を示すが，いくらかの年代幅がある古代の水田の可能性を指摘しておきたい。水田の可能性については，植物珪酸体（プラント・オパール）分析結果からも，4,200個／gと比較的高い数値が示されている（附編p96)。3b層は暗黒色粘質土で，SD－1・2の①層にあたるものと考える。第3調査区から第4調査区の足跡状遺構に充填する土と同じと考えて大過ない。このことから，3b層は古墳時代初頭の層として捉えている。この地区ではこの3b層が直接地山層の上に乗り，古代の層として捉えている3a層によって切られている。この3b層についても分析の結果，6,200個／gという3a層以上のプラント・オパールの密度が確認されている。このことから，3b層も水田であった可能性がある。第3調査区の北側に広がる足跡状遺構の充填土が3b層であることから，水田耕作の際の作業を示す足跡であろうことが予想される。

第8調査区は，6（3a）層までは他と基本的に変化ないが，古代から古墳時代の溝に関連する窪地がセクション上に現れている。充填する層は，7層が暗灰色混砂粘土層で，8層に食い込む形で凹凸面を形成している。地山層は西から東に向かって緩傾斜して窪地となっており，この窪地に水が溜まった状態があったものと考えられる。この窪地は第5調査区から始まる古代の水路に繋がると思われることからこの凹凸も古代の遺構と考えられる。



第５調査区 南側セクション

第６調査区 南側セクション

第７調査区 南側セクション

第８調査区 南側セクション

第32図　第５～８調査区土層図（１/60）

(2) **遺構**（第33・34図）

弥生時代の遺構としては，第６調査区のピット群が可能性があるが，その時期等については判断がつかない状況にある。その他は古代の杭列や浅い溝等が検出されたにすぎない。このことから，古代の杭列と，第６調査区のピット群について，第５～８調査区を一括して報告する。

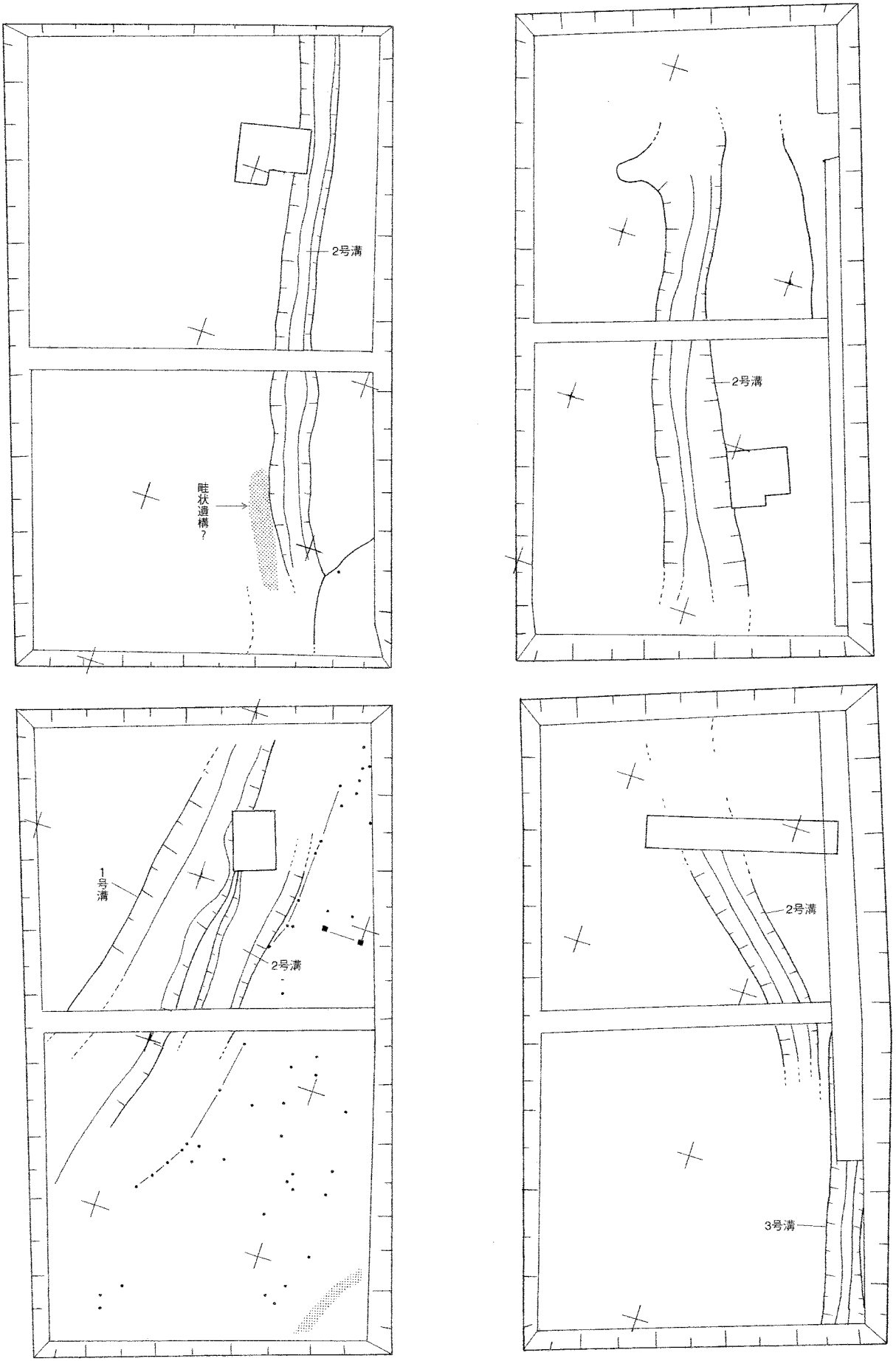
溝・杭列

第５調査区からは，浅い溝２条と杭列が検出された。溝は，第４調査区で検出した土師器碗の並びとほぼ同じ方向に軸を取る。１号溝は，広い所で幅約2.5mを測るが，第６調査区では不鮮明となり消滅する。深さは約30cm前後を測り，充填している土は淡黒色を呈している。２号溝は，広い所で幅1.8m位あるが，ほぼ幅１m位の広さで第８調査区まで続く。深さは約30cm前後の浅い溝で，充填土はやや砂質を帯びた淡黒色の粘質土である。溝は第８調査区まで続くものの，第７調査区の南側で一旦不鮮明となり，第７調査区の北側の調査区で鮮明になる。３号溝は，２号溝と幅や充填する土色がほぼ同じであるが，第７調査区と第８調査区の北側に一部確認されるのみである。１～３号溝については，途中で切れたり，不鮮明な部分も多かったが，これは，構成の耕作等がこの部分ではげしかったことを伺わせるもので，断続的に水田としての利用がなされていたものと考えられる。この他，第６調査区の２号溝の一部に明褐色の硬質の砂が確認された。畦状のものと判断したが，このような遺構は第５調査区の南側に一部確認しただけで，他には確認されなかった。ただし，杭列が検出された一面には，明褐色の砂が多く，畦状遺構が崩壊した跡ともとれる状況であった。

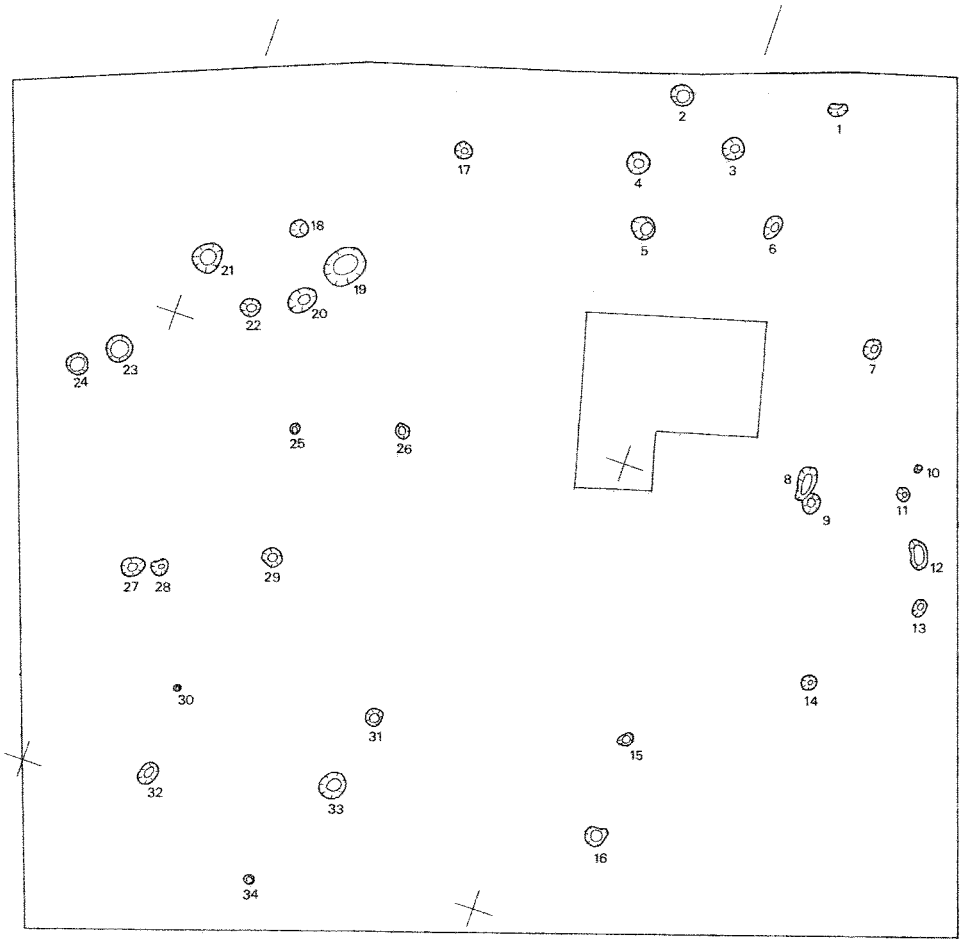
杭は溝の東側一面に検出され，溝の西側では確認されなかった。このことから，溝に伴う杭列と思われるが，多くの杭は規則性を見いだせなかった。２号溝の東側には，線で繋いだように，溝に沿うように杭列が確認されており，２号溝に関連した杭列として捉えた。その他にも西側には多くの杭列を確認したが，その性格については判断がついていない。杭の材は，桜の木がほとんどで，桜の樹皮が付いた状況のものが多く検出されている。杭および溝の検出面には，地山とした８層の灰白色粘土層上に３ａ層が斑状に広がり，一面に足跡状の遺構を検出している。斑状のものを下げていくと牛の蹄状の痕跡が確認されることから，この地域が水田として使用されていた可能性が高い。この状況は第８調査区まで確認できる。第１～第２調査区では，この足跡状遺構面下にＳＤ－２・３が検出されたが，第５～８調査区では溝あるいは環濠の確認はなく，第６調査区でピット群を確認したにすぎない。

ピット群

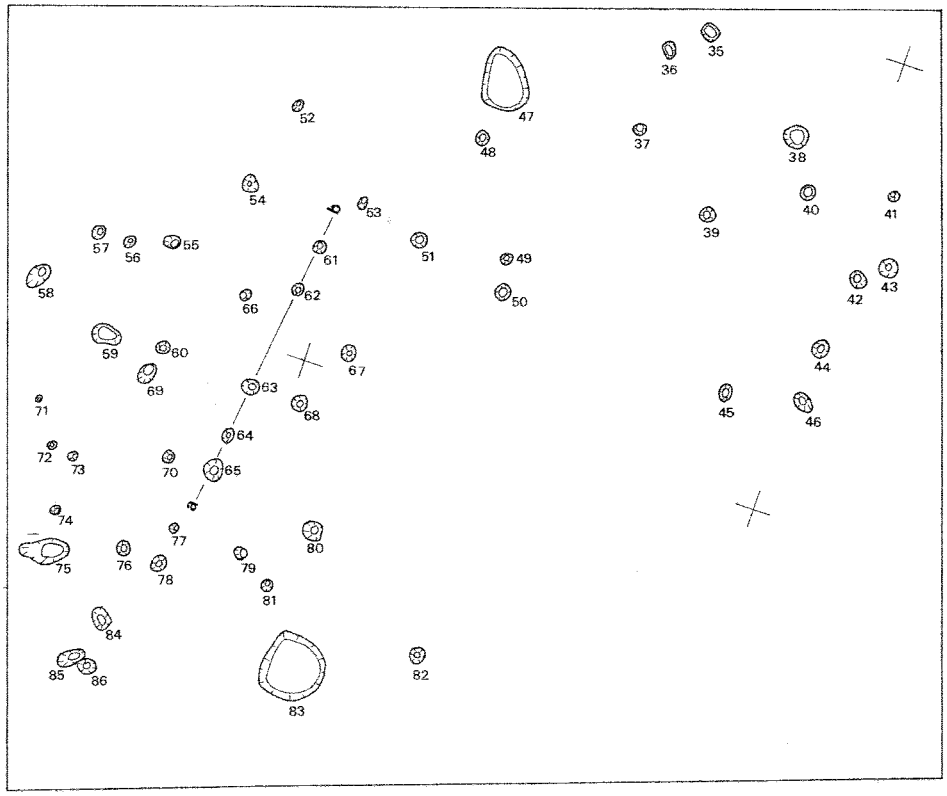
第６調査区では，斑状の遺構の下面からピットが検出された（第34図）。８層の粘土層を基盤とするピット群である。ピットはかなり小形のものが多く，ほぼ直径10cm～20cm内に納まる。充填する土の色は３種類あるが，暗茶褐色のピットが大部分を占める。ピットの大きさから見て，小形の掘っ建て柱や，柵状のものがあったと考えられるが，その時期を示すものが出土していないことや，上部を削平されていると考えられることから，詳細については不明である。柵列の可能性あるピット群としては，一応線で繋いでみた。

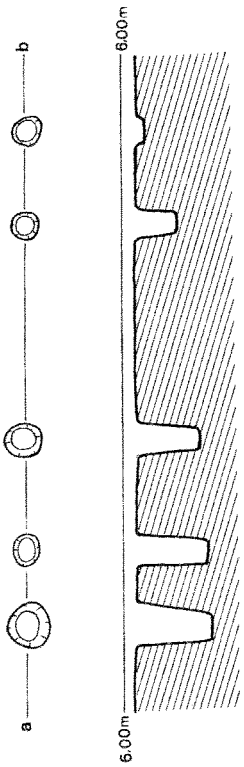


第33図　第５～８調査区遺構図（１/160）



ピット番号	深さ cm	ピット番号	深さ cm
1	18	44	22
2	30	45	16
3	7	46	5
4	7	47	5
5	8	48	24
6	14	49	6
7	23	50	2
8	23	51	12
9	13	52	4
10	7	53	5
11	10	54	25
12	10	55	23
13	8	56	5
14	21	57	12
15	24	58	29
16	25	59	23
17	21	60	17
18	18	61	5
19	30	62	24
20	21	63	35
21	17	64	31
22	8	65	43
23	35	66	3
24	6	67	15
25	欠	68	5
26	欠	69	34
27	27	70	3
28	26	71	5
29	25	72	17
30	14	73	31
31	20	74	4
32	20	75	42
33	14	76	31
34	欠	77	6
35	19	78	7
36	25	79	欠
37	欠	80	9
38	26	81	2
39	欠	82	6
40	欠	83	17
41	16	84	9
42	13	85	3
43	13	86	4





第34図　第６調査区検出のピット群（１/80）

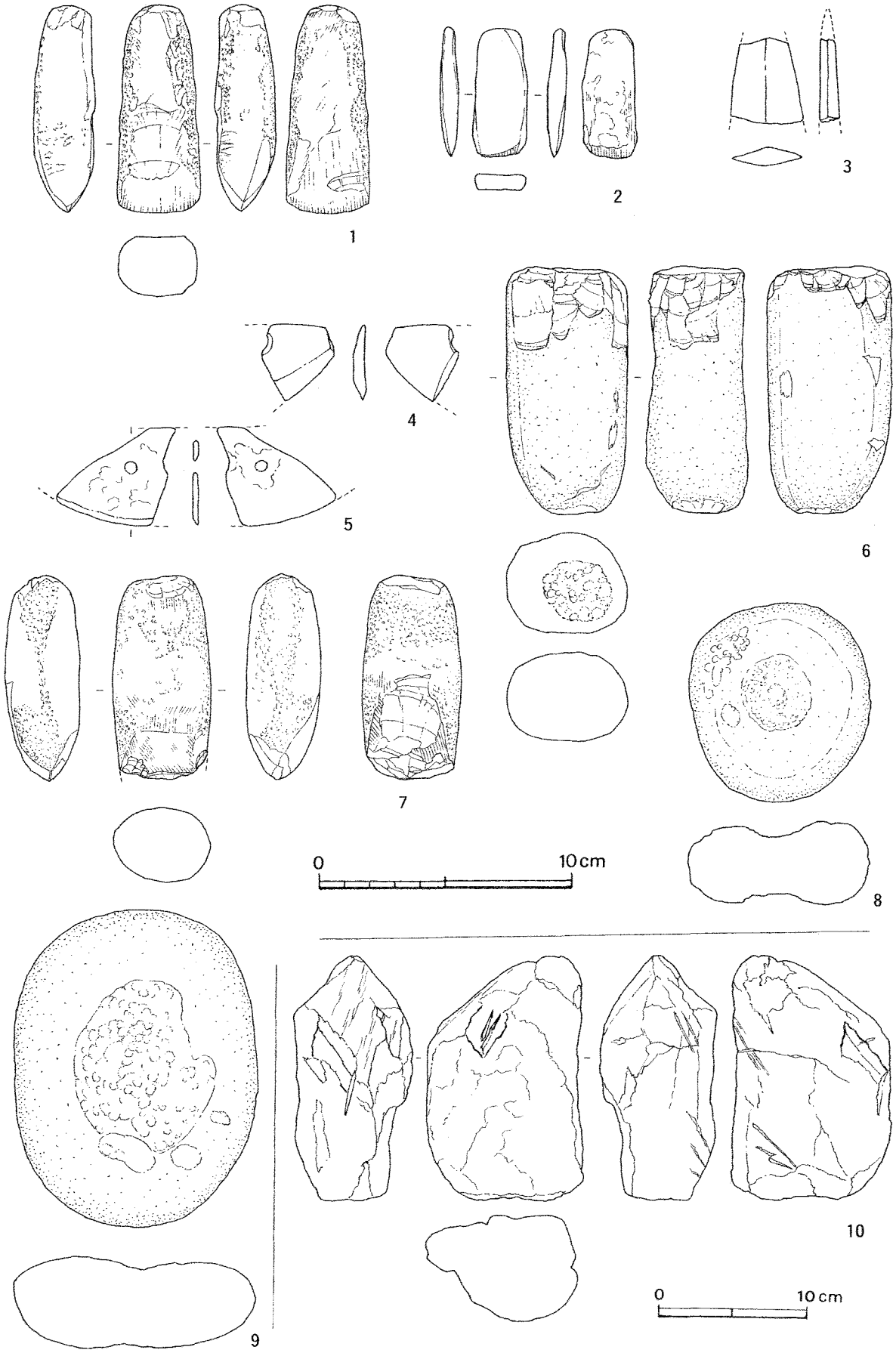
(3) 出土遺物

古代関係の遺構が多くを占めるが，古代関連の遺物としては第７調査区で古代の土師器椀の高台が出土する程度で，ほとんどが弥生時代の遺物で占められてる。ただし，前述したように弥生式土器については摩耗や劣化がはげしく細片が多い。このことは，古代の水稲耕作等によるものと判断される。

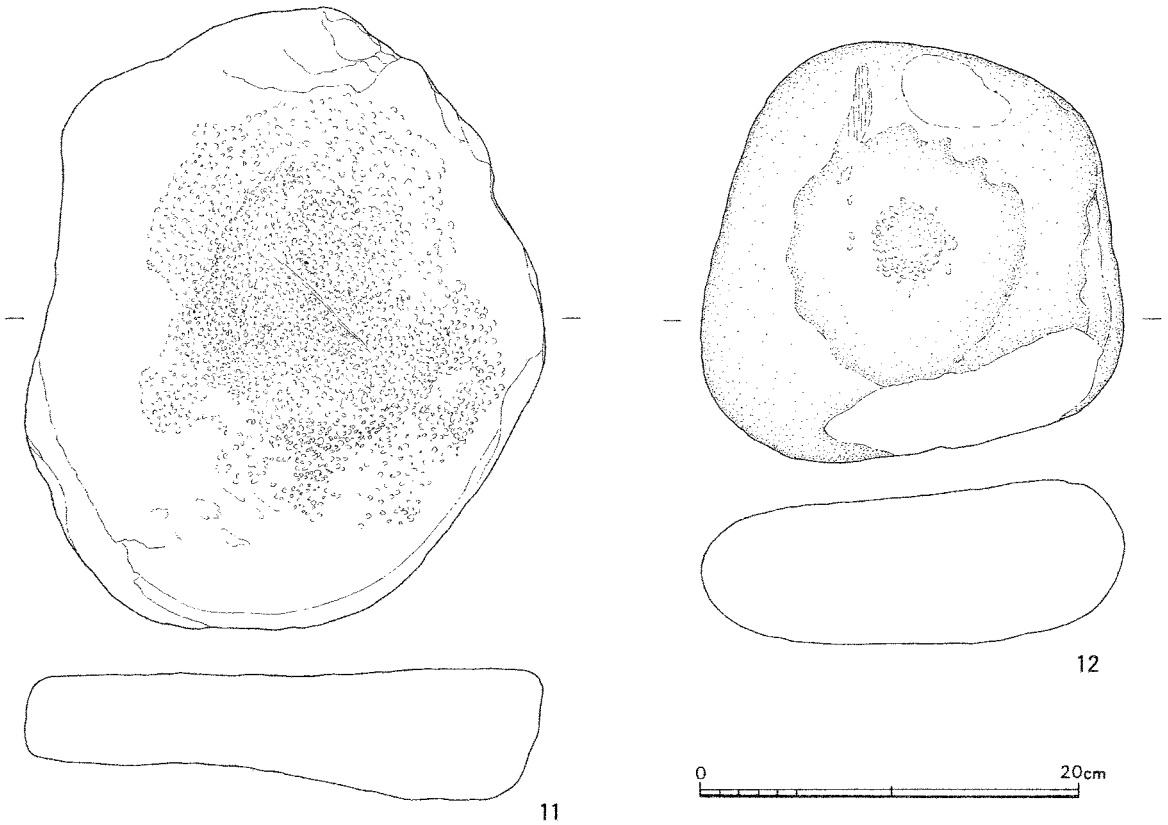
この調査区からは，弥生時代中期～後期の資料が存在するが，遺構等に伴うものではないことや，古代の攪乱をうけていると判断されることから，ここでは特に抽出しない。ただし，石器については他の調査区にはない遺物が出土しているため第５～８調査区一括遺物として報告する。

第５～８調査区出土石器（第35・36図）

数は少ないものの石器は多種にわたる。**1**はやや小振りの石斧で，玄武岩を素材とし全体を敲打整形によりに仕上げている。刃部先は丁寧な研磨を施しているが，やや偏っており，片刃状になる。**2**は片岩製の小型の片刃石斧で，刃部と一面に研磨痕が観察される。**3**は片岩製の石剣の切っ先である。先端部と下部を失うが，峯部はしっかりしている。**7**・**8**は石庖丁で，どちらも頁岩を使用しているが，**8**はかなり風化していることから片岩の中でも軟質部分を素材とした結果であろう。**6**は敲き石で，先端部に多くのダメージを受けており，丸みをもつ。杵状の機能を持ったものと考える。**7**は**1**と同様に敲打整形によって全形を整えてから刃部を研磨する石斧である。**1**に比べ全体的に丸みを帯びており，刃部は使用によるものと思われる欠損が著しい。**8**は凹石で，中央部の凹は両面ともに深いことを特徴としている。**9**も両面に凹をもつものであるが**8**ほどの使用がなされていなかったのか凹は浅い。ただし，ダメージ痕は幅広い。**8**・**9**ともに周囲に敲打痕跡がないことも特徴として挙げられよう。**10**は多孔質玄武岩製の支脚形石製品である。支脚形石製品のなかでは小型の部類に入る。作りは雑ではあるが，取っ手部を作り出している。全体的に扁平で，先端部が尖るような造りとなっている。**11**・**12**は大形の台石で，**11**が硬質の玄武岩を使用しているのに対し，**12**は硬質の砂岩を使用している。**11**は中央部を中心に万遍なく無数の敲打痕が観察されるが，**12**は中央部により使用頻度が高かったのか，中央部に５cm程の円形になる細かな敲打集中部が認められる。石の質からも作業内容が変化していたものと思われる。



第35図　第５～８調査区出土石器①（１/３・１/４）



第36図　第５～８調査区出土石器①（１/４）

第５～８調査区では弥生時代の遺構はほとんど確認されていないが，石器については弥生時代に属すると思われる遺物が他の調査区よりも多く出土している。しかも，生産に係わるであろう石斧・石庖丁・台石などが出土していることは，攪乱を受けているとはいえ，大幅に遺物が移動していないとすれば，他の調査区以上に生産に関与する石器が出土していることになる。今回，第５～８調査区では，古代の水田跡との関連をもつものとの判断を下したが，遺構は捉えることはできなかったものの，石器では２点の石庖丁が出土していることから，弥生時代にも水田があった可能性も残されている。

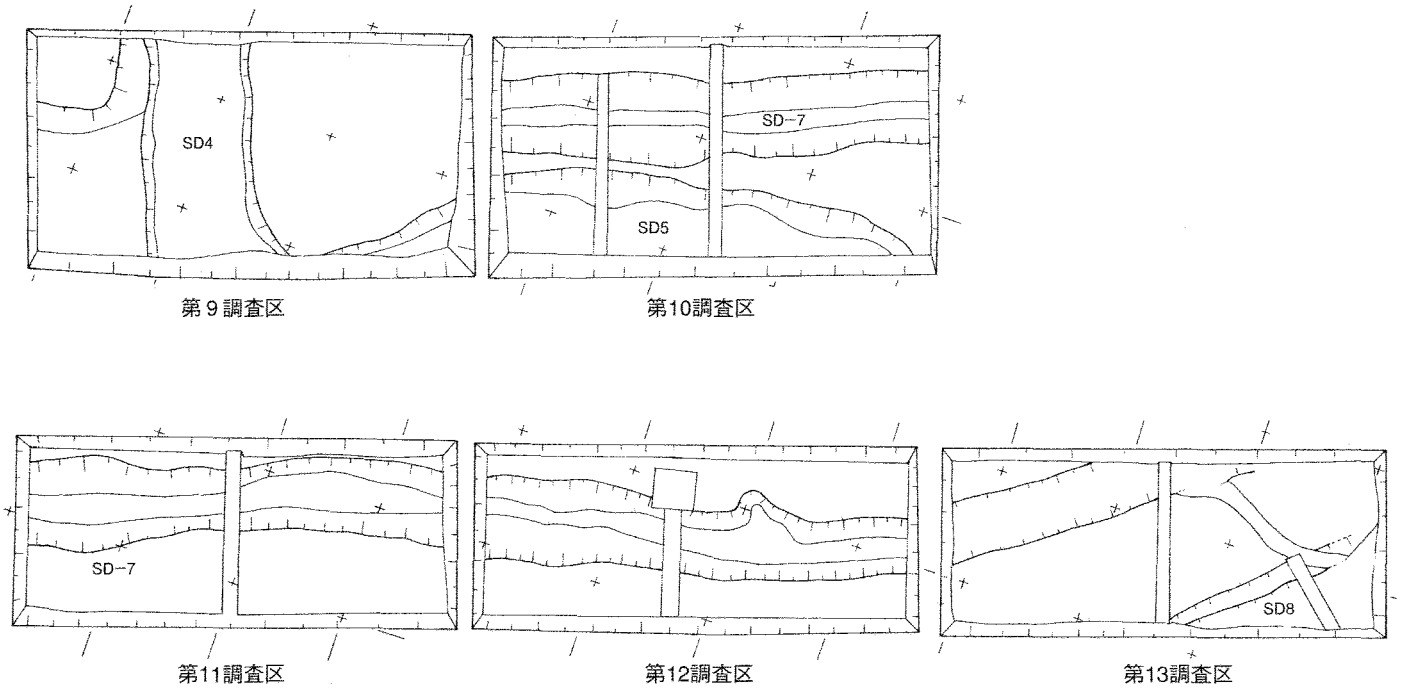
この他，弥生時代の遺構が確認されなかった背景には，何らかの作業の場として機能していた可能性をも想定する必要もあろう。弥生時代の土器は摩滅したものが多いとはいえ，中期に属するが出土している。石器についての時期的な判断は難しいが，石斧については，時期的には中期に属するものとみている。

3．第９調査区から第13調査区の調査

第９～13調査区からは，旧河道２条，溝１条が検出された。旧河道は，平成13年度に原の辻遺跡保存等協議会によって調査された，コヨウ４区（小石編2002）のＳＤ－８（旧河道）が第９調査区に検出されることが予想された（第５図）。このＳＤ－８は従来，平成11年度農道調査（村川・西編2000）の２・３号旧河道に取り付くものと予想されたが，今回の調査で第10調査区で丘陵方面へ入り込み，第13調査区の東側で確認したＳＤ－８に繋がるようである。農道調査の３号旧河道には取り付くものの，２号旧河道方向には延びず，北側に延びていくことが確認された。農道調査確認の２号旧河道については，今回未確認である。溝とした，ＳＤ－７は調査区に沿うようにして第10調査区から第13調査区まで延び，第13調査区の北側で西側に折れることが判明した。この溝については，旧河道とは充填する土の色が相違することから，当初から時期的な相違があることが考えられた。この他の遺構としては，第９調査区で古代の杭列が東西方向に確認された他，第13調査区でも古代と考えられる溝等が確認されている。第９・10調査区で確認されたＳＤ－４・５は本来同じ旧河道であるが，調査時に区別していた関係上ＳＤ－４・５として報告する。

(1) **土層**（第34・35図）

第９調査区南側では，第８調査区で検出した古代と思われる足跡状遺構が徐々に消滅する。ただし，第８調査区検出の窪地は，セクション図第６層に見られるようにこの地区まで延びてくる。第６層は灰黄褐色砂質土層で，第10調査区まで広範にある層である。下部に砂が沈殿したような堆積を見せることから水田の可能性が高い。旧河道の上に堆積することから，古代の層として位置づけられる。７層は，粘土層であるが，西側で赤褐色を呈し，東側では淡青灰色状になる。第９調査区西側のセクショ



第37図　第９～13調査区遺構配置図

ンには，旧河道ＳＤ－４が確認される。７層を切ってＳＤ－４が形成され，ＳＤ－４内には大きく２つの層に分けることができる。①層は漆黒色の粘土質の層で，遺物は弥生時代後期から古墳時代前期に至る遺物が出土する。②層は，弥生時代後期初頭のものが含まれるが，古墳時代前期まで出土することから，旧河道は弥生時代後期初頭に形成され，古墳時代前期まで埋没期間があったものと判断する。

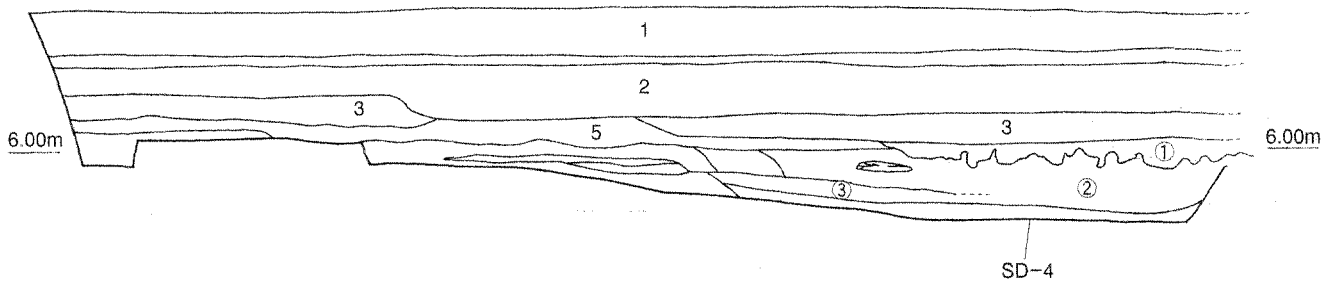
第10調査区南側セクションでは，ＳＤ－５（ＳＤ－４と同じ）の東西セクションの一部が観察される。また，ＳＤ－７の立ち上がりが観察される。

(2) **遺構**（第40・41・46・51図）

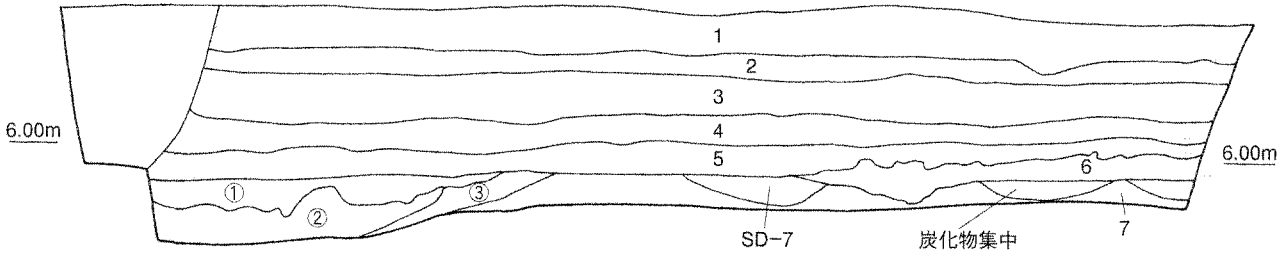
ＳＤ－４・５（第41・42図）

遺物取り上げの関係上，第９調査区確認の河道をＳＤ－４として，第10調査区確認の溝をＳＤ－５として捉えたが，本来ＳＤ－４と５は同一のものである。ここではＳＤ－４・５として一括して報告する。遺構は，第９調査区で東西に一直線上に延び，東側でやや湾曲して検出した。南側の立ち上がりは緩やかであるが，北側の立ち上がりは急な立ち上がりを見せる。検出面は表土下約１ｍの地点で，遺構の幅約５ｍ，深さ約60cmを測る。遺構内の土層は簡潔的で大きく３層に分けられる。①層は漆黒色で，弥生後期終末から古墳時代初頭の遺物が出土する。②層はやや灰色をおびた粘質土である。遺物は，後期終末から古墳時代前期のものも出土するが，弥生時代後期初頭のものもある程度出土していることから，後期初頭には旧河道が存在していたものと判断する。③層は明黄褐色の砂礫層で，弥生時代中期後葉の土器を含む。①～③層から，ＳＤ－４は③層の砂礫層をベースに，①・②層が堆積したもので，河に付随する遺物としては①・②層が充当し，③層は周囲に広がる層として捉えている。このことから本来の河道は，弥生中期後葉に形成され，古墳時代前期まで存続していたものと判断している。①層の黒褐色の粘質土は，第１～３調査区で確認したＳＤ－２・３の①層に類似しており，弥生後期終末から古墳時代初頭の堆積物に見られる共通した土色と思われる。遺物の出土状況は，第１～３調査区検出のＳＤ－２ほどの遺物の集中はみられなかったが，同じく第１調査区のＳＤ－３と同じように流木の出土が多く，木器の出土も若干みられた。②層からは楽浪系の遺物の出土も他に比べやや多いことも特徴的である。また，ＳＤ－４・５の下に新たに溝を確認している。第９調査区の南側での確認であるが，この溝については，ＳＤ４・５の基盤層である③層を切るように東西に設営されている。溝内には流木が無数に出土したが，劣化が激しく，一度ある程度空気にさらされていたのではないかと思う程であった。この中からは，楽浪系土器が１点出土している。中期後葉の③層を切っている状況や，この溝より新しい②層の時期が後期終末から古墳時代前期の時期であることから，この溝については弥生時代後期初頭の溝と判断している。したがって，楽浪系の土器もこの時期のものであろう。

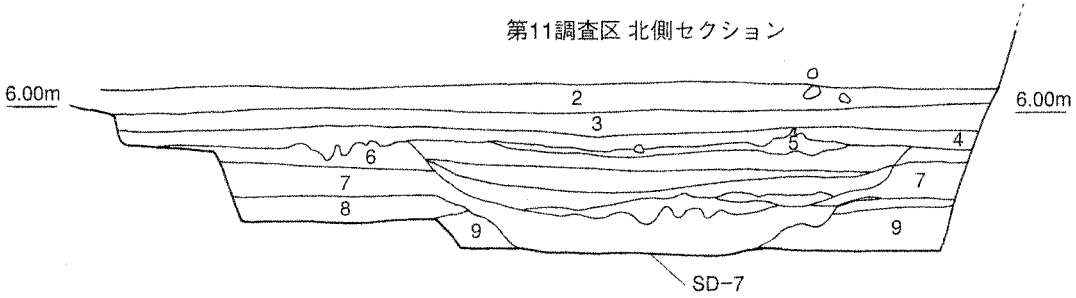
第9調査区 西側セクション



第10調査区 南側セクション

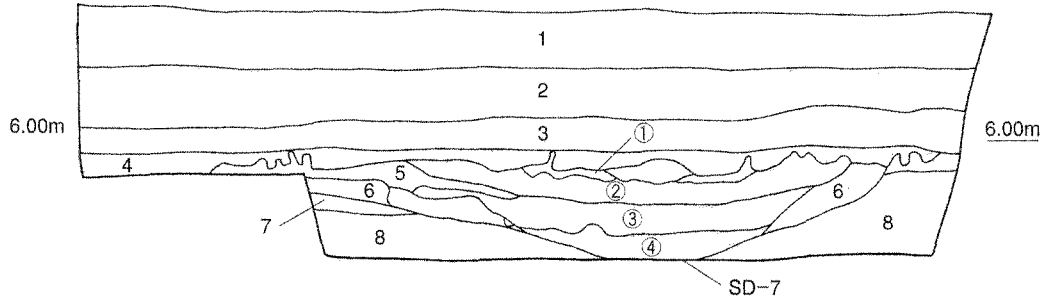


第11調査区 北側セクション

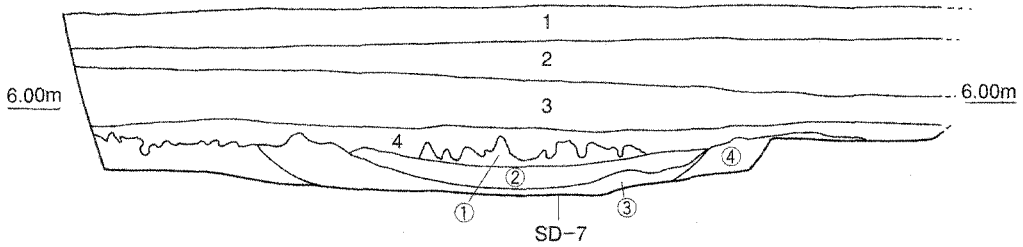


第38図　第９～11調査区土層図（１/60）

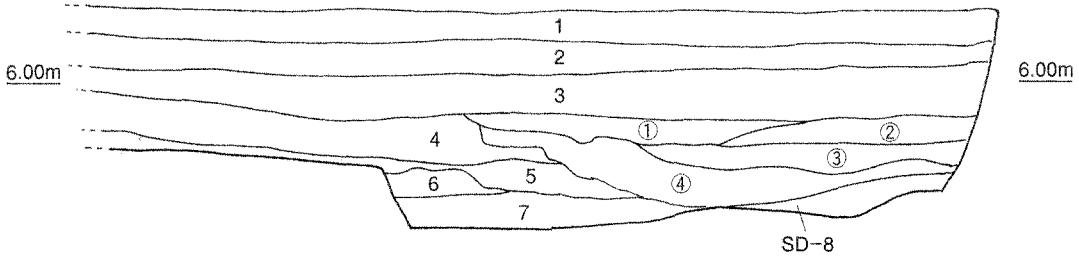
第12調査区 南側セクション



第12調査区 北側セクション

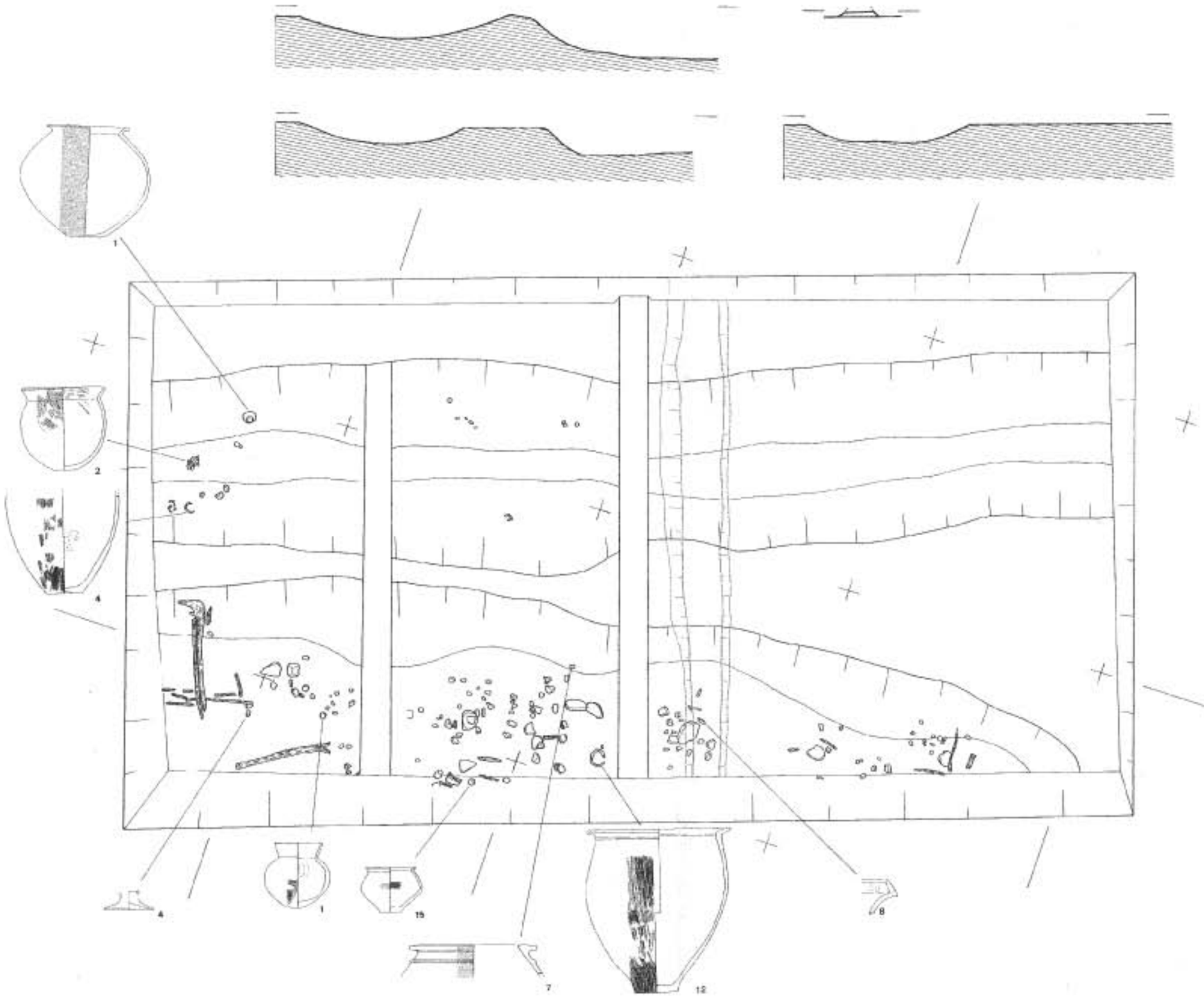


第13調査区 北側セクション



第39図　第12～13調査区土層図（1/60）

第40図　第９調査区ＳＤ－４・５遺構・遺物検出状況（１/80）



第41図　第10調査区ＳＤ－４・５遺構・遺物検出状況（１/80）

ＳＤ－６

第10調査区北側に幅20cm，長さ６ｍ程の小さな溝を検出した。この溝は第11調査区では，途切れる状態にある。遺物は出土はなく性格等については不明であることから，今回は割愛した。

ＳＤ－７（第41・46・51図）

第10調査区から始まり，第13調査区まで南北にのびる溝で，第13調査区で西側に蛇行して農道側に抜けていく。確認した幅約３ｍ，深さ約60cm，長さは70ｍを測る。溝は，第10調査区で検出したときには，やや薄い灰青色の充填土であったが，北側になると明瞭な暗灰色で確認されるようになる。遺構としては浅く，他の遺構と違い古墳時代の黒色土が上に乗らないことから，急速に埋没し，古墳時代前期には完全に埋没していたものと思われる。遺物は，他の溝に比べ少ないが，完形品の小型丹塗壺の出土が多いこと，流木が散漫的に出土するなどの特徴がある。壺は後期初頭から後期中葉にほぼ限定できることから，ＳＤ－７の時期を後期初頭から中葉に充てることが可能と判断される。深度が浅いことから，溝として捉えた。

ＳＤ－８（第51図）

第13調査区で確認した旧河道で，第９・10調査区確認のＳＤ－４・５が一旦東側（台地側）に抜けたものが再度第13調査区で現れたものと判断している。検出面は，東側が明橙色の粘土で玄武岩の風化土と考えられる。東側は灰白色の粘土である。遺構は，一部分だけの検出であるが，上部に砂礫層が乗り，下部は灰黒色の粘質の土層で,2層に大別される。粘土層の間に砂礫が何枚か不規則に堆積し，かなりの乱れが生じていることから，河の流れの影響を受けているものと見られる。上部の砂礫層は，古墳時代前期の遺物が多く，下部は後期後葉の遺物が多い傾向にある。ただし，弥生時代中期後葉の土器が混在して，どの層にもある程度の土器が出土している。この事実は，ＳＤ－８の西側縁に約30cm幅で淡灰黒色土の帯が認められることから，古い溝を切ってＳＤ－８が存在したものと考えられ，古い溝の遺物，つまり中期後葉の溝のものが巻きこまれた結果，ある程度の時間幅の遺物が各層に出土する傾向にあると判断した。遺物としては，楽浪系の遺物や瓦質土器の出土が見られる。また，流木とともに加工痕のある木器も出土している。ＳＤ－８は，中期後葉の溝を切って，後期後葉から古墳時代前期まで継続していた旧河道であると判断した。

古代の溝

13調査区で２条の溝を確認している（第51図）。この溝はＳＤ－７とＳＤ－８を切って平行に並んで検出された。充填土は，黄褐色の砂質土で古代の層に相当することや，ほぼ南北方向であることなど他の古代の遺構の軸と同じであることから，古代の溝と判断した。この溝に平行して小さな杭列が確認されているが，遺物の出土はない。

(3) 出土遺物

ＳＤ－４・５出土土器（第42・43図）

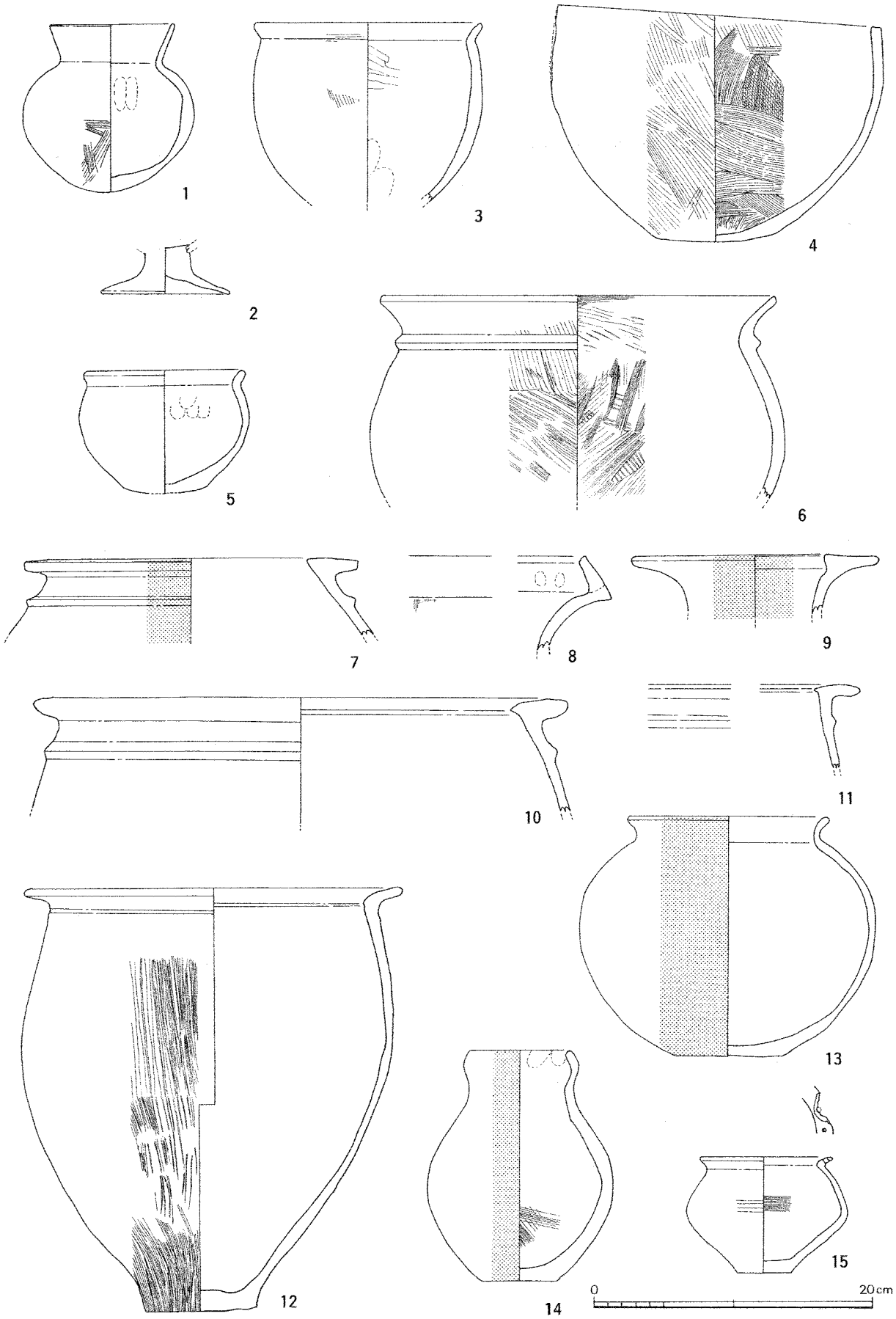
弥生中期後葉から古墳時代前期までの土器が多くを占める。弥生中期後葉の土器は，河底の砂礫層のもので，河の①上層から古墳時代前期の遺物，②層から弥生後期後葉の土器が出土する傾向にある。

半島系の土器も今回の調査区の中では多く出土している。半島系の土器については，４．その他の遺物の項で説明する。

1は小型壷で，胴部が半球体をなし底部も丸底となる。頸部から口縁部にかけてはやや開き気味である。胴部中央部が分厚く，口縁部にかけて薄く仕上げている。内部には指頭圧痕があることから，最後の調整は指によるものである。表面はヘラ調整をおこなう。**2**は器台で上部を欠くが，半球形の鉢がつくものであろう。器台そのものはかなり低く造られ，かなり広がりをみせることから，古墳時代の前期のものであろう。**3**は鉢で口縁部をくの字状にし，胴部にやや張りをもたせている。外面はヘラ調整のあとが見られ，内部は上部をヘラ削り，底部を指によって調整している。**4**は鉢で口縁部を平たく調整し，半球形の胴部へと繋がる。底部は薄く仕上げており設置面は平底である。**5**は**3**を小型化したもの内部調整，口縁部がくの字状になる点など共通点が見られる。**6**は灰褐色を呈する甕で，頸部に一条の三角突帯を巡らす。体部は頸部付近を縦のやや粗いハケ目で調整し，内部はやや細かいハケ目で調整する。**7**は丹塗の壷で口縁部は平坦に整え，くの字状に急激に屈曲して胴部へと続く。口縁部下に一条の三角突帯を巡らす。弥生中期後葉のものか。**8**はくの字状に内湾する口縁をもつ壷で，内側は指頭による調整痕が目立つ。屈曲部は急な折り返しで，後期後葉ころのものか。**9**は全体丹塗りの壷である。口縁部を平坦にし，頸部が筒状になる。**10**は口縁端部がやや内側に傾斜する甕で，口縁部下に一条の突帯をもつ。**11**も同様であるが，胴部の張りが少ない。**12**は底部にくびれをを持つ甕で口縁部はややくの字状に変化している。外面はハケ調整を一面に施し，内面はナデ調整をおこなう。弥生中期終末位か。**13**は外面丹塗りの短頸壷である。口縁部は外反し口唇部が丸く納まり，胴部は球体状である。**14**は２重口縁壷であるが，頸部のくびれは浅く口唇部の内湾も弱いことから，後期初頭位のものとかんがえる。外面は丹塗であるが，内面については口縁部を指押さえによって整形し，ヘラでも調整する。**15**は口縁部上に蓋用の孔を穿った蓋付きの短頸壷である。胴部中央部に最大径をもち，底部付近でややくびれをもつものである。以上が溝内から出土した遺物であるが，弥生時代中期後葉～古墳時代前期までの遺物が出土している。弥生時代中期後葉から後期初頭の遺物については，河底を構成する砂礫層上から出土する傾向にあり，古墳時代前期の遺物は上位の黒色の粘土層から出土する傾向がある。この他の遺物としてＳＤ－（４，５）検出面の下層から，遺物が出土しており，下層出土の土器として報告する。

下層出土の土器

16・**17**は頸部下に１条の三角突帯を擁するが，やや明瞭さに欠ける。口縁端は平滑で，胴部はやや張りだしている。**19**は，坏であるが胎土・焼成とも粗い。口縁部が内側に内傾し，坏部が口縁の径に対して深いのが特徴である。**21**は小型の壷で内外面にハケ目で丹念に調整している。口縁部はくの字



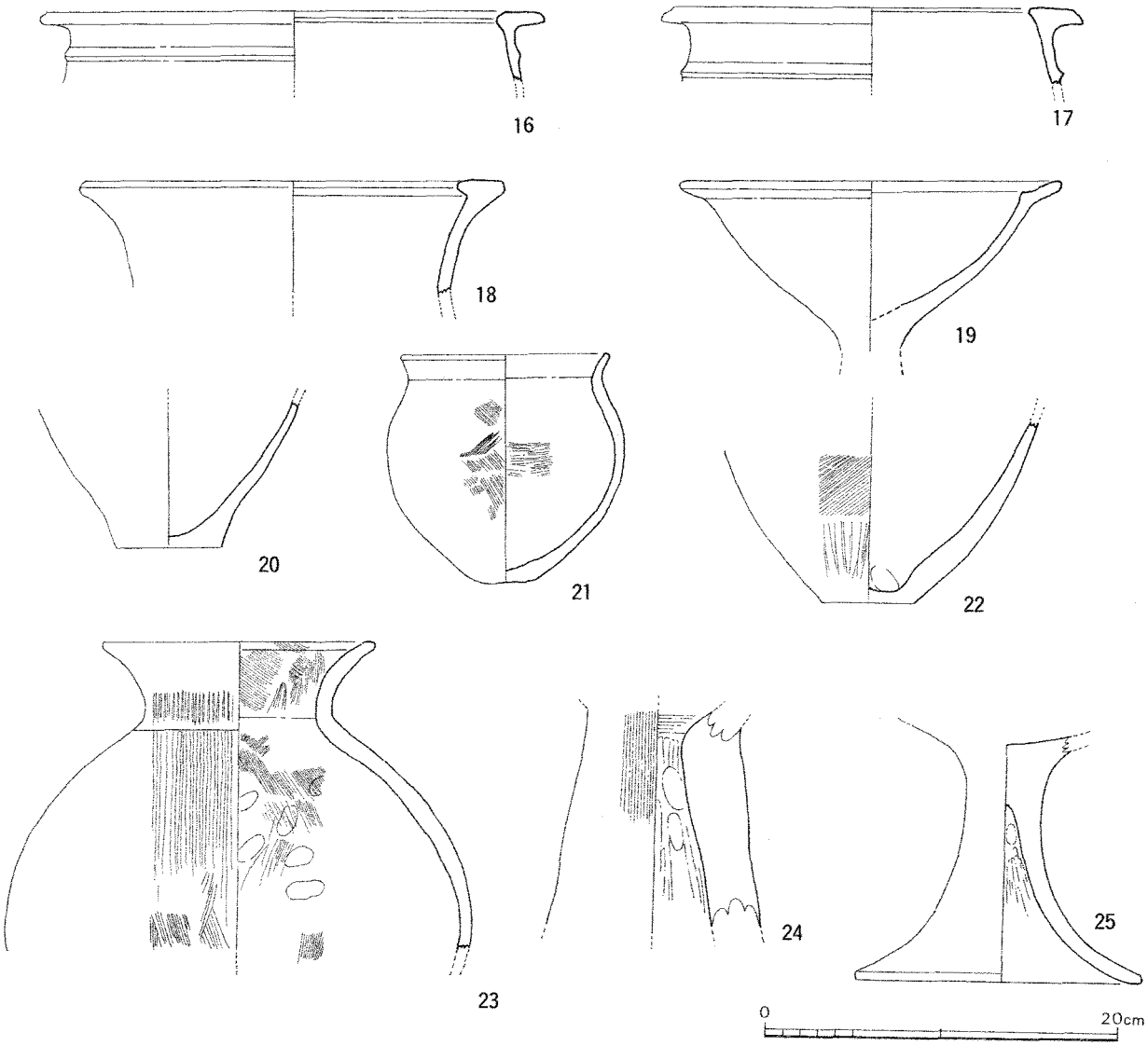
第42図　ＳＤ－４・５出土土器（１/４）

状口縁となり，底部はやや丸底化していることから，後期後葉頃のものか。22は底部から胴部へやや丸みをもって立ち上がる。底部内面に指頭による調整が認められる。23は球体の胴部から急に外反する口縁部をもつ壷で，胴部の在り方から底部は22のような平底となるであろう。24は厚みのある器台で，特に頸部に最大厚をもつ。ハケ目による調整を縦方向に丹念におこなう。

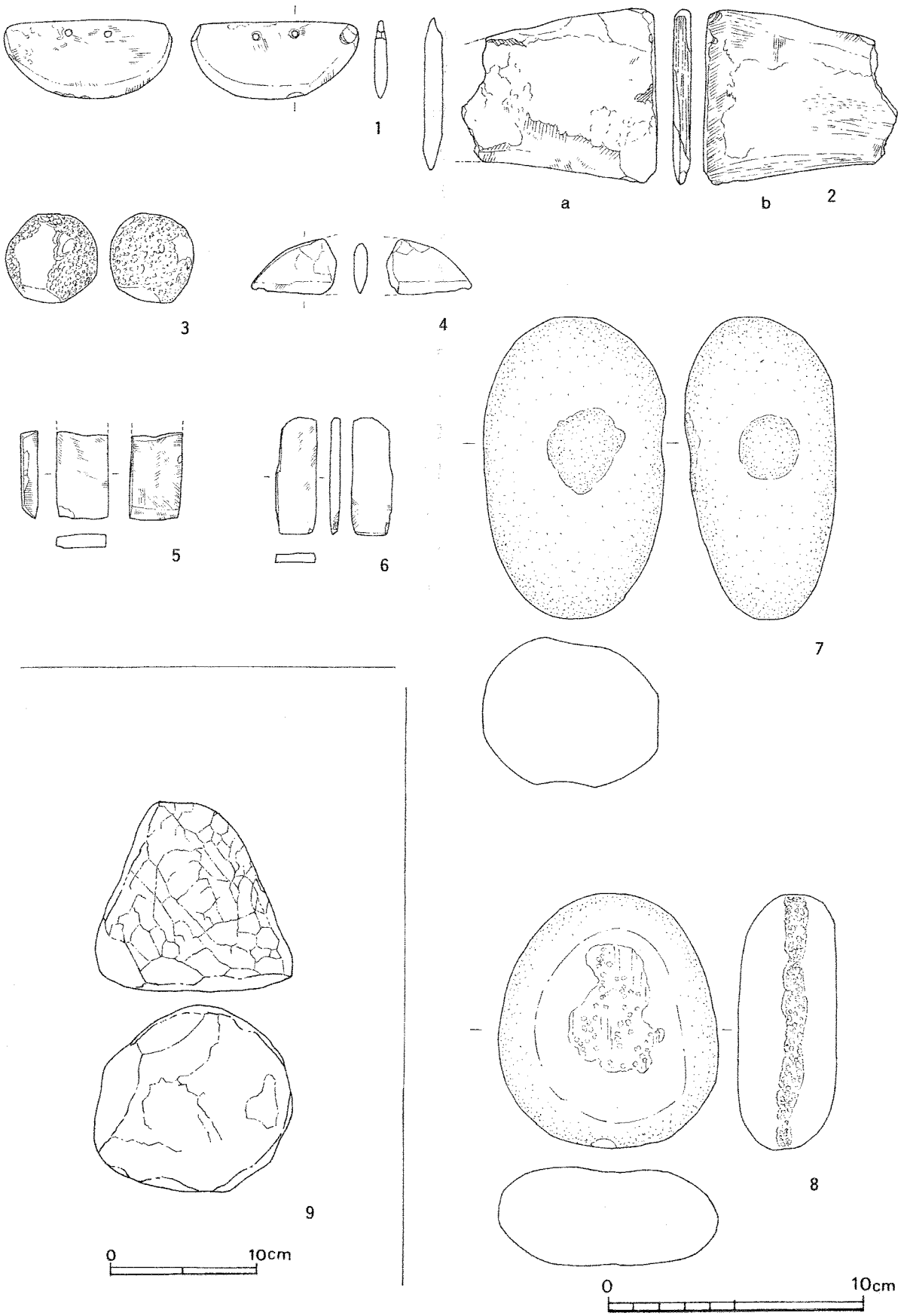
下層出土の土器として捉えたが，中期後葉から後期後葉までの時間幅をもつと思われ，SD－4・5が形成される間の時期に堆積した層としか現段階では捉えられない。

ＳＤ－４・５出土石器（第44・45図）

1は立岩産の石庖丁で，幅9㎝，高さ4.1㎝を測る。孔は穿孔具によって表裏から穿孔されている。刃部における擦痕は，刃部とほぼ垂直方向にその痕跡があり，刃こぼれも同様に刃部とほぼ垂直方向に認められる。原の辻遺跡の石庖丁の中ではやや小型のものである。立岩産の石庖丁は少ないものの原の辻遺跡の中でも幾つか出土しており，北九州の石庖丁の供給があったことは確実である。2は頁

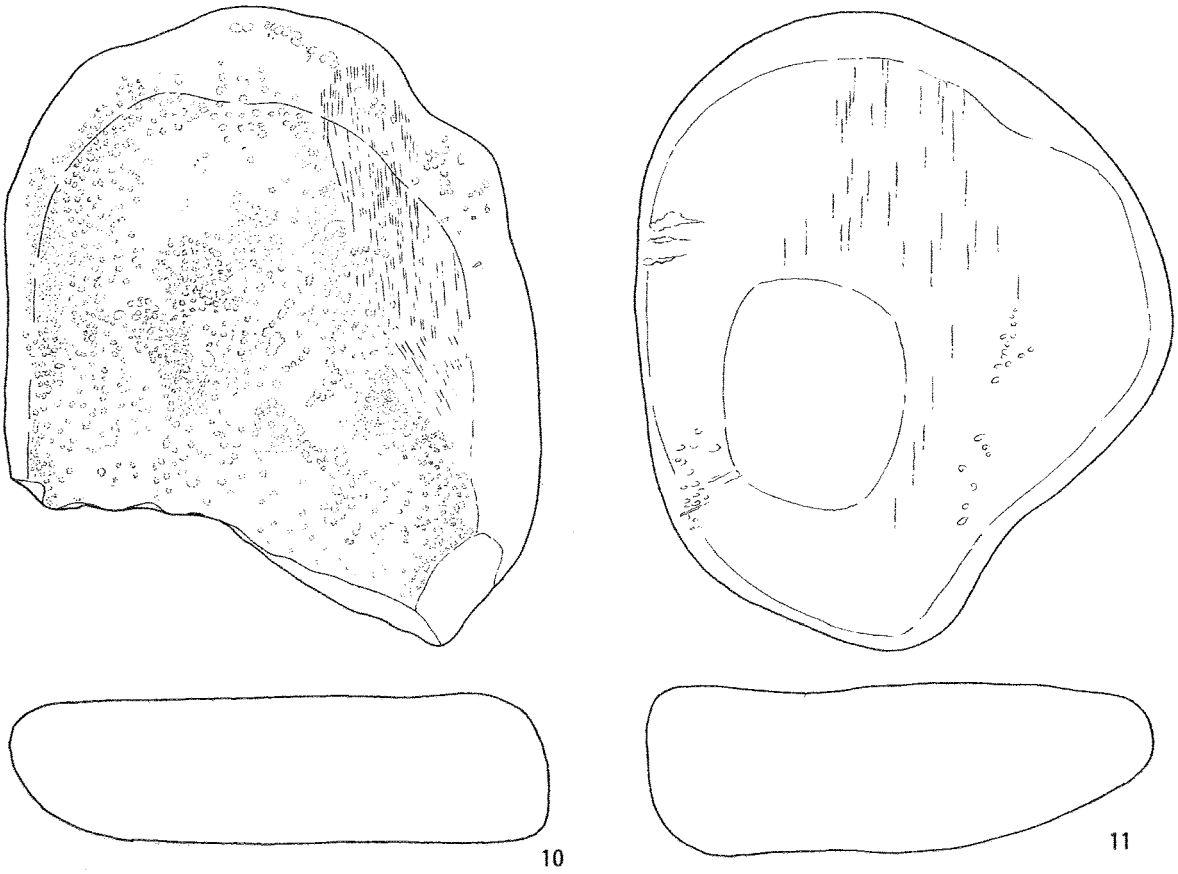


第43図　第９調査区ＳＤ－４下層出土土器（１/４）

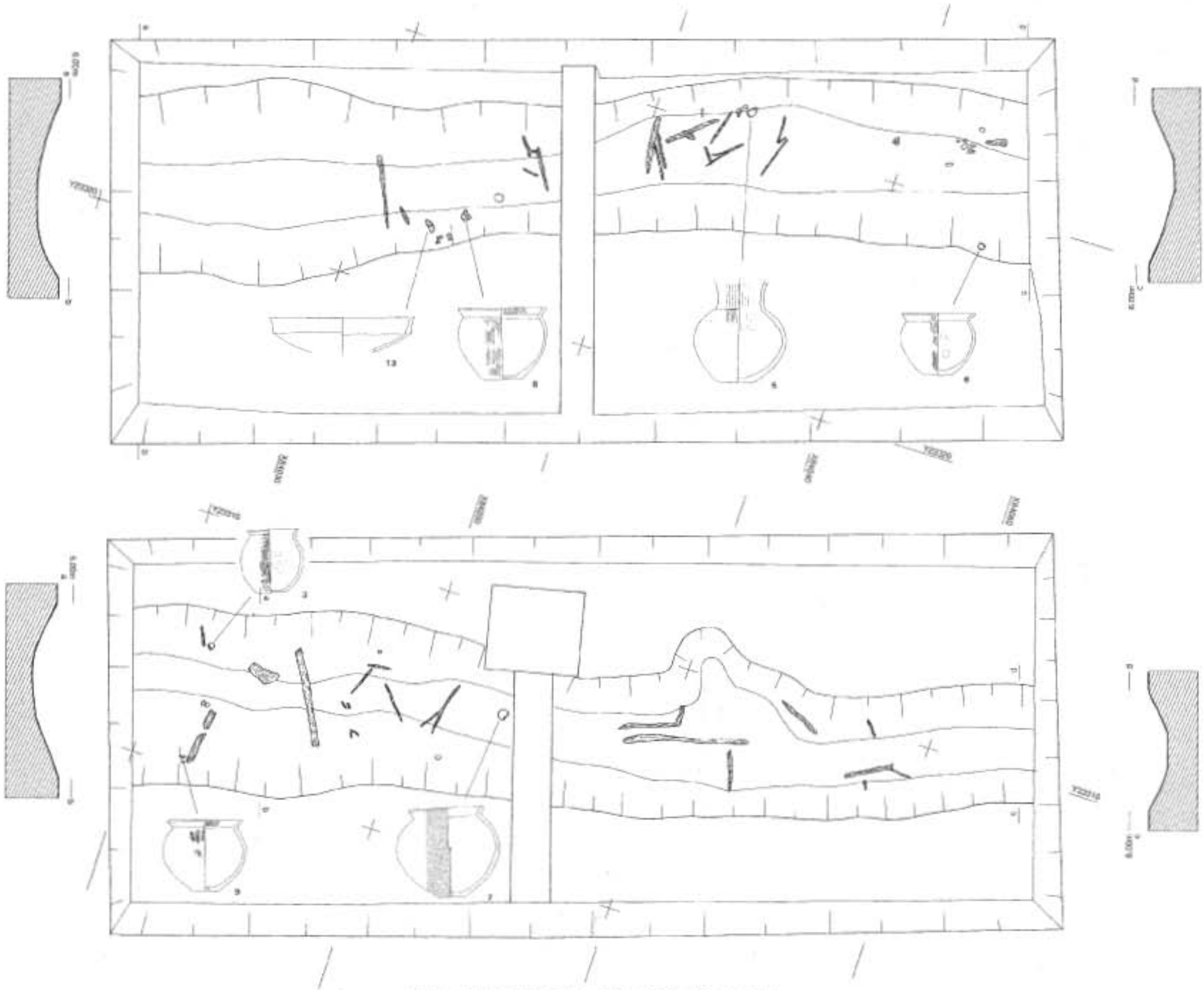


第44図　ＳＤ－４・５出土石器①（１/３・１/４）

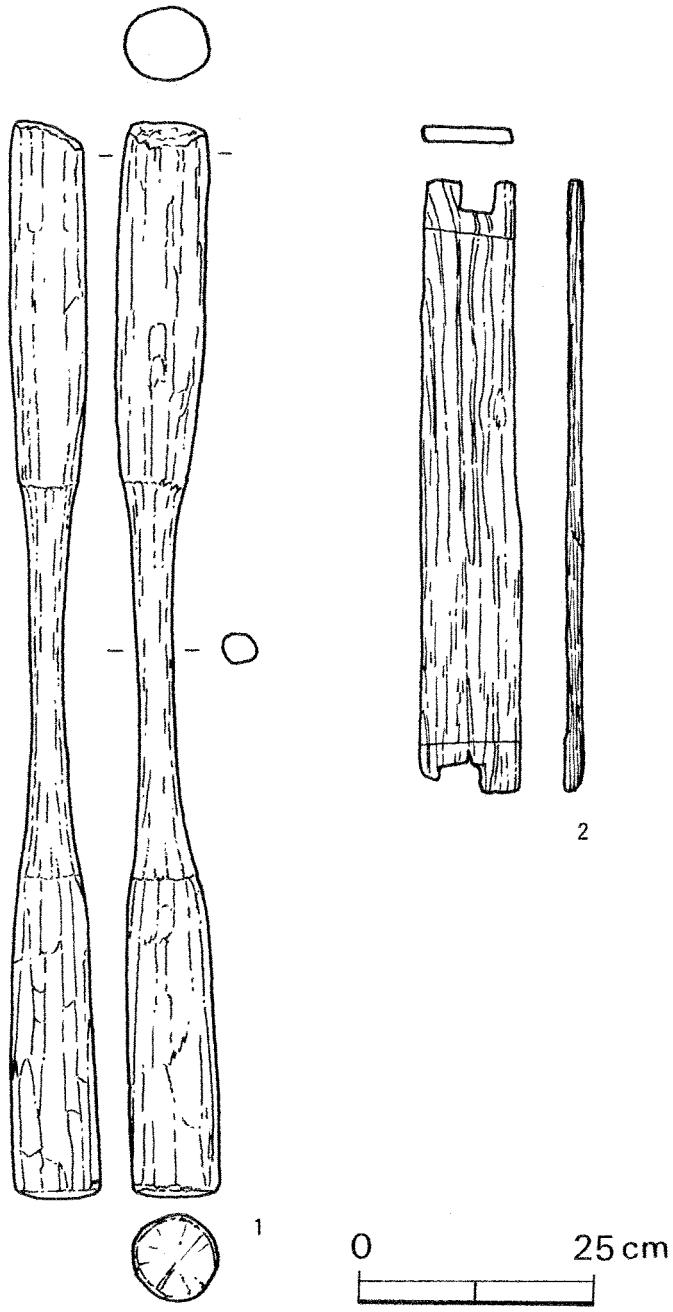
岩製の大形の石鎌である。全体的に研磨痕があるが，表裏面の中央部までには及んでいない。擦痕はｂ面の中央部に刃部に並行するような摩耗痕と擦痕が認められ，横方向の動きがはげしかったことが想定される。原の辻遺跡では石鎌は石庖丁以上に量的に多く，農耕の主体的利器として使用されていたことが想定できるが，具体的にどのような作業をおこなっていたかが大きな課題である。**3**は全面に敲打痕で覆われ，球体となっている。石材はグリーンタフか。かなり硬質のもので，この石材で造られれたハンマーは多いことから，石材の選択がなされていたのであろう。**4**は石鎌の切っ先である。硬質頁岩を素材とする。背部も含め，全体的に研磨する。**5**・**6**は片岩製の扁平片刃石斧である。**5**はやや青みがかった硬質のもので，刃部と流離が直行するような素材の取り方をおこなっている。この素材の取り方は，方柱状片刃石斧・扁平片刃石斧のみに適用されるもので，他の石器にはない素材の獲得方法である。**7**は側片に窪みのある敲石としての使用と，中央部の窪みから台石状の役割を併せ持ったものである。**8**については，周囲に敲き痕があり中央部に磨痕が観察される。**7**・**8**のように幾つかのの機能をもった礫石器は，かなりの数出土しており原の辻遺跡の中でも日常的に使用される石器であったと考えられる。**9**は支脚形石製品であるが，他に比べ器高は低い。底部の調整がいきとどいており，平坦である。**10**・**11**は石皿と台石を兼用したもので，擦痕と細かな敲痕が観察される。このような台石が先の敲石等とセットとなるのではないだろうか。



第45図　ＳＤ－４・５出土石器②（１/４）



第46図　第11・12調査区ＳＤ－７遺構・遺物検出状況（１/80）



第47図　ＳＤ－４・５出土木器（１/８）

ＳＤ－４・５出土木製品（第47図）

ＳＤ－４・５からは多くの木片が出土したが，製品の出土は２点に止まった。

1は杵で，長さ1.14cm，径は9.2cm，握りの部分の径が3.5cmである。上部がやや欠落しているが，ほぼ完形に近くカット痕も明瞭に残る。握り部と突き部との間には，やや段が確認される。端部は平坦である。**2**は組み合わせ式の箱状木製品の部材であろう。長さ65cm，幅10cm，厚さ1.7cmを測る。

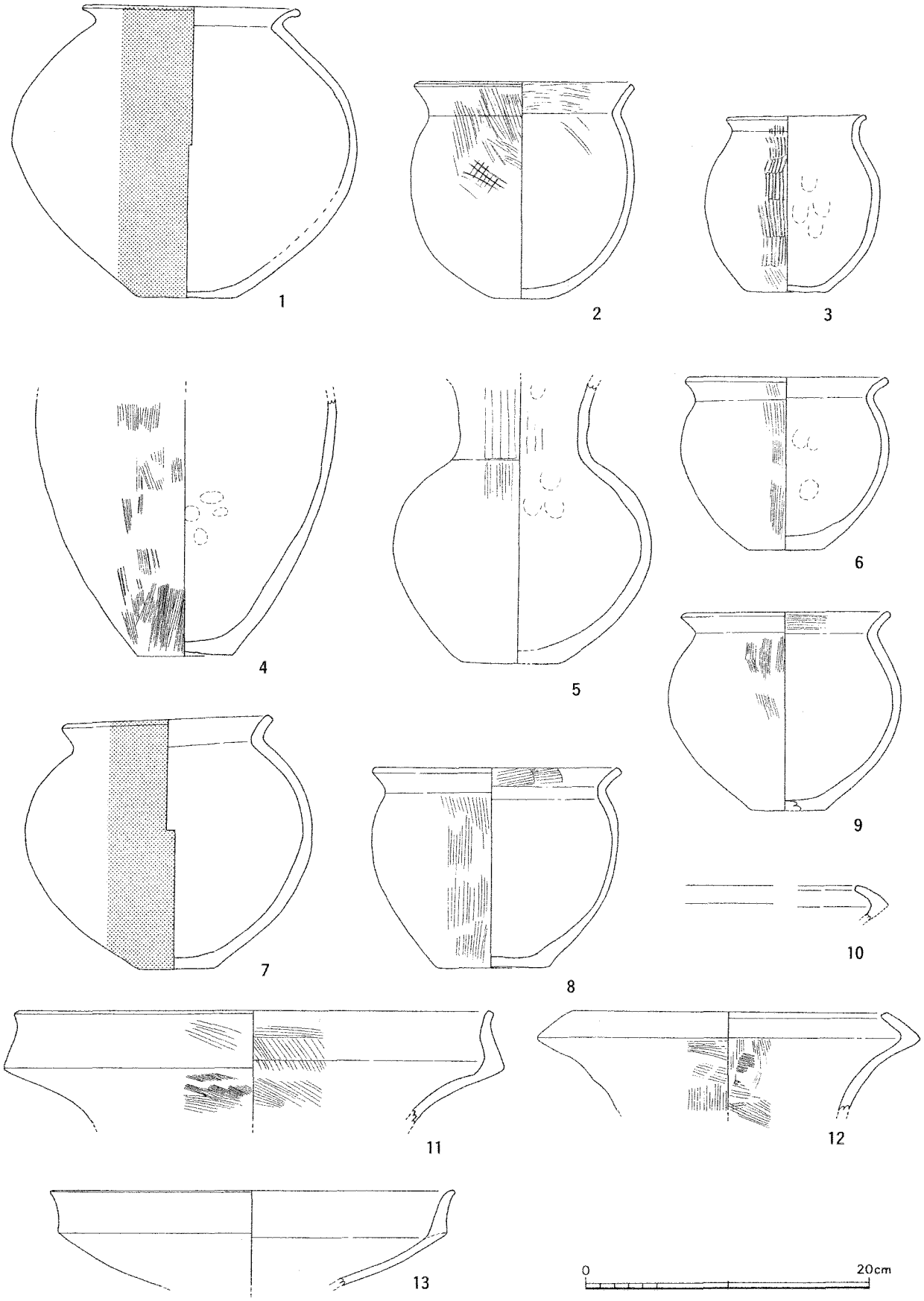
端部に四角い切れ込みを入れることから，組み合わせを意識したものであろう。また，両端から４～５cmのところに切れ込みを入れ，僅かに段を有し，端がやや厚みがでるようにしている。机等の部材か。

ＳＤ－７出土土器（第48図）

ＳＤ－７からは比較的まとまった資料が出土している。**1**は短頸壷で外面全体に丹塗りしている。胴部が大きく張り出すのが特徴で，**7**と同じような形状をしている。後期初頭頃のものか。

2は口縁部がくの字状を呈する甕で外面にハケ目が目立つ。**3**は小型の壷で，底部は平底で外面に粗いハケ調整をおこなう。内部には指頭によるおさえ痕が明瞭に残る。**5**は長頸壷で胴部は半球形で頸部はやや外側に開き気味である。**6**・**9**・**8**などはくの字状を呈する甕で調整としては外面にハケ目が目立つもので，底部が平底となる一群である。**10**～**13**は壷あるいは坏であるが，弥生後期後葉位の一群であろう。

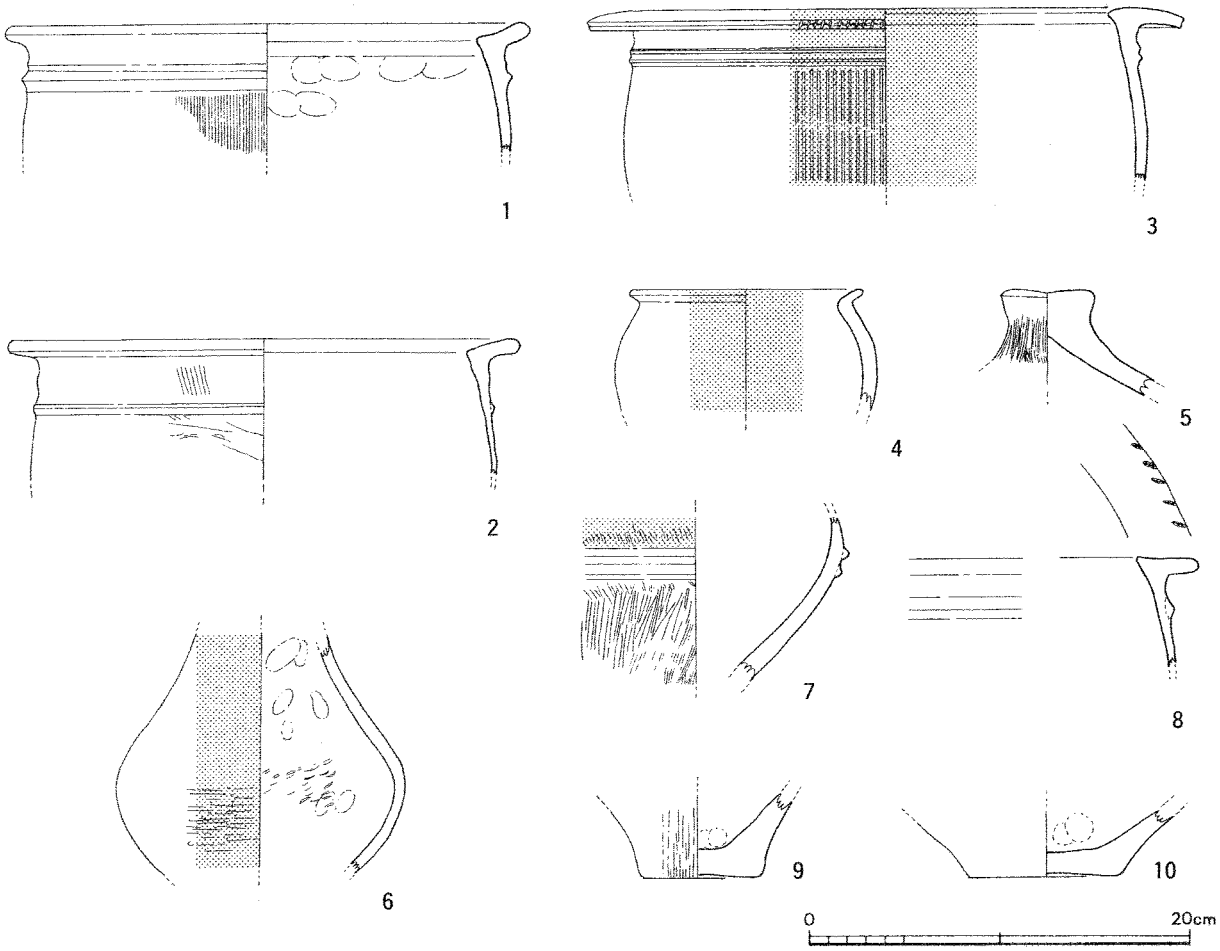
以上がＳＤ－７からの主な出土遺物であるが，壷・甕を主体とし，後期初頭から後葉を主体とするものと思われる。完形品が多く，短頸壷・くの字状口縁壷を主体とする。このことからＳＤ－７はこの時期の所産として捉えることができるものと判断する。



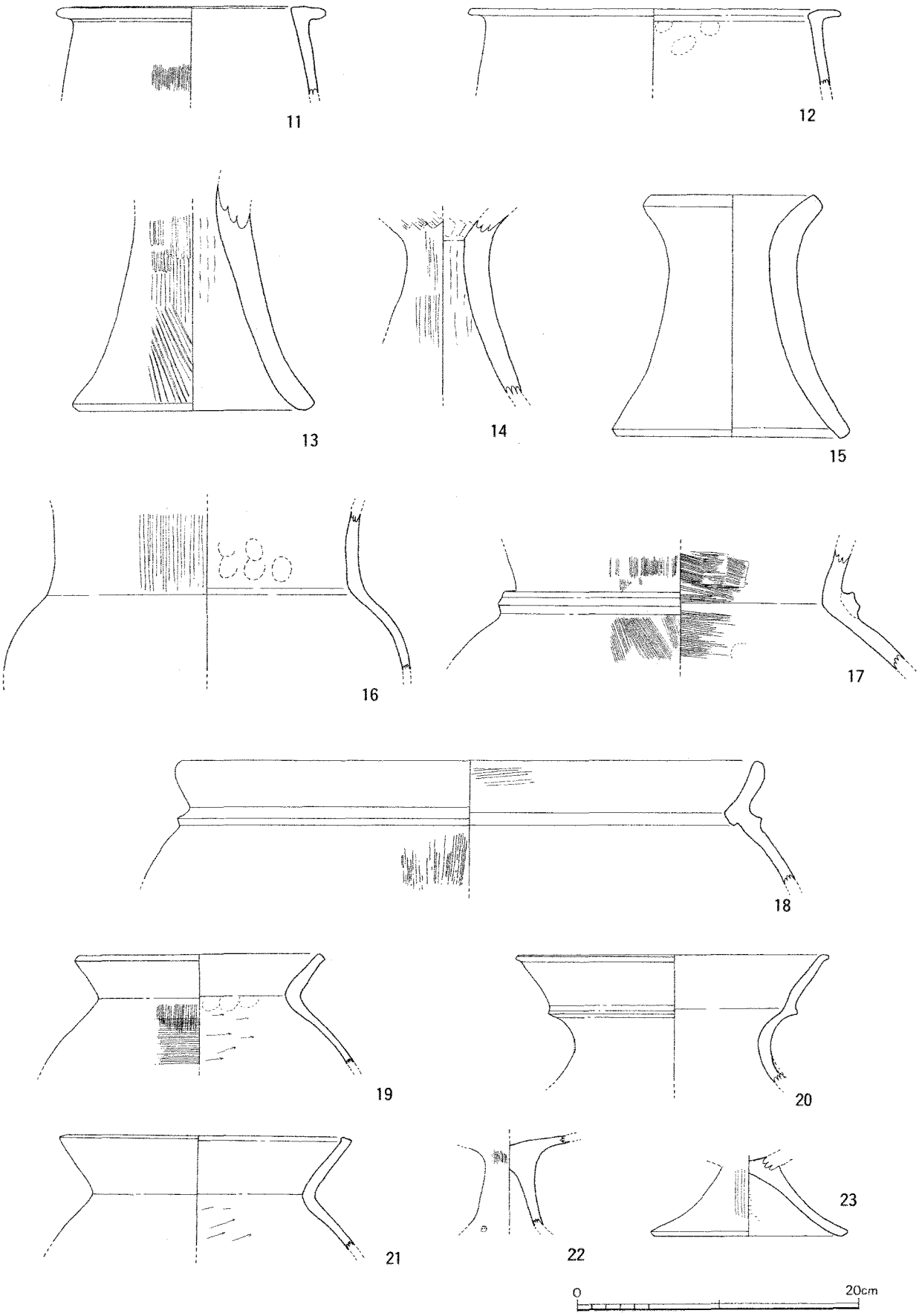
第48図　第10～13調査区ＳＤ－７出土土器（１/４）

ＳＤ－８出土土器

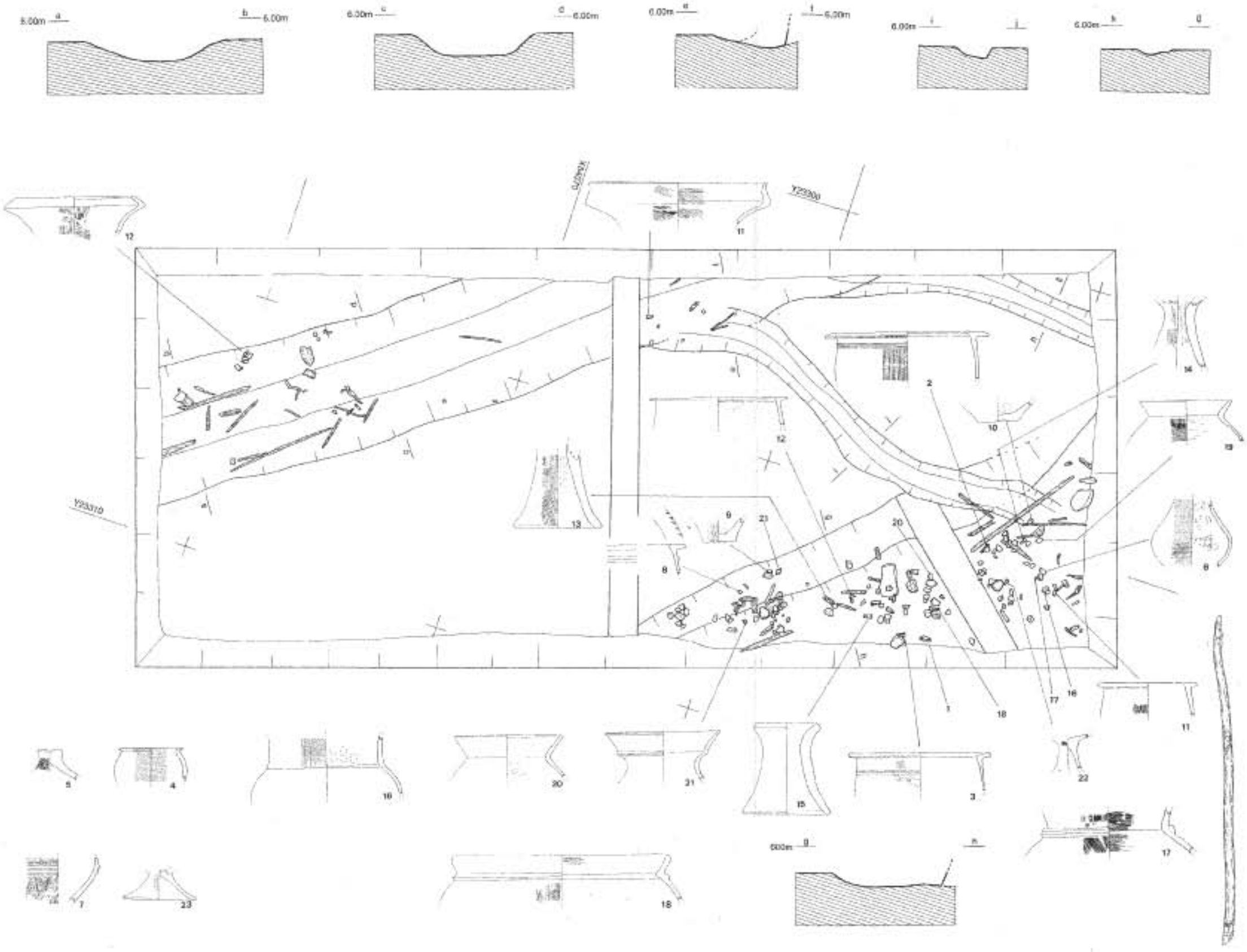
中期の土器がある程度まとまって出土している他，後期後葉から古墳時代前期の土器が出土している。１～３は中期後葉の甕で，口縁部下に突帯を一条巡らすタイプである。１・３は口縁部がやや内傾するが，２は垂れ気味に内傾し，全体に丹を塗っている。口唇部に刻み目を入れること，突帯がM字状になることなど１・３とは形態的に相違する。４は小型の壷で，全体に丹を塗る。胴部が半球形になり口縁部は小さく外反する。５は甕の蓋にあたるもので，蓋外面には縦方向のハケ目調整が認められる。６は壷の胴部にあたるもので，外面に丹塗りを施している。口縁部は袋状口縁になるものであろう。７も壷の胴部にあたるものと思われ，最大径の部分にM字突帯が付く。突帯から上部は丹塗りだが，下位は露胎でヘラでの磨き整形をおこなう。８については，口縁下に突帯を一条もつ甕であるが，口縁端部にスリット状の刻み目を入れるのが特徴である。９・10は甕の底部で，９は突帯をもつ甕の底部に通じるもので，10は胴部が膨らみ口縁短い短頸壷の底部であろう。１～10はＳＤ－８の古い一群で，ＳＤ－８が中期の段階からあった旧河道であることの証左となる。



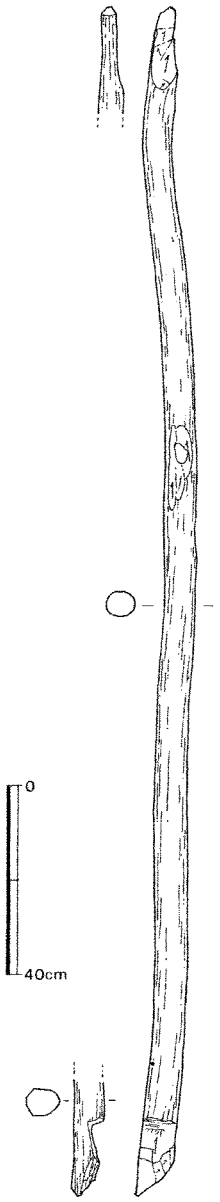
第49図　第13調査区ＳＤ－８出土土器（１/４）



第50図　第13調査区ＳＤ－８出土土器（１／４）



第51図　第13調査区ＳＤ－８遺構・遺物検出状況（１/80）



第52図
ＳＤ－８出土木器（１/８）

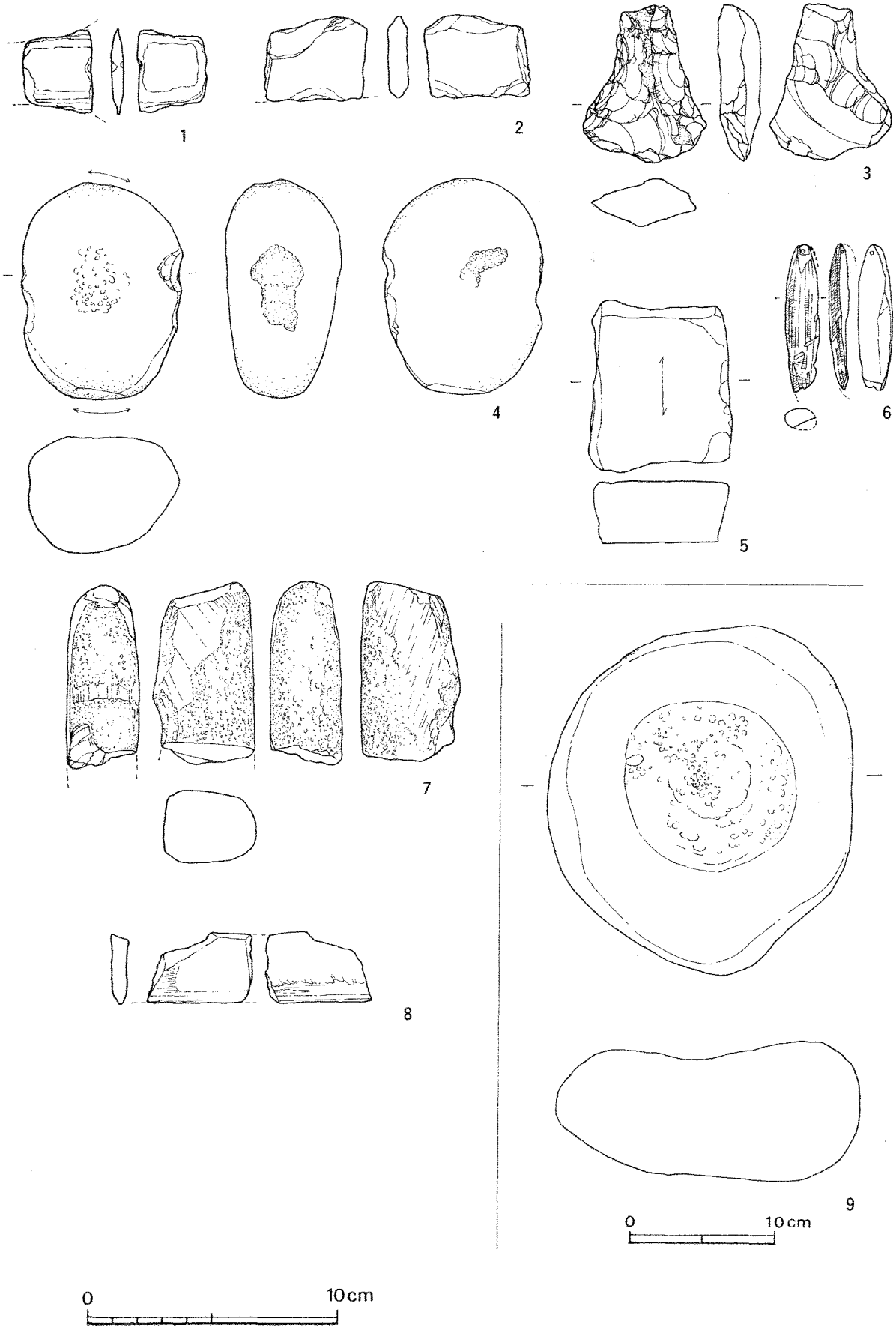
第50図11はやや肉厚の器壁で，胴部に最大径をもつ甕である。口縁部を肥厚させており，胴部はハケによる調整が施されている。13～15は上位にくびれ部がある器台である。14・15は器高が高く，頸部が細いものでやや後出のものであろう。外面に丁寧にハケ目調整を入れ，内部には頸部付近にヘラによる押さえ痕が認められる。これに対し15は口唇部を面取りし，やや肉厚で内径が大きいという特徴がある。14・15よりもやや古手のものであろう。

16は頸部から緩い傾きをもって立ち上がり，口縁部が開く広口壷と思われる。焼成は良好で内面に指頭による押さえ痕がある。後期初頭頃のものと思われる。17は頸部に大きな突帯を一条巡らせる壷であろう。内外面に細かなハケ目調整が見られるが，胎土はやや粗い。後期後葉位か。18は跳ね上げ口縁をもつ甕である。極端に口縁部を跳ね上げ，口縁部が内傾する。19～23は古墳時代前期の一群である。19は胴部が半球状になり鋭角に口縁が開く。端部は四角く納め，外側に稜線がつく。内部はヘラ削りと頸部付近に指頭によるおさえ痕が認められる。20は頸部上位に段をもつ２重口縁壷である。頸部の突帯は先鋭で，口縁唇部はやや外に開く。山陰の系譜をひく一群であろう。21は口縁端部を内側につまみ出す布留系の甕である。内面を薄く削りだしている。22・23は脚部である。

以上，ＳＤ－８の出土遺物について説明を加えたが，弥生時代中期後葉から古墳時代前期の資料まで幅広く出土している。出土状況としては，新旧混在した状況であった。土層からみても，間に小礫を含むなど河の流れが想定される状況にある。したがって，ＳＤ－８は旧河道であった可能性が高く，弥生時代中期後葉から古墳時代前期までの流れがあったものと判断される。

ＳＤ－８出土木器（第52図）

長さ2.53cm，径7.2cmの棒状の加工材が出土している。先端部にカット痕が一方から入り鋭角になる。下は一旦横から半分ほどカットした後，下方向から鋭角にカットすることによってＬ字状の造り出しを付けている。この部分に他の部材を乗せるための加工と考えられる。先端部は地上に突き刺し，図上の下の部分に他の部材を乗せ緊縛したのであろう。カット痕はこの他幹の部分にカット痕が入れられるだけである。このような加工材は，原の辻遺跡の中でも幾つか確認されており，本資料と同様に細い材を使用している。本格的な建築材というより，食物の乾燥棚を造るなど簡易な建築部材と考えられる。原の辻遺跡では，同じような加工材が幾つか出土している。



第53図　第９～13調査区遺構外出土石器（１/３・１/４）

第９～13調査区出土の石器

９～13調査区からは石器の出土量はさほどないことから一括し報告する。**1**は，第９調査区から出土しているが，遺構絡みではない。両端部欠損しており，図面右側が末広がりの傾向にあることや，途中に穿孔の意図がみられることから石戈の可能性が考えられる。ただし，厚みがないことなどから剣の可能性も考えられる。**2**は第13調査区出土の石鎌である。**1**と同様両端を欠損しており全体摩滅しているが，背と刃部と思われる部分が残存することから石鎌とした。**3**は第10調査区６層から出土した玄武岩製の鎌崎型スクレイパーである。上端部を欠損するが，末広がりに整形し一方に刃部を設ける。裏面の加工は，バルブの除去に終止し主要剥離面を残す。鎌崎型スクレイパーは，西北九州の縄文時代後期前葉から中葉に出土する遺物であることから，この遺物もその時期の所産と考えてよいであろう。この時期に相当する遺物として，剥片鏃の出土があることなどを考慮すれば，頷ける資料でもある。**4**は玄武岩製の敲石である。上下両端及び礫中央に使用痕が認められる。側面の使用痕はかなり使用された痕跡を残しており，くびれ部を形成している。**5**は第11調査区出土の砂岩製の砥石。**6**は第10調査区出土の黒色頁岩製の錘である。**7**は第11調査区出土の方柱状片刃石斧である。方柱状片刃石斧は今回の調査では１点のみの出土である。**8**は頁岩製の石鎌か。**9**は石皿状であるが，敲打痕を残していることから，加工をおこなう台石であろう。

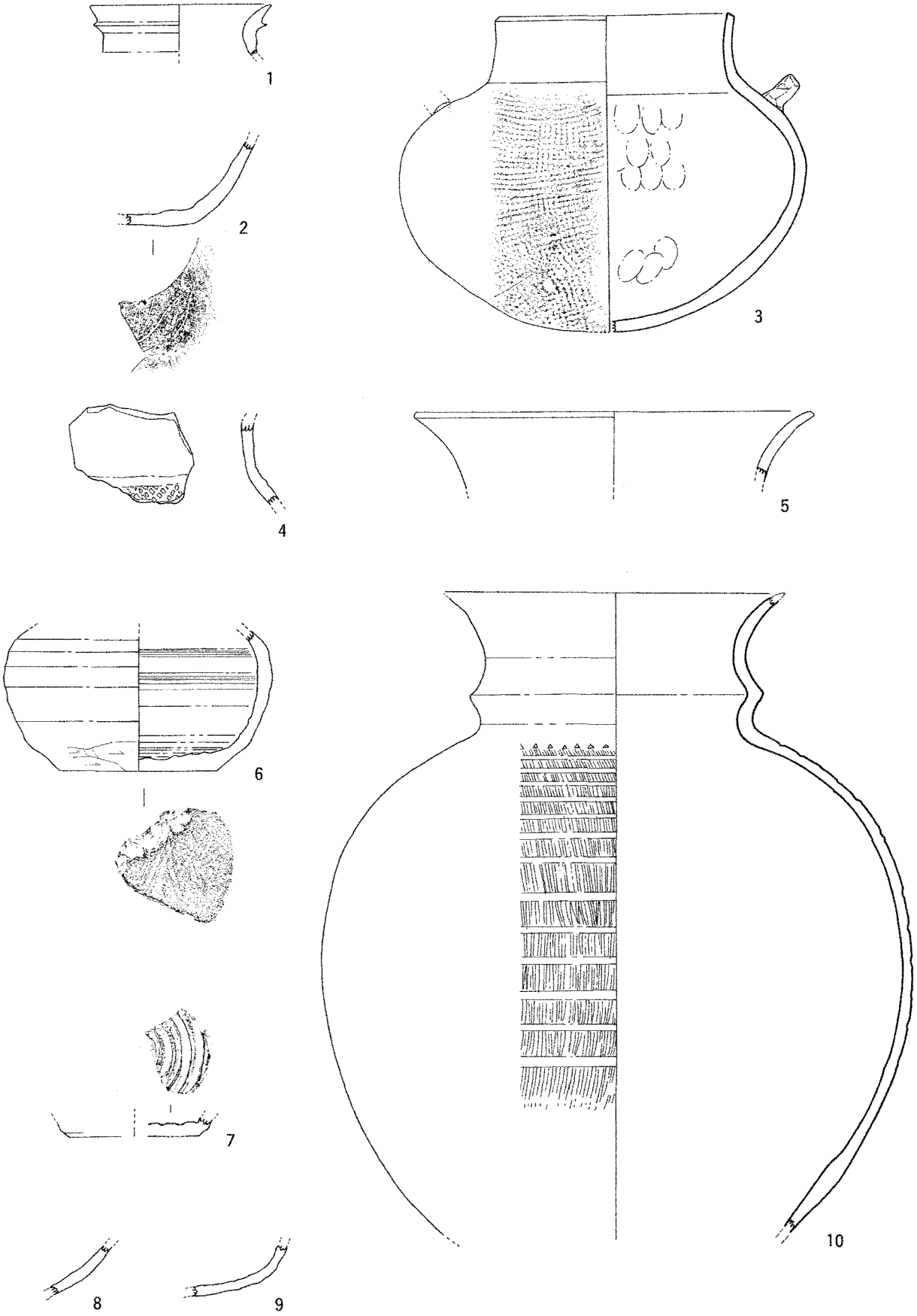
第９調査区～第13調査区の石器は，出土量が少量であることから性格的なものまでは論究できないが，第１調査区～第３調査区のように敲石・支脚形石製品の出土が明確ではないことは重要な意味合いをもっているのであろう。

４．その他の遺物（第54図～58図）

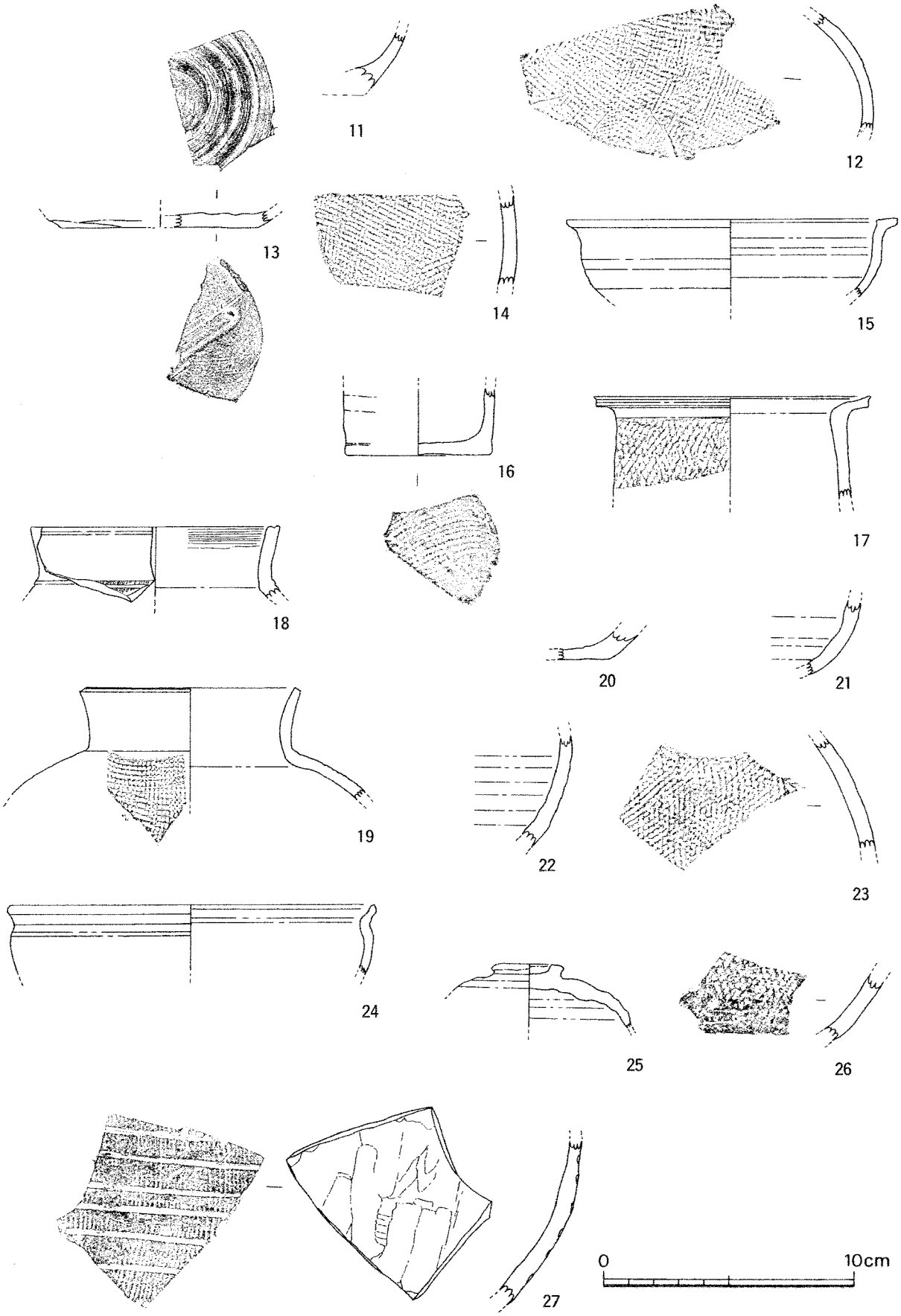
ここでは，⑴半島系土器・⑵銅鏃・⑶玉類・⑶旧石器時代の遺物について，一括して説明を加える。

⑴　楽浪系，韓半島系の土器

半島系の土器片が多数出土している。内容的には，楽浪系土器（28点）・瓦質土器（47点）・陶質土器（13点）の計86点出土している（表５）。このうち遺構出土のものは，弥生後期終末から古墳時代初頭として捉えたＳＤ－２で，瓦質土器が13点，楽浪系土器０点，陶質土器３点である。同じく弥生後期終末から古墳時代初頭として捉えたＳＤ－３では，瓦質土器４点，楽浪系土器２点，陶質土器０点である。同じく弥生後期終末から古墳時代初頭のＳＤ－（４，５）①層では，瓦質土器８点，陶質土器３点の出土。ＳＤ－（４，５）②層で楽浪系土器13点が出土している。弥生後期初頭として捉えたＳＤ－７では，瓦質土器１点の出土。後期終末から古墳時代初頭のＳＤ－８では，瓦質土器３点，楽浪系土器２点の出土となっている。ＳＤ－７出土の瓦質土器については，上位に古墳時代の溝が薄く乗ることから，この時代のものと考えられる。ほとんどの韓半島系の遺物は，弥生終末から古墳時代初頭のものであるが，楽浪系の土器については，弥生時代の層からの出土が多い傾向にある。



第54図　半島系の土器（1/3）



第55図　半島系の土器（1／3）

また，無文土器の出土がないことは，今回の調査区からの出土土器が，弥生中期後葉から古墳時代初頭，特に後者を主体とすることからも頷けるものと考えられる。

1は，陶質土器の短頸壺で，口縁部下部に鍔状の鋭い突帯を造り出す。内外面ともに轆轤使用の回転ナデである。胎土はあずき色で，所々に黒色鉱物を含んでいる。2は，1と同一個体と考えられる底部で，外面はナデ消しをおこない，内面上部は轆轤回転ナデ，下部は静止ナデである。底部に窯印をヘラによって線刻する。3は，三韓系瓦質土器で，三耳壺である。平成13年に調査したＳＤ－２の遺物と接合した。平成13年度調査のＳＤ－２は，弥生後期後葉から古墳初頭として捉えられた遺構である。今回の調査でも，弥生終末から古墳時代初頭の遺物が主体を占めることから，この瓦質土器についても同時期のものとして考えてよいだろう。4は，胴部に格子目の叩きを有する瓦質土器で，胎土は暗灰色を呈する泥質のものである。頸部から急に外反する壺と考えられる。5は，外面が黒褐色を呈し胎土は砂っぽくサラサラしている。口縁部が大きく外反する壺であろう。胎土や器形からすると本遺跡ではこのタイプは少ない。6は楽浪系の壺で，ＳＤ－（４，５）のさらに下の溝から確認している。ただし，弥生中期ＳＤ－４・５の古い時期としては，後期初頭から後期後葉を考えているが，下の溝についても出土土器に関しては同じ傾向にあることから古くても後期初頭までの範疇のものであろう。内外面はヘラナデによって波状に整形され，底部側面はヘラによって横方向のナデによって調整している。底部は静止糸切りで切り離している。7は壺の底部と思われ，内面にヘラによる波状の整形痕が顕著。底部側面に一条の沈線が巡る。8・9は鉢の底部と思われ，底部から緩やかな立ち上がりを見せる。内外面共にヘラによる丁寧なナデ痕が観察できる。10は，所謂馬韓系の土器とされるもので，西新町遺跡から出土しているタイプと同列のものであろう。遺構が古墳初頭の遺物を主体とすることからも，西新式土器並行とみてよかろう。胴部は球体状に丸みをもち，底部に至る。頸部からはかなり屈曲した二重口縁となり，口唇部を細くつまみだしている。胴部には頸部に三角文をスタンプした後に，縦の条線で構成された叩き具で前面に叩き整形をおこない，最後に横方向に並行沈線を入れている。胎土は軟質で灰褐色を呈しており，表面の色は暗褐色及び，赤黄褐色を呈する。内部は暗灰色で，器壁にいくつもの剥落痕が観察される。11・12は楽浪系の鉢底部で，11が灰黒色を呈しやや軟質であるのに対し，11は灰青色でやや堅地である。また，底部際が11では一条の沈線を入れるのに対し，12はヘラ削り調整をおこなうなど調整についても変化がある。11は7と，12は6と共通する。13は全面暗黒色を呈し，表面には細かな格子目の叩きが入る。焼成も良好で，堅緻である。14は瓦質土器，15は楽浪系土器の鉢である。鉢は，暗灰色でやや軟質である。口径約17.6cmを測り，口径に対し器高は低い。内外面ともにヘラによる調整をおこなっており，器表面が波状の凹凸が見られる。原の辻遺跡では，楽浪系の土器のタイプとしてはこの手の鉢が多い。16・19は瓦質の壺で，胴部から口縁部における立ち上がりは急で，胴部に対し口縁部が直行する。16は口唇部に一条の沈線が認められ，胴部は縄席文を施した後に沈線を入れている。19は，胴部は格子目の叩き痕である。17は表面灰黒色，内面灰褐色を呈する筒杯である。底部はやや上げ底気味で，底部から直立状に胴部へと立ち上がる。内底は，同心円状の線状痕が見られ，外底は静止糸切り。18は，口縁部が朝顔状に開く鉢

である。全体的に淡青灰色を呈し，やや硬質。表面には格子目の叩き痕が見られる。口縁部は，胴部から急に折れ曲がり，口唇部は薄く仕上げている。内面は指頭圧痕の上をヘラ撫でし，口縁平坦部はヘラ撫で。屈曲部は撫で整形。瓦質土器としたが，硬質土器の部類に入るものであろう。20～22については楽浪系の壷底部と考えられる資料である。内外面にヘラによる調整をおこなうことが特徴で，底部側辺にはヘラによる明確な削りをもつものもある。24は楽浪系の鉢であるが，15のような口縁部に平坦面をもたないものである。口唇部は削りを入れて屈曲させており，内部にも明確な段を有する。この段については，蓋の受けになることも考えられる。この手の口縁をもつ鉢は原の辻遺跡では少ない。25は楽浪系と思われる蓋である。表面は灰褐色，内面は黒褐色を呈し，やや軟質。本資料と同様な資料を知らないが，胎土等から楽浪系のものと判断した。表裏面とも回転ヘラ調整によって凹凸をもち，口縁部は細く納める。取っ手部分は，低くやや潰れている。

今回は無文土器の出土はなかった。これは，今回調査した遺構が弥生時代中期後葉から古墳時代前期にあたり，この時期には無文土器が出土しないことを追認するとともに，楽浪系土器・瓦質土器が後出するということをも追認することとなった。楽浪系土器の出土に関しては，弥生時代中期後葉まで遡るという説もあるが，現在のところ原の辻遺跡ではそこまで遡る例の確証は得られていないのが実状である。今回の調査区だけで考えるならば，弥生時代後期後葉前後までの資料として楽浪系土器を捉えることが無難であろう。瓦質土器についても同様であり，陶質土器については量的にも少量であることから，後続する時期のものと判断される。楽浪系土器と瓦質土器については，どのような前後関係で原の辻遺跡に搬入されたかが焦点となるが，河道の遺物については細かな変遷までは至らないのが現状である。

報告番号	調査区	遺構名	分　類	器種	特　　徴
1	1調査区	ＳＤ－２	陶質土器	壺	表裏面とも青灰色。胎土はあずき色。頸部に鋭い突帯が１条。
2	1調査区	ＳＤ－２	陶質土器	壺？	あずき色の胎土。内外面は青灰色で焼成良好。底部に黐記号のような線刻がある。
3	1調査区	ＳＤ－２	瓦質土器	壺	三韓系瓦質土器。淡灰白色を呈し，胴部に格子目の当て具痕、胴部から直行する口縁部と，胴部上半部に外耳が付く。内面は指によるナデ整形。
4	2調査区	包含層	瓦質土器	壺	泥質暗灰色。外面に格子目叩き。胴部がやや張り出し，頸部上部で外反する。
5	2調査区	ＳＤ－３	楽浪系	壺	胎土は砂泥質で，灰白色。表裏面とも黒褐色。口縁部がラッパ状に開く壺で，口唇部は平坦に納める。
6	9調査区	ＳＤ－４	楽浪系	壺	甕様整形・体部に１～0.5cm間隔でヘラ調整。内底は波状のヘラ調整。底部外面にヘラ削り痕。底部は静止糸切り
7	10調査区	ＳＤ－５	楽浪系	壺	内底は波状の削り。高台際に一条の沈線。
8	9調査区	ＳＤ－４	楽浪系	鉢？	外面黒褐色。内面灰褐色。胎土は灰褐色。外面は幅が小さなヘラナデ。内面はやや大きいヘラナデ。
9	10調査区	ＳＤ－５	楽浪系	鉢？	表面黒褐色，内面淡茶褐色。内面に無数の線状痕．表面は大きな幅のナデ。
10	2調査区	ＳＤ－３	瓦質土器	壺	馬韓系土器。体部は淡灰褐色。口縁部が二重口縁。底部は丸底。内部は暗褐色。体部は縦方向の叩き痕が顕著で，後に沈線を巡らせる。頸部に三角文をスタンプするのが特徴。
11	10調査区	ＳＤ－５	楽浪系	壺	７と同様であるが，やや大型。内面には波状のナデ調整。底部は静止糸切り。
12	10調査区	ＳＤ－５	楽浪系	壺	底部際にヘラ削り。胎土は灰褐色で硬質。
13	10調査区	ＳＤ－５	瓦質土器	壺	胎土は灰褐色。外面，格子目叩き。胴部は球体で，３と同様のものとなる。
14	13調査区	ＳＤ－７	瓦質土器	壺	外面細かな格子目叩き。内面はナデ調整。内外面灰白色を呈する。胎土に角閃石・黒色鉱物。
15	13調査区	ＳＤ－８	楽浪系	鉢	内外面ヘラによる波状の調整痕。胎土は灰褐色。やや軟質。口唇部は平坦でやや内傾。口径8.8cm
16	13調査区	ＳＤ－８	瓦質土器	壺	外面灰褐色。胴部から頸部にかけて直立し，口縁部はやや外傾する。頸部に縄席文。口唇部に沈線。
17	13調査区	ＳＤ－８	楽浪系	筒杯	外面漆黒色。内面淡灰色。胎土に黒色鉱物・雲母。底部は静止糸切り。
18	13調査区	ＳＤ－８	瓦質土器	鉢	内外面灰褐色。焼成良好。外面に格子叩き。口縁部は急激に外反させ，平坦部を造る。口唇部には一条の沈線を入れる。口縁部平坦部はヘラ撫で。内部はヘラナデ。胴部と口縁部との屈曲部はナデ調整。胎土は灰褐色を呈し，黒色鉱物・石英粒・角閃石を含む。
19	13調査区	ＳＤ－８	瓦質土器	壺	外面に格子叩き。全体的に暗青色。胎土は灰白色で，雲母・石英・黒色鉱物を混入。胴部は球体であるが，頸部から口縁部にかけてやや外反し，口唇部は外反。
20	11調査区	表土	楽浪系	壺？	内面はヘラナデ。全体的に灰青色。
21	11調査区	包含層	楽浪系	壺？	胎土は灰褐色。内面にヘラナデ。
22	11調査区	包含層	楽浪系	壺？	表裏面共にヘラ削りによる波状痕。全体的に灰白色でやや硬質。胎土に雲母。
23	11調査区	包含層	瓦質土器	壺？	外面格子叩き。
24	10調査区	包含層	楽浪系	鉢	内外面淡青灰色。口唇部を回転ヘラナデにより屈曲させる。焼成良好。胎土に雲母・黒色鉱物。
25	11調査区	包含層	楽浪系	蓋	表面灰褐色を呈し，内面は漆黒色。内外面回転ヘラ削り。胎土は灰褐色を呈し，長石・石英・黒色鉱物。焼成ややあまく，つまみ部は上端をなでることにより，外側に潰れを生じている。
26	11調査区	包含層	瓦質土器	壺	外面格子目の叩き痕。内外面灰黒色。胎土は灰白色。胎土に石英・雲母・黒色鉱物。
27	10調査区	包含層	瓦質土器	壺	外面格子叩き。縦方向の内面ヘラ削り。全面青灰色を呈し，表面はナデ調整。

表３　韓半島系土器観察

(2) **銅鏃**（第56図）

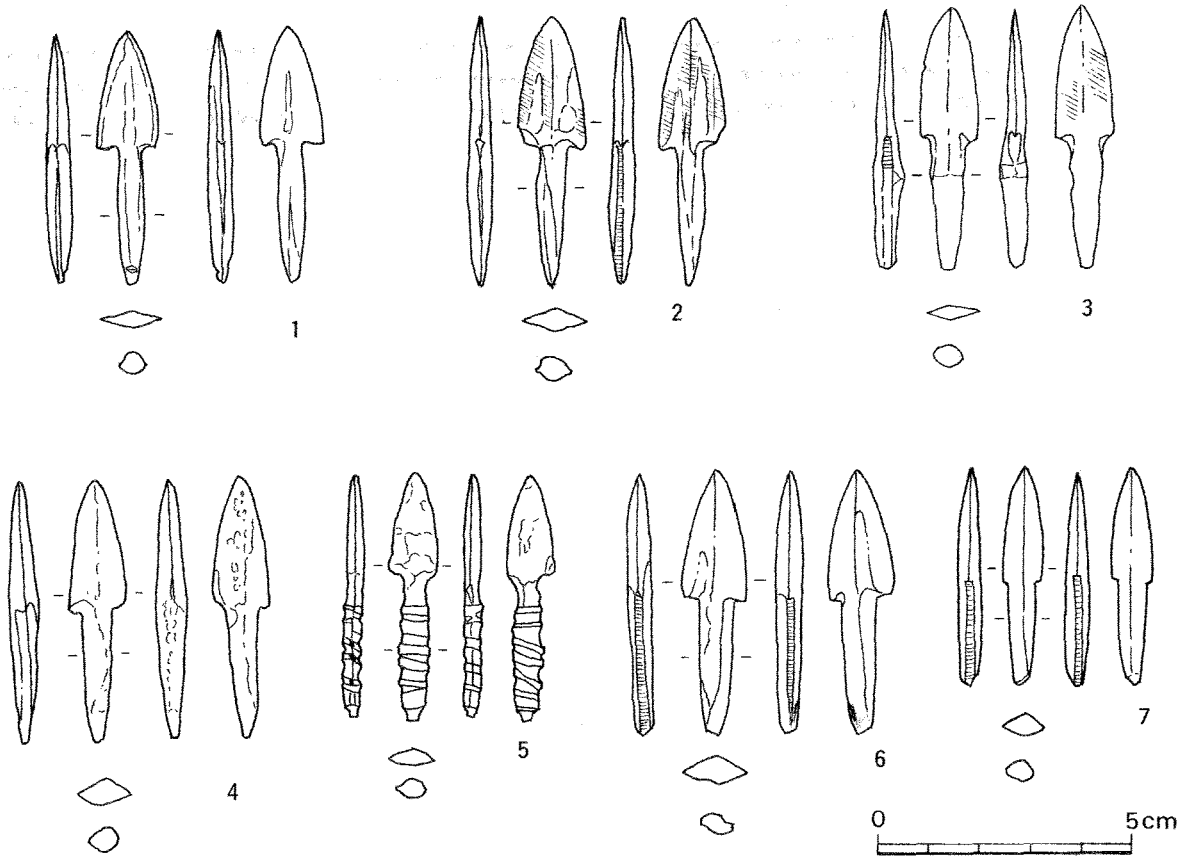
第１～第４調査区で５点出土している。出土状況は，遺構検出面直上のものがすべてであり，遺構と関連するものはない。このことから，時期的な判断ができない状況にある。ただし，原の辻遺跡から出土する銅鏃は，形態的統一性が強く，原の辻タイプと設定しても良い状況にある。今回出土したものもこの範疇に入るものが出土している。

1は茎に最大厚があり，刃部が扁平であることが特徴である。樋が表裏に二条づつあったものと思われる。茎の中央部でやや膨れ気味で，茎は丸い。全体形は，刃部先端から逆刺まで緩いカーブを描く。逆刺は明瞭であるが，大きく広がらない。茎末端部には溝が観察される。これは，連鋳式の繋ぎの部分と考えられ，裁断の際のためらい傷と思われる。**2**は鎬を中心に左右研ぎ痕が観察できる。茎の膨らみや逆刺の形状，鎬の在り方等，形態的に**1**に近似している。茎の左右のバリは丁寧に削られているのも特徴的である。**3**は**4**と同様刃部が薄く茎に最大径がある。**1**・**2**と相違する点は，茎上部に膨らみをもつところから，シャフトとの緊縛やストッパーのための意図的な形態と思われる。この茎上位の膨らみを持つものとして，平成13年度に石田町大原地区の墓域の調査でまとまって出土した銅鏃の特徴と同じである（註１）。ただし，刃部が薄く平べったいことや，樋が通っていないなどの相違点もある。**4**は全体的にあばた状の気泡が入り，仕上げの研ぎをおこなっていない状態と思われる。逆刺部が小さく，鎬は確認できない。刃部は断面三角形を呈し，他とは相違する。**5**は刃部に対し，茎を長く作り出し，茎に螺旋状の凹凸があることを最大の特徴とする。この形態の銅鏃は，管見の限り出土例はない。銅鏃に螺旋状のものを巻き付けて土型に押しつけて型としたものであろう。螺旋状にする意味についてはシャフトと鏃との緊縛を強くするためと思われる。なお，螺旋の凹凸の側辺部のバリは削り出している。やや劣化していることも関係するかもしれないが，茎に対して刃部が小さいことも特徴的である。**6**は表面に細かな気泡状のものが浮き出ているが，茎測辺はバリを丁寧に削り出している。表裏に樋状のものが１条づつ確認できる。茎は幅広いが，鋳込みのときにずれが生じたことによる結果である。**7**はやや小振りのもので，逆刺が明瞭でないことから，全形が柳葉形となる。茎の測辺は丁寧に削りを入れ，削りによって逆刺を作り出すことに大きな特徴がある。

1・**2**・**4**は刃部に鎬をもつことで共通し，逆に**3**・**4**・**7**は鎬がないという違いがある。また，**5**については螺旋状の中子で特徴的であり，**7**は全形が柳葉形を呈し，削りによって逆刺を作り出すという特徴がある。原の辻遺跡出土の銅鏃を概観しても大きく４つくらいに分類できるが，編年的に押さえられていない。今後，さらに検討を加えたい。

註１　平成13年度に石田町が調査した石田大原地区では銅鏃が25本以上出土している。この25本は，形態的に同じ特徴をもっており，刃部に朱を塗布するなど祭祀的な意味合いも考えさせるものであった。この地区は墓域であることから，墓前祭祀の可能性も考えなければならないと思われる。出土状況そのものは良好ではないものの，一括性が非常に高く，原の辻遺跡の銅鏃を考えるうえで，重要な情報を提供している。

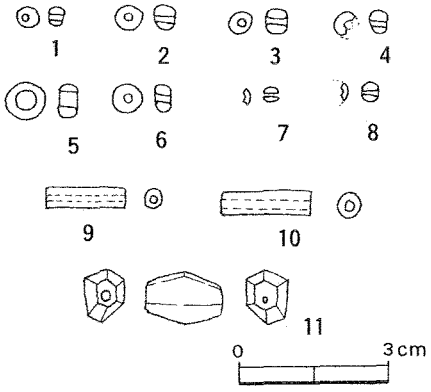
参考文献　2002石田町教育委員会『原の辻遺跡』



第56図　銅鏃（2/3）

(3)　**玉類**（第57図）

８点のガラス製小玉と，２点の管玉，１点の水晶製切子玉が出土している。ガラス製小玉の**5**は直径0.8cm，内径0.4cmを測りやや多きめで，風化が著しく濁白色を呈している。管玉は，２点とも碧玉製と思われる。切子玉は六角形を呈するが，一面が幅広く正六角形研磨されていることから，やや扁平になる。穿孔は，一方向からのみおこなっており片面の孔は小さい。ガラス玉は**1**～**4**がＳＤ－３，**2**がＳＤ－２，管玉は**9**がＳＤ－２，**10**がＳＤ－３から出土しており，切子玉はＳＤ－２の上面から出土している。他については表土から出土したものである。出土状況からすると，溝の検出面からのものが多く，古墳時代前期に相当するものが多いと考えられる。



第57図　玉類（2/3）

(4) 旧石器時代の遺物（第58図）

原の辻遺跡では旧石器時代の遺物も出土することが良く知られている。特に原の辻型台形石器は，原の辻遺跡出土の台形石器の特徴からその型式名がつけられ，今では西北九州を中心に，九州全般にわたって出土することが知られており，台形石器研究には欠かせない型式となっている。その後の調査でも旧石器時代の遺物は増加しており，原の辻遺跡全体の中でも幾つかのブロックが存在することが考えられる。それぞれの内容も多岐にわたることから，原の辻地域の旧石器時代の変遷を考えることも可能かと思われる。原の辻遺跡の丘陵上からは，比較的安定した形で遺物が出土しており，丘陵上を中心に旧石器時代の生活の跡があるものと判断できる状況にある。今回出土した遺物は，ナイフ形石器４点，台形石器１点，Ｕフレイク１点，石核１点，細石刃１点である。いずれも古墳時代から古代の包含層から出土したものばかりであり，本来台地上にあったものが混入したものと思われ，本来の包含層から遊離したものと理解する。

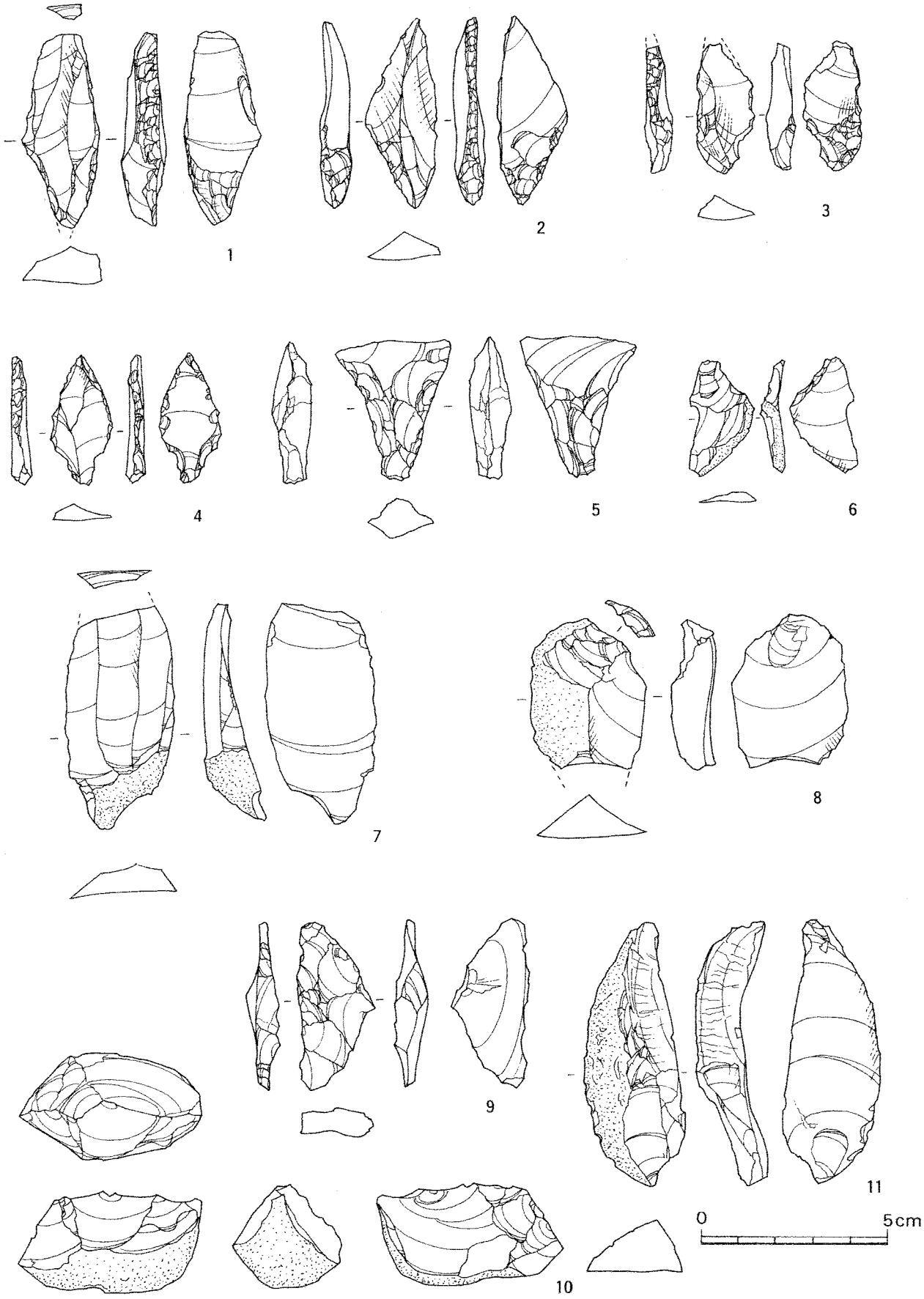
1は厚みのある大形の縦長剥片を素材とし，２側辺にブランティング加工したもので，基部裏面加工に特徴をもつものである。**2**についても素材に多少の違いはあるものの，裏面加工を施す。最終的に先端にファシットを入れて彫器としている。**3**は小形のものであるが，**1**・**2**と同様に基部裏面加工がなされている。**4**については，全体に粗いブランティング加工を施すもので，側辺は鋸歯状となる。このナイフ形石器については，加工そのものは新しい要素と考えられ，他のナイフ形石器より後出のものと考えられる。**1**～**3**の基部裏面加工のナイフ形石器は後期旧石器時代の中でも後期の後葉あたりにのものと考えられる。

5は灰青色の黒曜石使用の台形石器で，素材は分厚い横長剥片を利用している。加工は両面とも中央に向かって平坦剥離を加え，中央部が分厚くなることを特徴とする。

6・**9**は調整剥片である。**10**は剥片の末端部にファシットを入れた彫器である。石核の側辺調整をおこなった剥片を再利用したものと思われる。**11**は円礫素材の小型石核で，稜上から交互に剥片剥離をおこなうタイプである。

原の辻遺跡遺跡周辺では，台地沿いに幾つかの旧石器時代の遺跡が確認されている。この中でも芦辺町鶴田遺跡（文献１）では，ナイフ形石器や石核・剥片等が比較的まとまりをもって出土しているが，ナイフ形石器には基部裏面加工を施すものは見当たらない。また，石田町大原地区では台形石器が出土し，原の辻型台形石器として九州の台形石器を考える上で指標とされている石器群が検出されている。この両石器群とも様相を異にする。このことから少なくとも３つ位の編年は今後可能かと考えられる。

文献１　1998長崎県教育委員会「鶴田遺跡」原の辻遺跡調査事務所調査報告　第10集



第58図　旧石器時代の石器（2/3）

第Ⅳ章　ま　と　め

遺構について

今回調査した区域は丘陵の西側にあたり，以前の調査から旧河道を中心とした遺構が検出されることが予想されていた。今回の調査では弥生時代に属する遺構として，環濠が１条（ＳＤ－２下部），旧河道が２条（ＳＤ－（４，５）・８）溝が１条（ＳＤ－７）確認された。旧河道ＳＤ－（４，５）・８は一連のものである可能性が高く，丘陵の西側に沿って流れる旧河道である。河道としては，弥生時代中期後葉から古墳時代前期まで連綿と存在することは，遺物の出土状況から推察できる。河道は，丘陵西側で以前に確認されている環濠２条の外側に位置していることからも考えれば，天然の環濠の機能を持ち併せたことも考えなければならない。ＳＤ－４の下部にＳＤ－４に沿うように弥生時代後期の溝が確認されている（第40図）。古墳時代の流れによって削平されていることから全貌は定かではないが，ＳＤ－４の下部の中期後葉の層を切っていることから，後期の段階に設営されたものと判断している。ＳＤ－７は弥生時代後期初頭の遺物を主体に構成されており，遺物量が少ないわりに完形品がいくつか出土するなど，他の旧河道や溝とは様相が異なる。その幅や深さからは環濠としての機能よりも溝として捉えるべきであろう。この溝は第10調査区からはじまり，南北に長く延びて西側に抜けていくことが判明している。

今回の調査でそれぞれの時期における遺構の存在をまとめると次のようになる。

弥生時代中期後葉　ＳＤ－４・５，ＳＤ－８の旧河道。

弥生時代後期初頭　ＳＤ－７の溝と，ＳＤ－４・５，ＳＤ－８の旧河道。

古墳時代前期　　ＳＤ－４・５，ＳＤ－８の旧河道と，ＳＤ－２上部，ＳＤ－３。

このことから考えれば，旧河道はかなりの時間幅をもって存在し，溝・環濠は速く埋没していくということがいえよう。溝・環濠については埋没というより人為的な行為がそこに伴っていると言うことができよう。また，環濠の埋没の途中で古墳時代前期に溝として利用するなどの行為も今回ＳＤ－２において見られた。ＳＤ－２（上部）については弥生時代の環濠が埋没していく過程で窪みを利用し，環濠であるＳＤ－２上部に溝を再構築した例である。

今回の調査で検出した河道や環濠の配置を考えた場合，第４調査区上部から，第８調査区までに溝・環濠・旧河道等の遺構が検出されていない。今回の調査区の両側は以前も調査されており，今回の調査同様，遺構の確認はできていない。このことから，この部分についての位置づけがなされなければならない。遺物からすれば，土器については摩滅がはげしく，後世の水田の影響をうけているものと判断した。石器については石斧や石庖丁など生産活動を示唆する遺物が出土しており，生産活動の場の様相を呈するが，状況証拠が不足していることは否めない。今後原の辻遺跡の中での場の機能を考慮しなければならないであろう。

今回の調査において，溝・環濠・旧河道の確認をおこなったが，この３種の区別については明確な分類がなされないまま報告をおこなってきた。その区分について，今回の調査を通して区分の基本的

な考えを押さえておく。環濠・溝については，人為的な行為としてその痕跡を遺構に求めなければならないのであって，遺構の深さ・立ち上がり方・遺物の入り方等から判断する必要がある。調査の中で確認した古墳時代前期の溝については，環濠がある程度埋没した段階で窪地の水の流れを利用し，一部補修をおこなうというものが多い。ＳＤ－２はその典型的なもので，下部に環濠が存在するが，環濠が埋没し，途切れた部分をさらに延長して，水の流れを確保している。このことは，弥生時代の環濠としての機能が不要になった古墳時代に，水田の管理という形で溝として新たに整備し直した行為が見て取れる。このような場合環濠と溝の間には細かな砂が間層として入り込んでいる。つまり溝という水の管理がうまくいっている場合は底部に砂が堆積する。

弥生時代後期初頭としたＳＤ－７については下部に環濠を擁していない例であるが，下部に砂の堆積は認められない状況を呈していたが，これは常に流れを有していたか，つまり管理がどこまでされていたかの差があるのであろう。

旧河道については，遺構の底と縁とを結ぶ線が緩やかな曲線を描くことや，河の蛇行部では河の浸食作用によって一方の縁が急な立ち上がりを見せ，一方はなだらかな傾斜を呈することなどが考えられる。また，堆積物の中に小礫が混入することも特徴である。遺物の出土状況においては，ＳＤ－（４，５）やＳＤ－８のように新旧混在するという状況も河道とする認定条件となろう。

環濠としたものは今回１条のみで深さもあまりなかったが，断面形からも理解できるように逆台形を呈し，明らかに人為的である。環濠については言うまでもなく形や深さがその認定の大きな手掛かりとなろう。

今年度検出した旧河道・環濠については，調査区の南北方向について平成15年度に調査予定である。15年度調査により丘陵の西側の遺構についてはほぼ出揃うことから，次年度の調査をみてさらに規準を設けていくことにする。

長崎県，原の辻遺跡（県道調査事業）における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	第6調査区，3a'層	木片	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS法
No.2	第1調査区，SD－2	炭化物	酸－アルカリ－酸洗浄，石墨調整	AMS法

※AMS法：加速器質量分析法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定（Beta-）
No.1	1280±40	−25.9	1270±40	交点：cal AD720,740,760 1σ：cal AD690～780 2σ：cal AD670～870	175838
No.2	1740±40	−27.6	1700±40	交点：cal AD370 1σ：cal AD260～290,320～400 2σ：cal AD240～420	175839

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から，単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は，国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2）δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り，^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には，年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値，およびサンゴのU－Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは，約19,000年BPまでの換算が可能

となっている。ただし，10,000年ＢＰ以前のデータはまだ不完全であり，今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは，補正^{14}Ｃ年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68%確率）と２σ（95%確率）は，補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって，複数の交点が表記される場合や，複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

３．考　　察

加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定の結果，第６調査区の３ａ’層から採取された木片では1270±40年ＢＰ（１σの暦年代で西暦690～780年），第１調査区のＳＤ－２から採取された炭化物では，1700±40年ＢＰ（１σの暦年代で西暦260～290ないし320～400年）の年代値が得られた。

文献

Stuiver, M., et. al. ，(1998)，INTCAL98Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p . 1041－1083.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，ｐ.1－36.

Ⅱ．珪藻分析

1．はじめに

珪藻は，珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり，海水域や淡水域などの水域をはじめ，湿った土壌，岩石，コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は，塩分濃度，酸性度，流水性などの環境要因に応じて，それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は，当時の堆積環境を反映していることから，水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2．試　　料

試料は，第１調査区のＳＤ－２およびＳＤ－３から採取された計６点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3．方　　法

以下の手順で珪藻を抽出し，プレパラートを作成した。

1）試料から乾燥重量１ｇを秤量

2）10％過酸化水素水を加え，加温しながら１晩放置

3）上澄みを捨て，細粒のコロイドと薬品を水洗

4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

5）マウントメディアによって封入し，プレパラート作成

6）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって600～1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い，少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4．結　　果

試料から出現した珪藻は，真－中塩性種（海－汽水生種）３分類群，貧塩性種（淡水生種）67分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表１に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図１に示す。珪藻分析結果は図に示すように分帯の区分を行った。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧塩性（淡水生）種〕

Achnanthes lanceolata, Amphora copulate, Cocconeis placentula, Cocconeis sp., Fragilaria brevistriata, Fragilaria construens, Fragilaria pinnata, Gomphonema parvulum, Hantzschia amphioxys, Navicula confervacea, Navicula contenta, Navicula elginensis, Navicula kotschyi, Navicula mutica, Navicula pupula, Nitzschia frustulum, Rhopalodia gibba, Surirella angustata, Synedra ulna

〔中塩性（汽水生）種〕

Diploneis smithii

(1)　ＳＤ－２

３層（試料３）では，*Fragilaria construens, Fragilaria pinnata, Fragilaria brevistriata* などの止水性種が優占し，*Navicula kotschyi, Navicula pupula* などが伴われる。１層（試料１）と２層（試料２）では，

珪藻の密度が極めて低く，*Navicula mutica* などの陸生珪藻がわずかに出現する。

(2) ＳＤ－３

３層(試料５)では，*Achnanthes lanceolata, Gomphonema parvulum* などの流水性種，*Fragilaria brevistriata, Fragilaria construens, Fragilaria pinnata* などの止水性種，*Amphora copulata, Cocconeis placentula, Surirella angustata* などの流水不定性種がやや低率に出現する。２層（試料６）では，流水性種で中～下流性河川指標種群の *Achnanthes lanceolata* が優占する。１層(試料４)では，*Amphora copulata, Navicula kotschyi* などの流水不定性種の出現率がやや高く，*Achnanthes lanceolata* などの流水性種，*Fragilaria brevistriata, Fragilaria pinnata* などの止水性種が伴われる。

５．珪藻分析から推定される堆積環境

(1) ＳＤ－２

弥生時代後期～古墳時代初頭とされる溝底部の３層の堆積当時は，池状の滞水域の環境であったと考えられる。また，その上位の１層および２層の堆積当時は，珪藻の生育にはあまり適さない湿潤な陸域の環境であったと推定される。

(2) SD－３

弥生時代後期～古墳時代初頭とされる溝底部の３層の堆積当時は，流水の環境であったと考えられる。また,2層の堆積当時は，流れはあるがよどんでおり，水量ないし水位がやや不安定な滞水域の環境が推定される。その上位の１層では，流水および止水の環境が頻繁に入れ替わるような不安定な環境が示唆される。

参考文献

Hustedt,F. (1937－1938) Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda－Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl. 15, p. 131－506.

Patrick, R.eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol. 1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L. (1974) Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh－water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol. 2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No. 13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution (２) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom, 10, p. 35－47.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，ｐ.29－44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究, 27, p. 1－20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理, 42, ｐ.73－88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌, 6, ｐ.23－45.

表1　原の辻遺跡，県道調査事業における珪藻分析結果

分類群	第1調査区					
	SD-2			SD-3		
	1	2	3	4	5	6
貧塩性種（淡水生種）						
Achnanthes exigua						1
Achnanthes hungarica			3			
Achnanthes lanceolata			17	17	124	9
Amphora copulata			10	6	1	6
Amphora sp.						2
Anomoeoneis sphaerophora			1			
Caloneis bacillum			1			4
Caloneis hyalina			1	1	1	
Caloneis lauta			2			
Caloneis silicula			1			1
Cocconeis placentula				25	14	9
Cocconeis sp.				8		4
Cyclotella sp.						1
Cymbella naviculiformis			1	1		
Cymbella silesiaca			2			1
Cymbella tumida			2			1
Diploneis sp.				1		
Eunotia soleirolii						2
Fragilaria brevistriata			42	6	2	6
Fragilaria capucina			1			1
Fragilaria construens			109		2	5
Fragilaria pinnata			67	14	3	6
Frustulia vulgaris			1	2		
Gomphonema gracile			2			
Gomphonema minutum				2		
Gomphonema parvulum			8	9	5	4
Gomphonema sphaerophorum			1			
Gomphonema truncatum			1			
Gyrosigma sp.			1	1	1	3
Hantzschia amphioxys	2		1	3	1	1
Meridion circulare v. constrictum						1
Navicula capitata			2		1	
Navicula clementioides				2		
Navicula confervacea			17		6	3
Navicula contenta	2				6	
Navicula cryptocephala			6			
Navicula cryptotenella				2		
Navicula cuspidata			2			
Navicula decussis			4			
Navicula elginensis			9	12	3	1
Navicula hasta			1			
Navicula kotschyi			17	17	1	2
Navicula laevissima			4	1		1
Navicula mutica	1	1	1	17	12	
Navicula placentula			5			1
Navicula pupula			28		4	4
Navicula veneta					1	
Navicula viridula v. rostellata					1	2
Neidium iridis			1			1
Nitzschia clausii						1
Nitzschia frustulum				10	1	1
Nitzschia nana						2
Pinnularia acrosphaeria			1			
Pinnularia appendiculata						1
Pinnularia gibba						1
Pinnularia microstauron			2	2		1
Pinnularia sp.					1	
Pinnularia subcapitata				1		
Pinnularia viridis			1	2		
Rhopalodia gibba			6			
Rhopalodia gibberula				2		1
Stauroneis lauenburgiana			1	1		
Stauroneis phoenicenteron			1			1
Stauroneis smithii			1	1	1	
Surirella angustata						10
Surirella tenera			1			
Synedra ulna			4		1	1
真・中塩性種（海・汽水生種）						
Diploneis smithii			2	1		
Navicula menisculus v. upsaliensis			4			
Nitzschia levidensis v. victoriae				1	2	
合　計	5	1	396	168	195	103
未同定			22	17	8	14
破片	1	1	97	63	70	59
試料1cm³中の殻数密度	2.0×10^{3}	4.0×10^{2}	5.4×10^{6}	1.2×10^{6}	1.3×10^{6}	4.7×10^{4}
完形殻保存率（%）	(-)	(-)	81.2	74.6	74.4	66.5

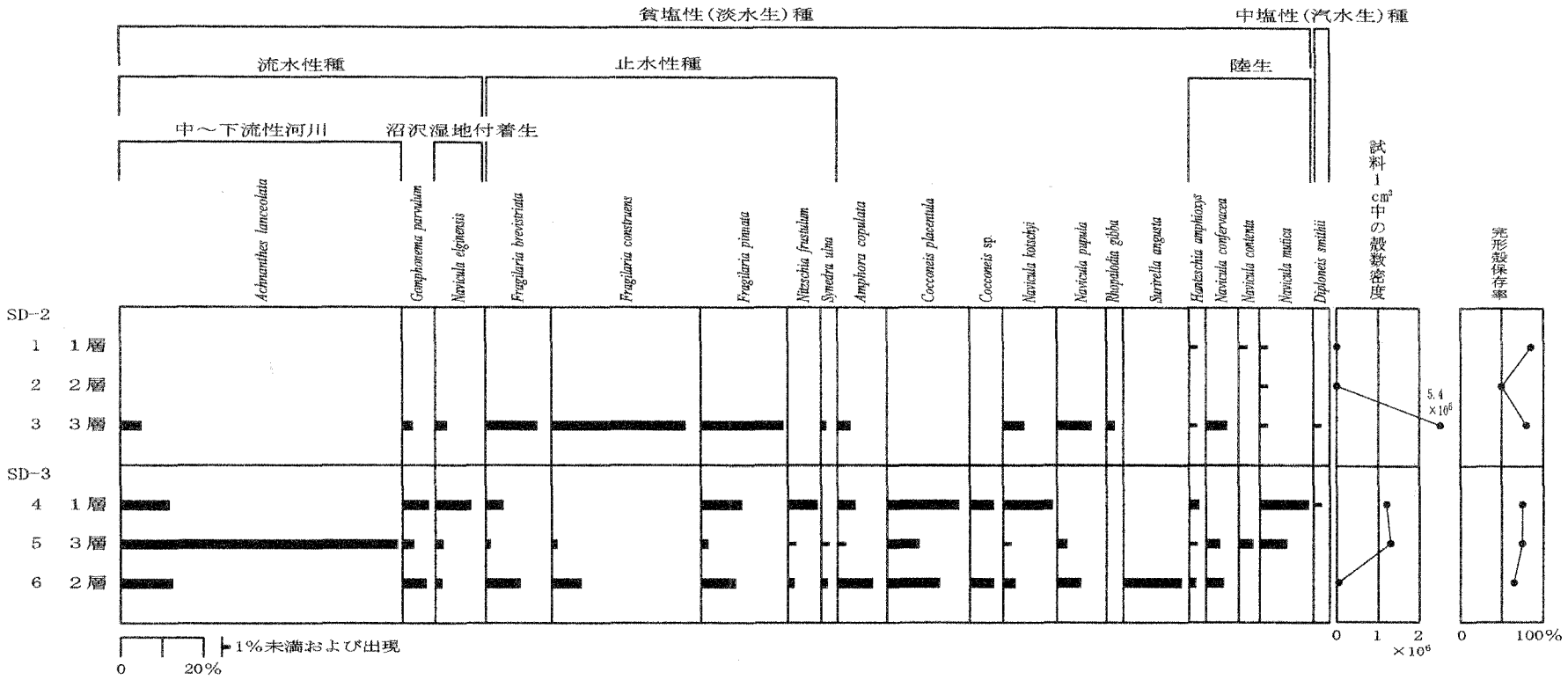
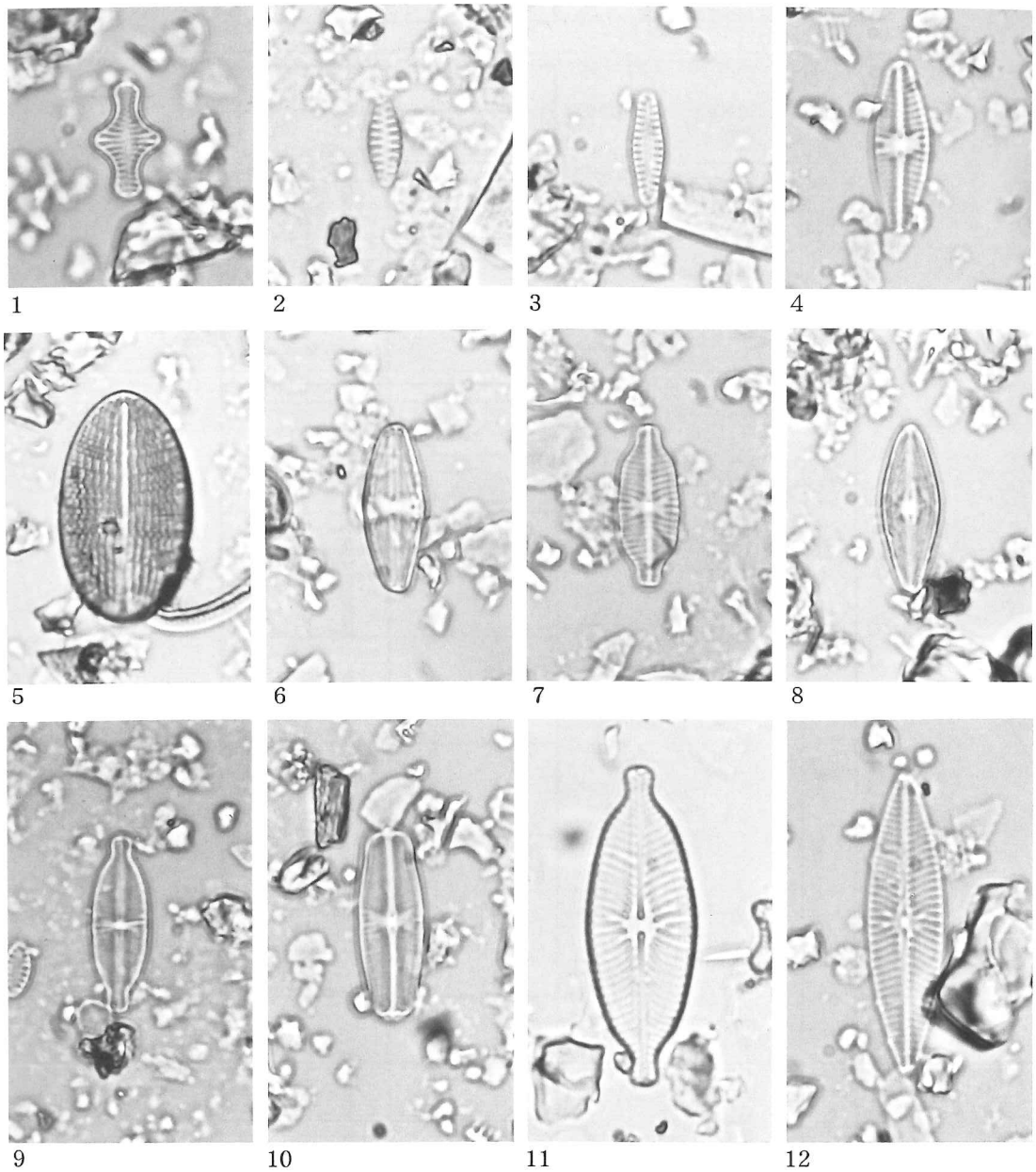


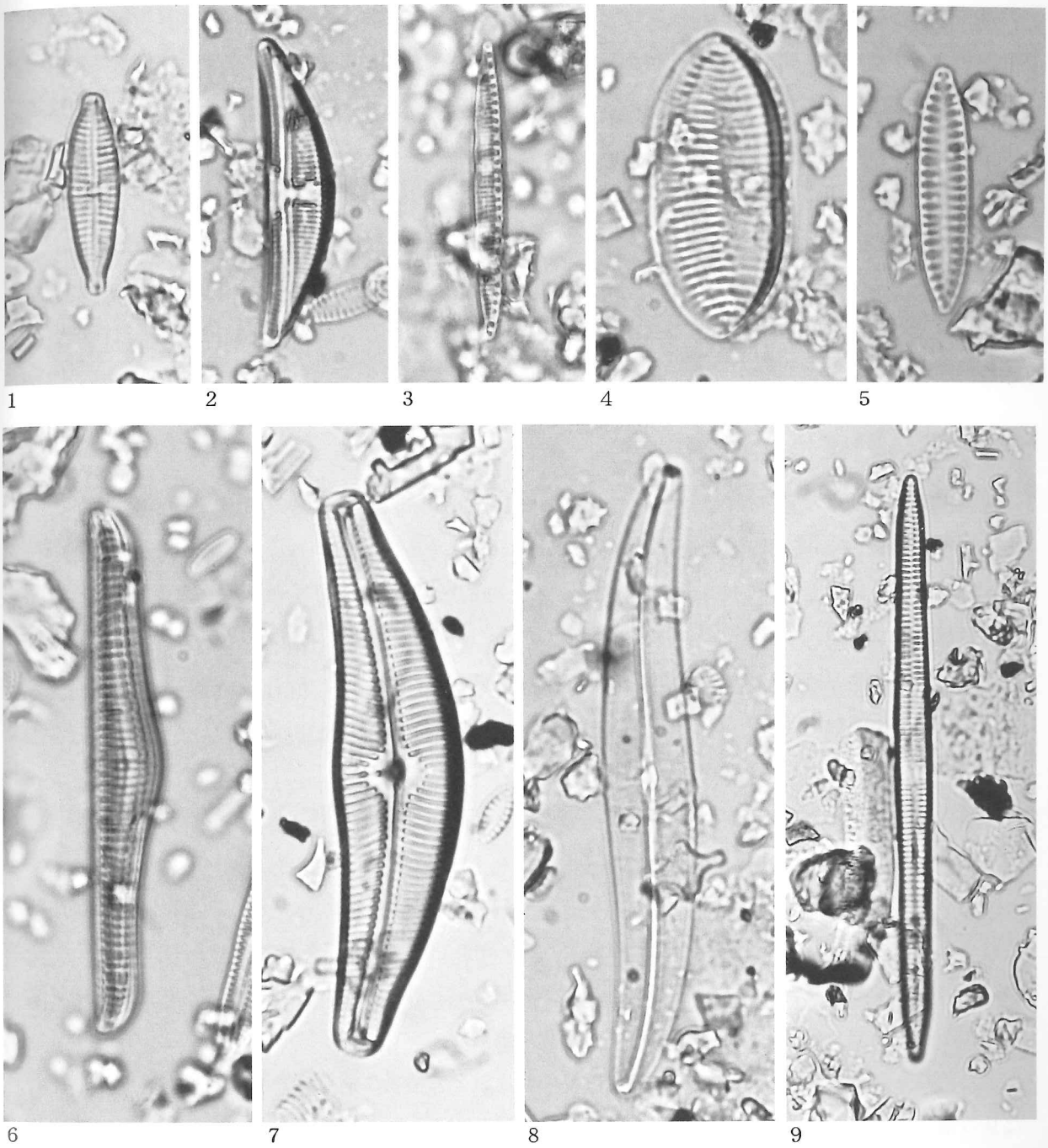
図1　原の辻遺跡，第1調査区における主要珪藻ダイアグラム

原の辻遺跡の珪藻　I



1. *Fragilaria construens* 2. *Fragilaria pinnata* 3. *Fragilaria brevistriata* 4. *Achnanthes lanceolata*
5. *Cocconeis placentula* 6. *Navicula mutica* 7. *Navicula elginensis* 8. *Navicula confervacea*
9. *Navicula kotschyi* 10. *Navicula pupula* 11. *Navicula placentula* 12. *Navicula menisculus v. upsaliensis*

原の辻遺跡の珪藻　II



1－8 ―― 10 μm

9 ―― 10 μm

1. *Gomphonema parvulum* 2. *Amphora copulata* 3. *Nitzschia frustulum* 4. *Nitzschia levidensis* v. *victoriae*
5. *Surirella angustata* 6. *Rhopalodia gibba* 7. *Cymbella tumida* 8. *Gyrosigma* sp. 9. *Synedra ulna*

Ⅲ．植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1．はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また，イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

2．試　　料

分析試料は，第５調査区および第８調査区から採取された計３点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3．分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原,1976）を用いて，次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約１ｇに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02ｇ添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42ＫＨｚ・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は，400倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}ｇ）をかけて，単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03），ヨシ属（ヨシ）は6.31,ススキ属（ススキ）は1.24,メダケ節は1.16,ネザサ節は0.48,クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75,ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量

を行い，その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ，キビ族型，ヨシ属，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など），ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節，ヤダケ属），ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節），クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など），ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節），未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来），未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属），その他

５．考　　察

(1) 稲作跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が試料１ｇあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に，そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山,2000）。ただし，密度が3,000個/ｇ程度でも水田遺構が検出される事例があることから，ここでは判断の基準を3,000個/ｇとして検討を行った。

１）第５調査区

古墳時代初頭とされる３ｂ層（試料１）および古墳時代初頭～古代とされる３ａ層（試料２）について分析を行った。その結果，両試料からイネが検出された。このうち，３ｂ層（試料１）では密度が6,200個／ｇと高い値であり，３ａ層（試料２）でも4,200個/ｇと比較的高い値である。したがって，これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

２）第８調査区

古墳時代初頭とされる５層（試料３）について分析を行った。その結果，イネが5,500個/ｇと高い密度で検出された。したがって，同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには，イネ以外にもムギ類，ヒエ属型（ヒエが含まれる），エノコログサ属型（アワが含まれる），キビ属型（キビが含まれる），ジュズダマ属（ハトムギが含まれる），オヒシバ属（シコクビエが含まれる），モロコシ属型などがあるが，

これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では，各試料ともメダケ節型が多く検出され，ヨシ属，ウシクサ族A，ネザサ節型なども検出された。また，部分的にブナ科（シイ属），クスノキ科，マンサク科（イスノキ属）などの樹木（照葉樹）も検出された。おもな分類群の推定生産量によると，イネおよびメダケ節型が優勢であり，ヨシ属も比較的多くなっていることが分かる。

以上のことから，古墳時代初頭および古墳時代初頭～古代とされる各層の堆積当時は，おもに稲作が行われていたと考えられ，周辺にはヨシ属などが生育する湿地が分布していたと推定される。また，丘陵部などにはメダケ節などのタケ亜科が分布しており，シイ属，クスノキ科，イスノキ属などの照葉樹も見られたと推定される。

6．ま と め

植物珪酸体（プラント・オパール）分析の結果，古墳時代初頭および古墳時代初頭～古代とされる各層からはイネが多量に検出され，稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

当時の調査区周辺にはヨシ属などが生育する湿地が分布していたと考えられ，丘陵部などにはメダケ節などのタケ亜科，およびシイ属，クスノキ科，イスノキ属などの照葉樹が分布していたと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70－83.
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究.38(2)，p.109－123.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189－213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学,9, p.15－29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学,17, p.73－85.

表１　原の辻遺跡，県道調査事業における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	第５調査区 1	第５調査区 2	第８調査区 3
イネ科	Gramineae (Grasses)			
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	62	42	55
キビ族型	Paniceae type	7		
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	14	14	7
ススキ属型	*Miscanthus* type		21	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	7	21	21
ウシクサ族B	Andropogoneae B type			7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	234	112	76
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	48	14	14
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	14	7	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		7	
未分類等	Others	55	28	14
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin	21	7	14
棒状珪酸体	Rod-shaped	296	175	125
未分類等	Others	372	321	263
樹木起源	Arboreal			
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*			7
クスノキ科	Lauraceae	14		7
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*		7	
その他	Others	14	7	21
(海綿骨針)	Sponge	7		
植物珪酸体総数	Total	1158	782	630

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.82	1.23	1.63
ヨシ属	*Phragmites* (reed)	0.87	0.88	0.44
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.26	
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	2.72	1.30	0.88
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	0.23	0.07	0.07
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	0.10	0.05	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		0.02	

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*	89	90	93
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*	8	5	7
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)	3	4	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		1	

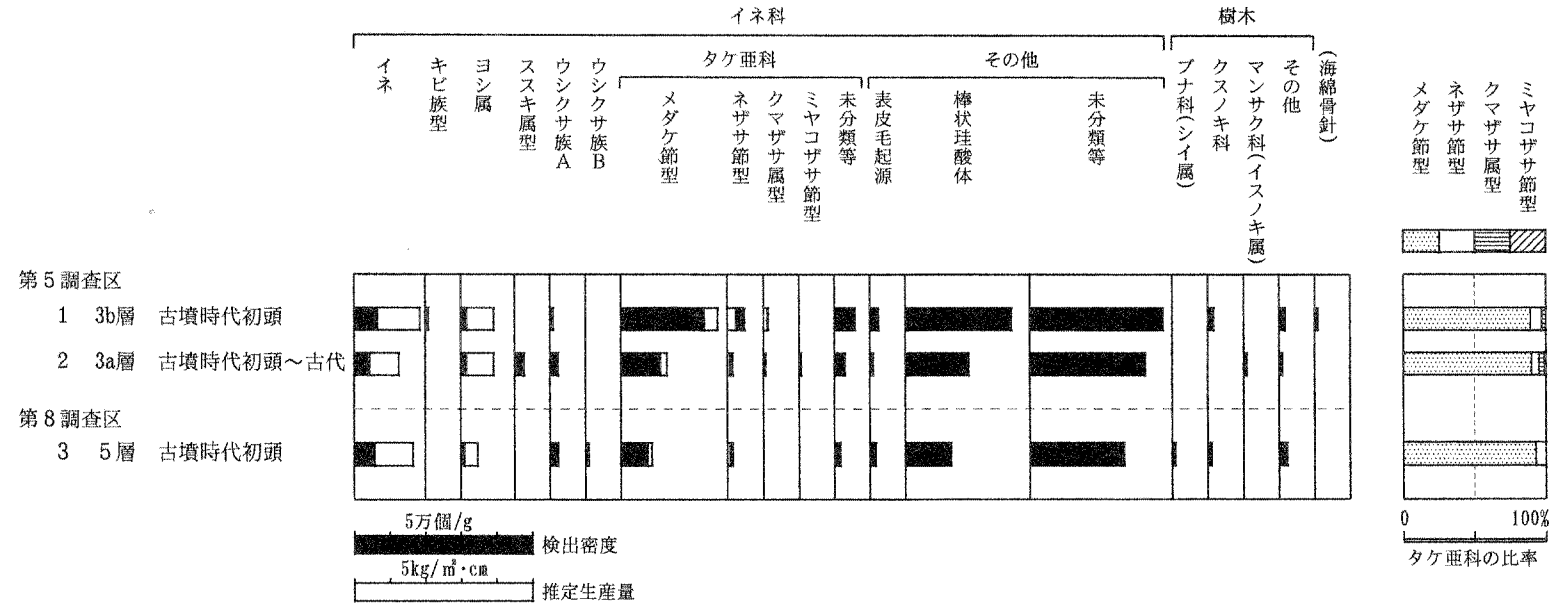
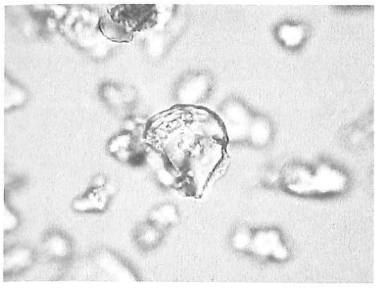
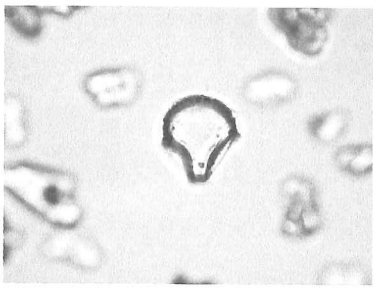


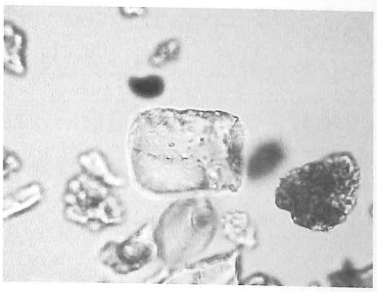
図1　原の辻遺跡，県道調査事業における植物珪酸体分析結果



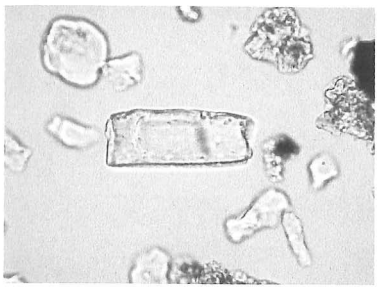
イネ
試料１



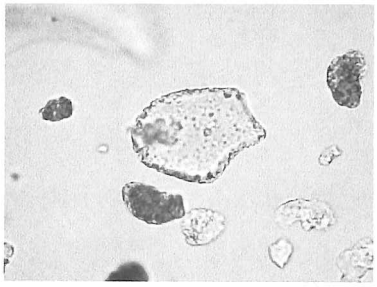
イネ
試料２



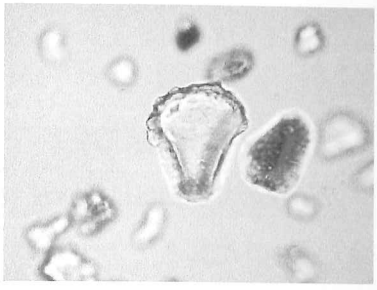
イネ（側面）
試料２



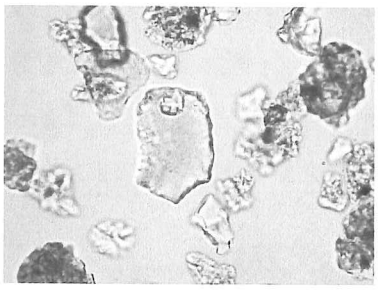
キビ族型
試料１



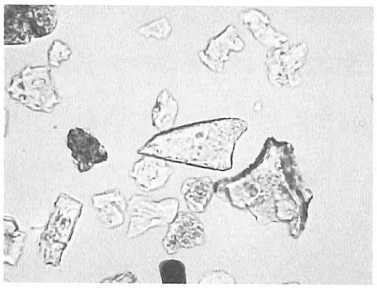
ヨシ属
試料２



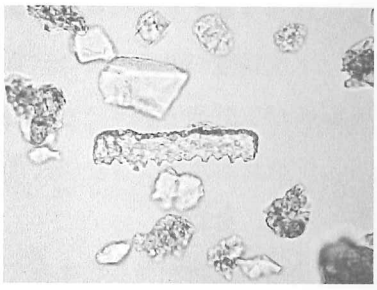
メダケ節型
試料２



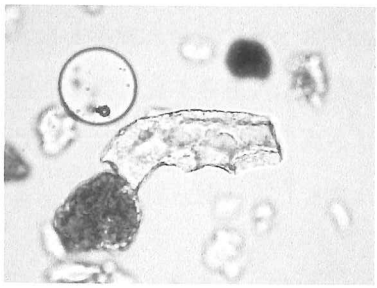
クマザサ属型
試料１



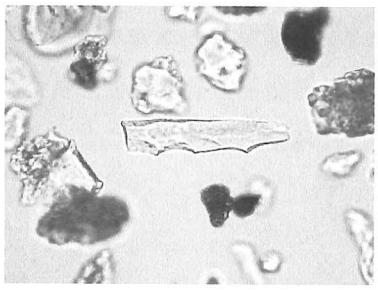
表皮毛起源
試料２



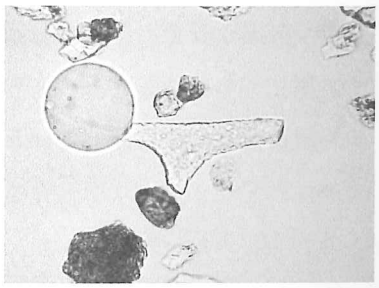
棒状珪酸体
試料１



クスノキ科
試料３



クスノキ科
試料１



マンサク科（イスノキ属）
試料２

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真　　50μm

Ⅳ. 花粉分析

1．はじめに

花粉分析は，一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており，遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は，水成堆積物では保存状況が良好であるが，乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2．試　　料

試料は，第５調査区から採取された３ｂ層と３ａ層の２点である。

3．方　　法

花粉粒の分離抽出は，中村（1973）の方法をもとに，以下の手順で行った。

1）５％水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎

2）水洗処理の後,0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き，沈澱法で砂粒を除去

3）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

4）水洗処理の後，氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す

5）再び氷酢酸を加えて水洗処理

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は，生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は，島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして，所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって，科，亜科，属，亜属，節および種の階級で分類し，複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については，中村（1974,1977）を参考にして，現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが，個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

4．結　　果

(1) 分類群

出現した分類群は，樹木花粉24，樹木花粉と草本花粉を含むもの２，草本花粉21，シダ植物胞子２形態の計49である。分析結果を表１に示し，花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属，ツガ属，マツ属複維管束亜属，スギ，イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科，ヤマモモ属，ノグルミ，ハンノキ属，カバノキ属，ハシバミ属，クマシデ属－アサダ，クリ，シイ属－マテバシイ属，

ブナ属，コナラ属コナラ亜属，コナラ属アカガシ亜属，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，サンショウ属，ブドウ属，グミ属，モクセイ科，イスノキ属，スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科，マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属，サジオモダカ属，オモダカ属，イネ科，イネ属型，カヤツリグサ科，ミズアオイ属，タデ属サナエタデ節，ギシギシ属，アカザ科－ヒユ科，スベリヒユ属，ナデシコ科，キンポウゲ属，アブラナ科，チドメグサ亜科，セリ亜科，ゴキヅル，タンポポ亜科，キク亜科，オナモミ属，ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子，三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

３ｂ層（試料１）では，樹木花粉より草本花粉の占める割合が極めて高い。草本花粉では，イネ属型を含むイネ科が優占し，カヤツリグサ科，ヨモギ属，アブラナ科，キク亜科，アカザ科－ヒユ科，ナデシコ科，オモダカ属，ミズアオイ属，タデ属サナエタデ節などが伴われる。樹木花粉では，コナラ属アカガシ亜属，シイ属－マテバシイ属の出現率がやや高く，スギ，ニレ属－ケヤキ，エノキ属－ムクノキ，マツ属複維管束亜属などが伴われる。３ａ層（試料２）でも，おおむね同様の結果である。

５．花粉分析から推定される植生と環境

古墳時代初頭とされる３ｂ層の堆積当時は，調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていたと考えられ，ミズアオイ属やオモダカ属などの水田雑草も見られたと推定される。また，周辺の丘陵部などではヨモギ属，アブラナ科，キク亜科なども生育していたと考えられる。森林植生としては，周辺地域にコナラ属アカガシ亜属，シイ属－マテバシイ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。古墳時代初頭～古代とされる３ａ層の堆積当時も，おおむね同様の状況であったと考えられる。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，ｐ.82－110.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，ｐ.248－262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60ｐ.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91ｐ.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究，13，ｐ.187－193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，ｐ.21－30.

表1　原の辻遺跡，県道調査事業における花粉分析結果

分類群		第5調査区	
		3a層	3b層
学名	和名	2	1
Arboreal pollen	樹木花粉		
Podocarpus	マキ属	2	
Tsuga	ツガ属		1
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	7	1
Cryptomeria japonica	スギ	3	6
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1
Myrica	ヤマモモ属	1	
Platycarya strobilacea	ノグルミ		1
Alnus	ハンノキ属		1
Betula	カバノキ属	1	
Corylus	ハシバミ属	3	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	1	1
Castanea crenata	クリ		4
Castanopsis	シイ属?マテバシイ属	23	16
Fagus	ブナ属	2	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属		3
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	32	30
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	6	1
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	6	2
Zanthoxylum	サンショウ属	1	
Vitis	ブドウ属	3	
Elaeagnus	グミ属		1
Oleaceae	モクセイ科	1	
Distylium	イスノキ属		1
Lonicera	スイカズラ属	1	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3	5
Leguminosae	マメ科	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	2	
Alisma	サジオモダカ属		1
Sagittaria	オモダカ属	1	1
Gramineae	イネ科	165	182
Oryza type	イネ属型	19	35
Cyperaceae	カヤツリグサ科	35	25
Monochoria	ミズアオイ属	7	2
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	2	1
Rumex	ギシギシ属	1	1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	4	3
Portulaca oleracea	スベリヒユ属	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	3
Ranunculus	キンポウゲ属	1	2
Cruciferae	アブラナ科	3	9
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	6	2
Apioideae	セリ亜科	2	6
Actinostemma lobatum	ゴキヅル	1	
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	1
Asteroideae	キク亜科	5	7
Xanthium	オナモミ属	1	1
Artemisia	ヨモギ属	33	26
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	4	1
Trilate type spore	三条溝胞子	5	2
Arboreal pollen	樹木花粉	93	71
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	4	5
Nonarboreal pollen	草本花粉	292	308
Total pollen	花粉総数	389	384
	試料1cm^{3}中の花粉密度	2.3 $\times 10^4$	6.6 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	6	4
Fern spore	シダ植物胞子	9	3
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)

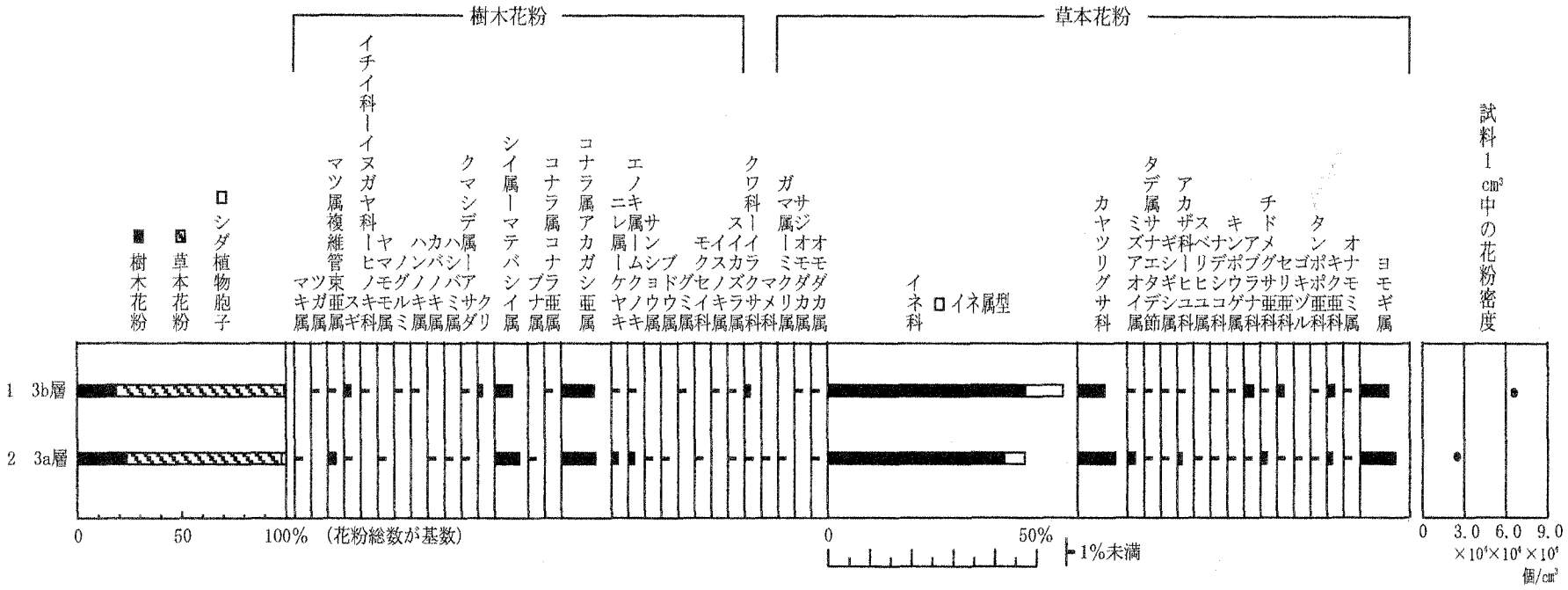


図1　原の辻遺跡，第5調査地区における花粉ダイヤグラム

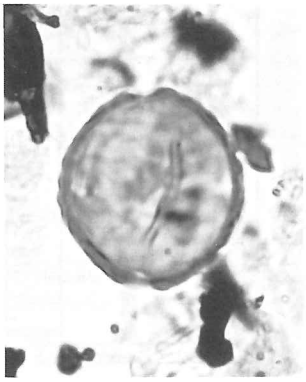
原の辻遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵 I

1 マツ属複維管束亜属

2 シイ属ーマテバシイ属

3 コナラ属コナラ亜属

4 コナラ属アカガシ亜属



5 ニレ属ーケヤキ

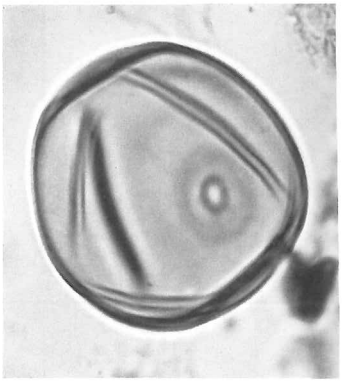
6 エノキ属ームクノキ

7 ブドウ属

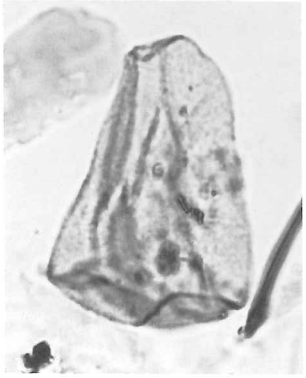
8 クワ科ーイラクサ科

9 ガマ属ーミクリ属

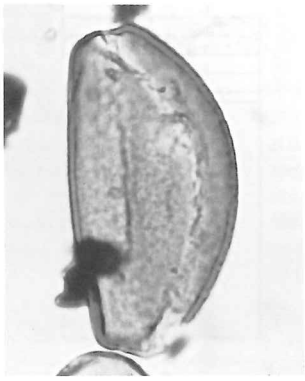
10 サジオモダカ属



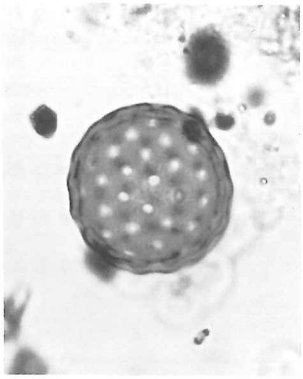
11 イネ属型



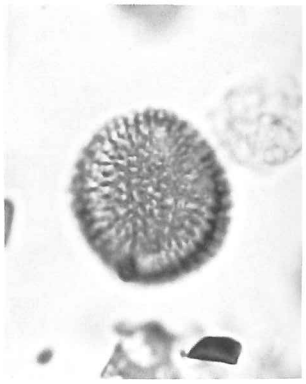
12 カヤツリグサ科



13 ミズアオイ属



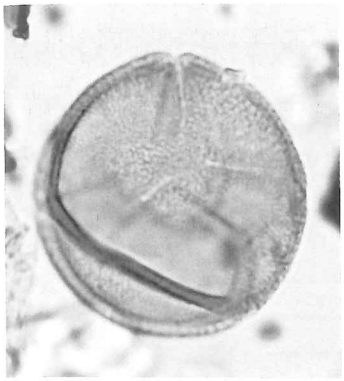
14 アカザ科ーヒユ科



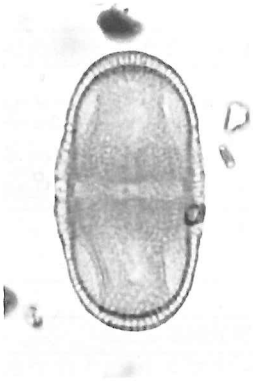
15 アブラナ科

10μm

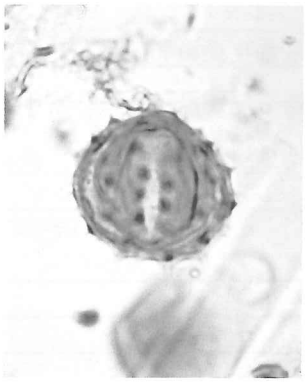
原の辻遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵 II



16 ギシギシ属



17 セリ亜科

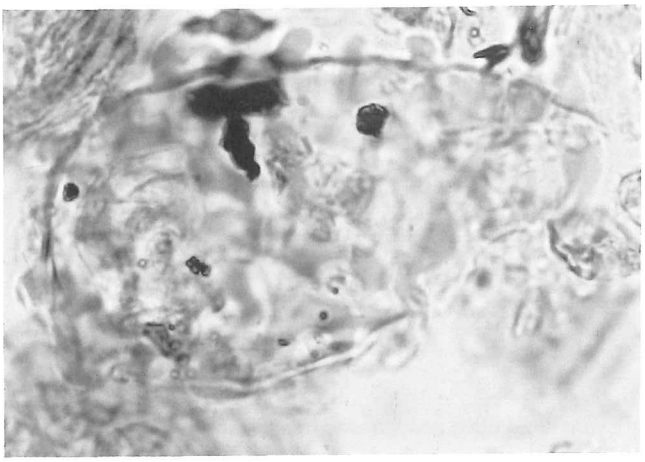


18 キク亜科

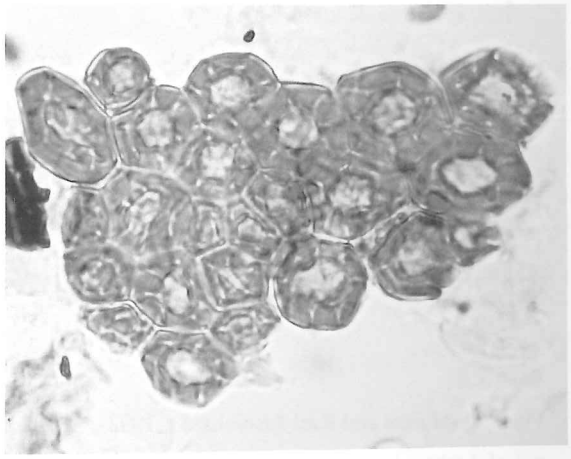
19 ヨモギ属

20 スイカズラ属

21 シダ植物単条溝胞子



22 回虫卵



23 石細胞

10μm

V．寄生虫卵分析

1．はじめに

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は，花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており，人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり，寄生虫卵の種類から，摂取された食物の種類や，そこに生息していた動物種を推定することも可能である。

2．試　　料

試料は，第１調査区のＳＤ－２およびＳＤ－３から採取された２点である。

3．方　　法

微化石分析法を基本に，以下のように行った。

1）サンプルを採量

2）脱イオン水を加えて撹拌

3）篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去

4）25％フッ化水素酸を加えて30分静置（２～３度混和）

5）遠心分離（1500ｒｐｍ，２分間）による水洗の後にサンプルを２分割

6）片方にアセトリシス処理を施す

7）両方のサンプルを染色後，グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

8）検鏡・計数

4．結果および考察

弥生時代後期～古墳時代初頭とされるＳＤ－３の３層（試料２）では，回虫卵がわずかに検出された。回虫は，虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する寄生虫である。ここでは，密度がかなり低いことから，集落周辺における通常の汚染程度と考えられる。

弥生時代後期～古墳時代初頭とされるＳＤ－２の３層（試料１）では，寄生虫卵および明らかな食物残渣は検出されなかった。

参考文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science,　19, p.231－245.

金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－，奈良国立文化財研究所，p.14－15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座,8,医歯薬出版，p.9－55.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，２，同成社，p.151－158.

表１　原の辻遺跡，県道調査事業における寄生虫卵分析結果

分類群		第１調査区	
		SD-2	SD-3
学名	和名	1	2
Helminth eggs	寄生虫卵		
Ascaris	回虫卵		1
Total	計	0	1
	試料1cm^{3}中の寄生虫卵密度	0.0	1.8 ×10
Storne cell	石細胞	(+)	
	明らかな消化残渣	(-)	(-)
	試料1cm^{3}中の花粉密度	6.2 ×10^4	2.9 ×10^4

図　　版

第１調査南より撮影
ＳＤ－２（右）
ＳＤ－３（左）

ＳＤ－２遺物出土状況

ＳＤ－２遺物出土状況

図版１　ＳＤ－２・３遺物出土状況

第１調査ＳＤ－３
遺物出土状況
（北側より）

馬韓系土器出土状況

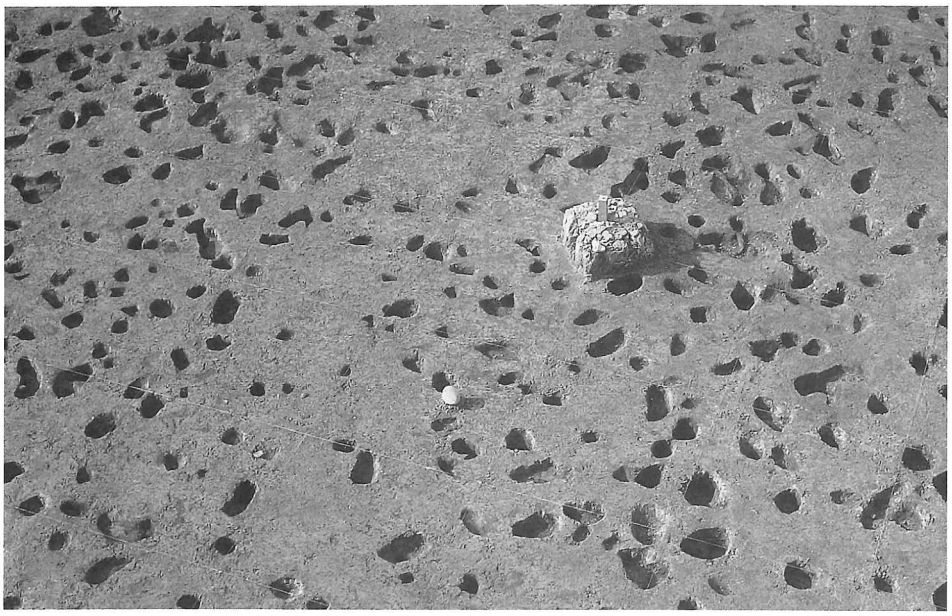
図版２　ＳＤ－３遺物出土状況

第 2 調査区ＳＤ－３
扉材出土状況
左上は粘土

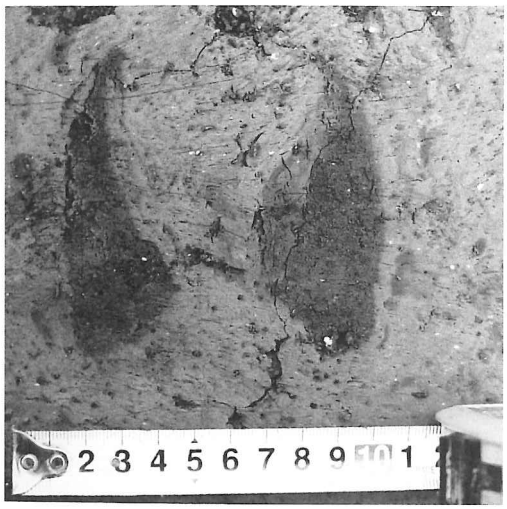
堰状遺構前面の扉材，
右側粘土

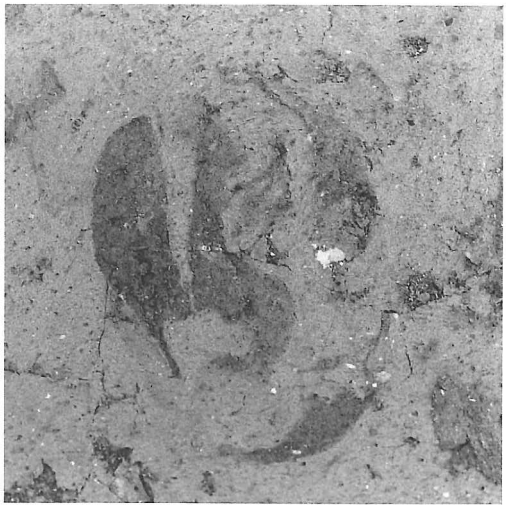
扉材と粘土塊

図版 3　扉材出土状況



第 3 調査区
検出の足跡状遺構



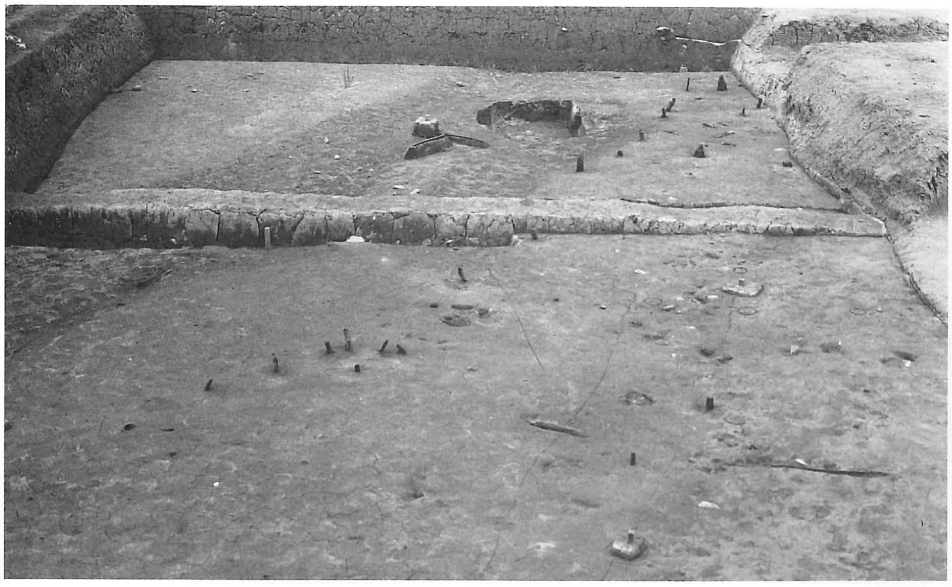


隅蹄目（牛？）の足跡

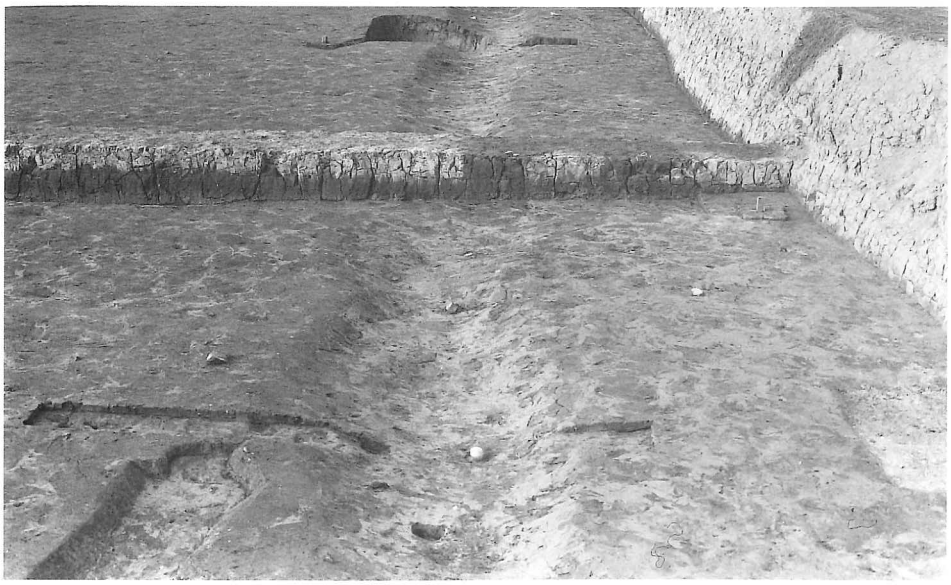
第 4 調査区検出の
土師器碗・皿

図版 4　古墳～古代の遺構

第 5 調査区南
セクション図
下層にかなりの
凹凸がある



第 5 調査区の杭列



第 5 調査区の溝

図版 5　第 5 調査区の古代の溝・杭列

第 9 調査区
ＳＤ－４遺物出土状況
（東→西）

第 9 調査区
ＳＤ－４木版出土状況
（西→東）

第 9 調査区
ＳＤ－４西側
セクション

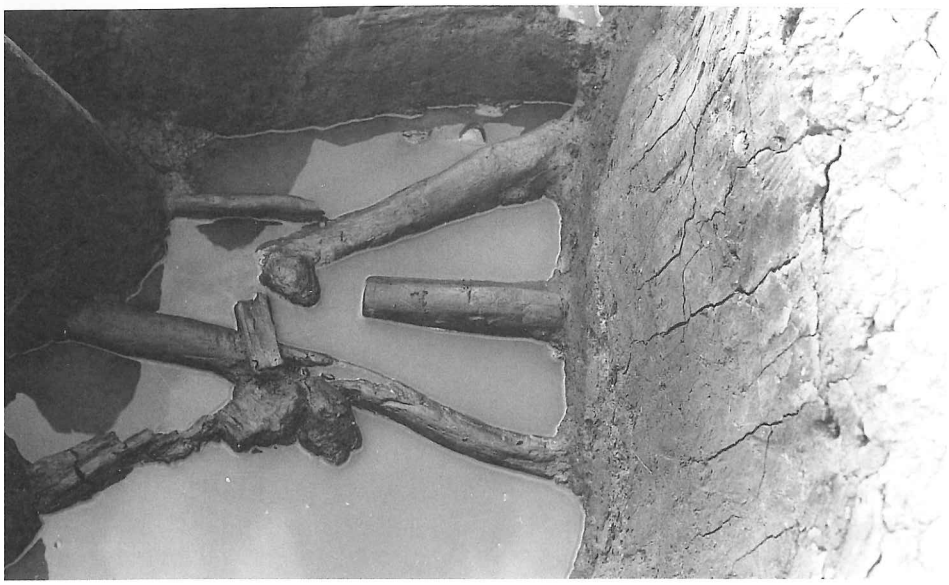
図版 6　第 9 調査ＳＤ－４遺物の出土状況

第10調査区
ＳＤ－５（４と同）
南側
（西→東）

第10調査区
ＳＤ－５（４と同）
遺物出土状況
（西→東）

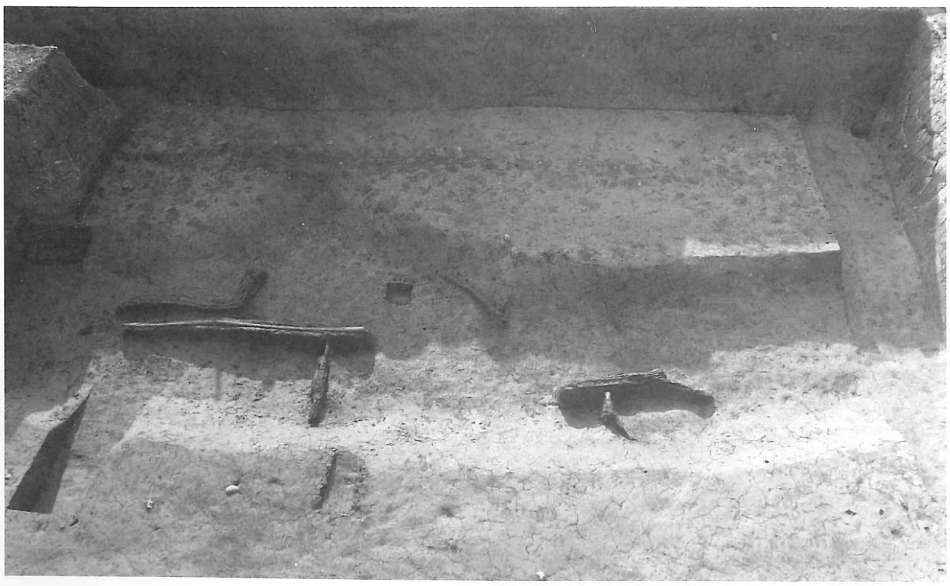
第10調査区
ＳＤ－５（４と同）
南側
完掘状況

図版７　第10調査区ＳＤ－５（ＳＤ－４と同）遺物出土状況



第９調査区ＳＤ－４
北側杵出土状況

第11調査区ＳＤ－７
完掘状況
（南→北）



第12調査区南側
ＳＤ－７完掘状況
（西→東）

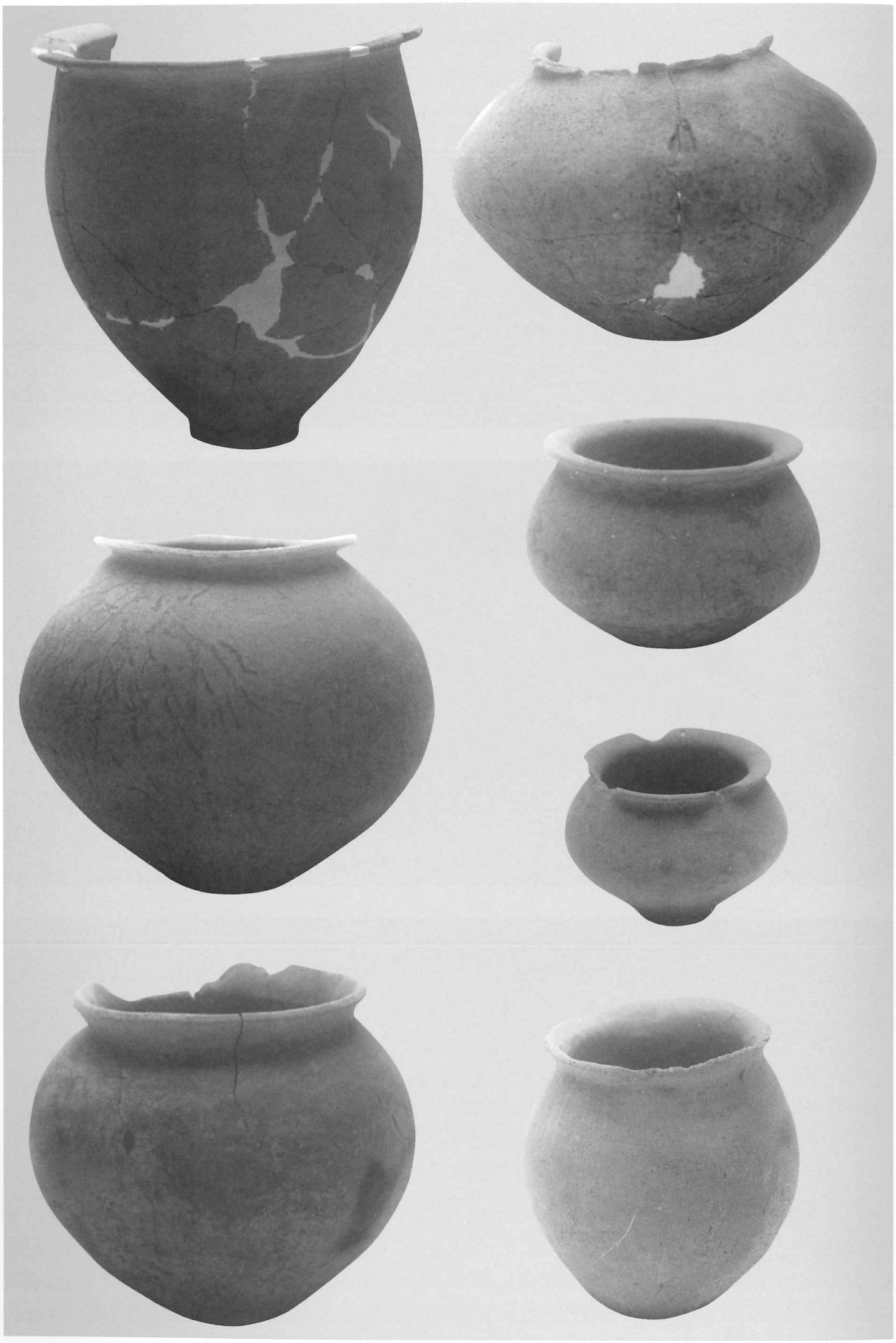
図版８　第10調査区検出のＳＤ－7，第13調査区のＳＤ－８

第13調査区
ＳＤ－８
遺物出土状況
（南→北）

第13調査区
ＳＤ－８
遺物出土状況
（西→東）

第13調査区
ＳＤ－８
木片出土状況
（南→北）

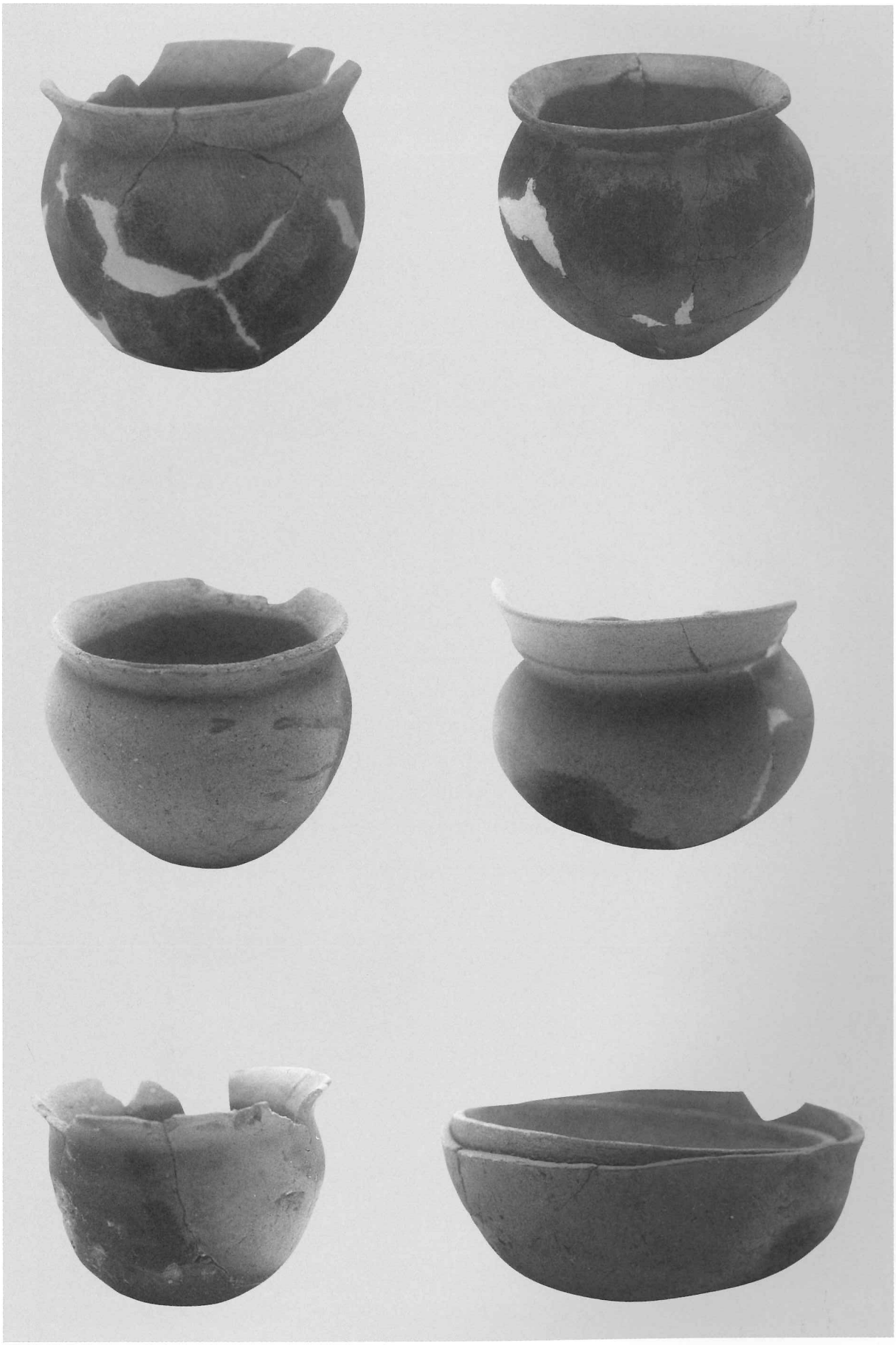
図版９　第13調査区ＳＤ－８遺物出土状況



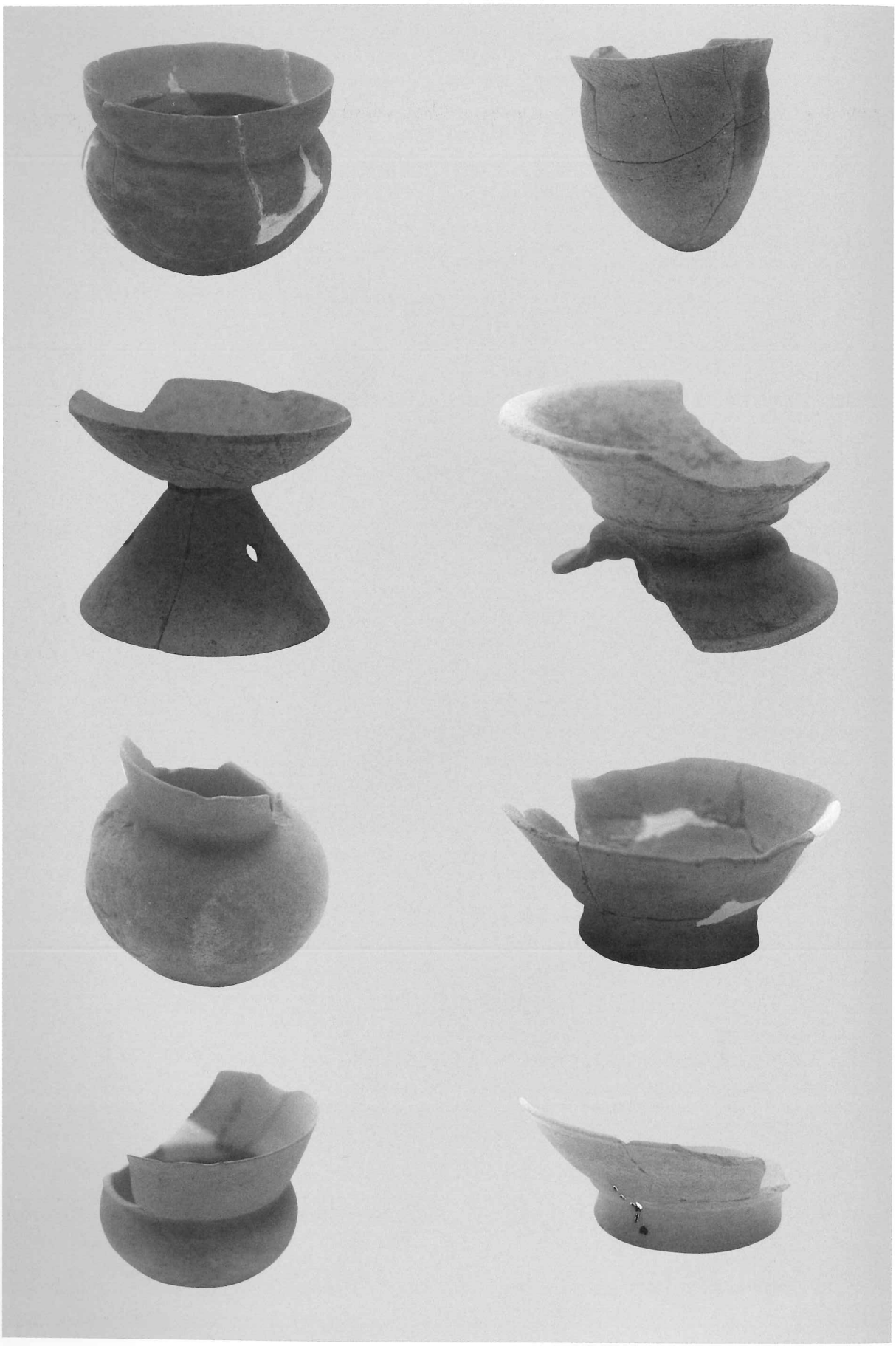
図版10　甕・壺類

図版11　壺・甕類

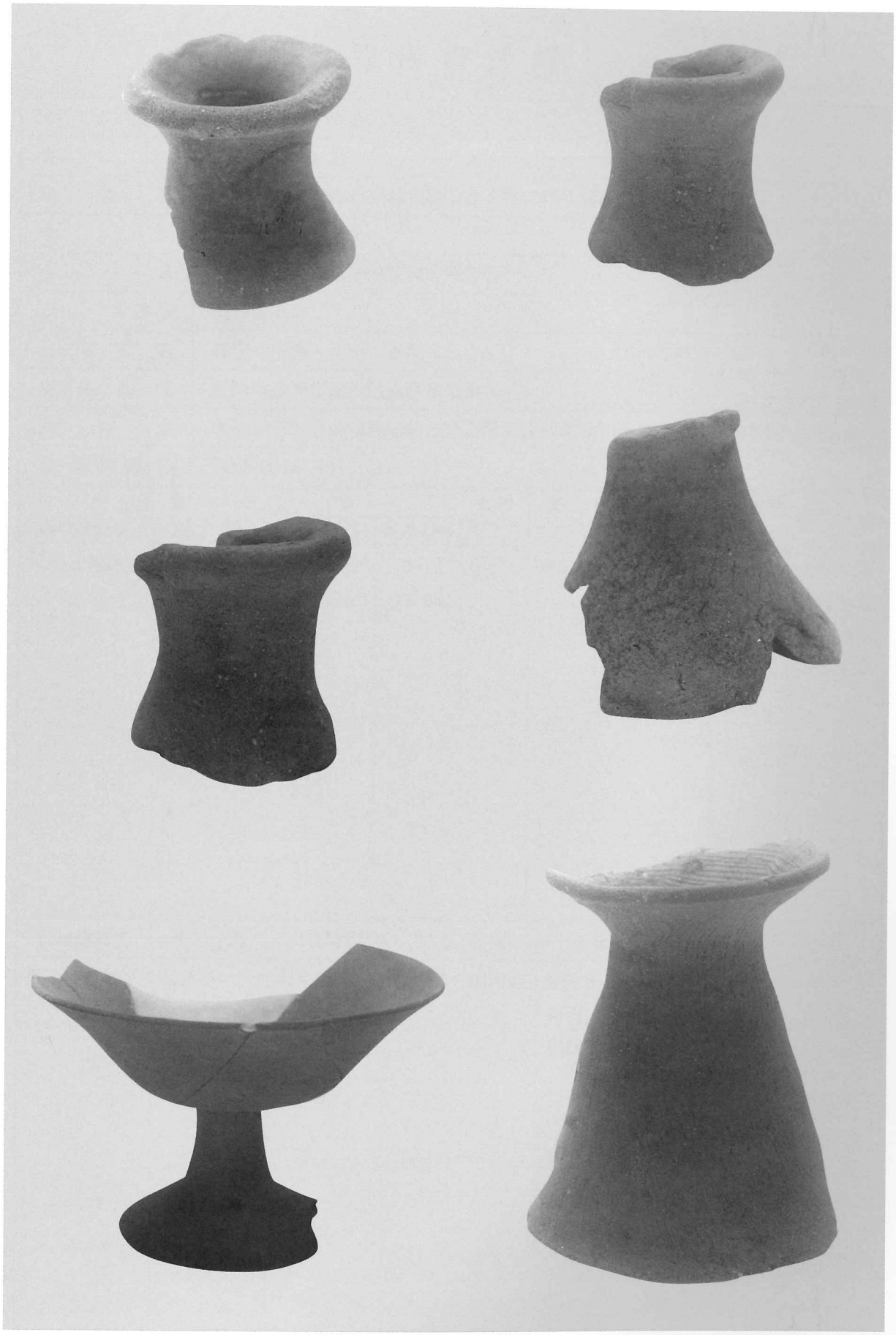
図版12　甕・鉢類



図版13　壷類



図版14　鉢・坏・器台



図版15　器台・坏

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	主要地方道勝本石田線道路改良工事に伴う調査報告書
巻次	①
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第27集
編著者名	福田　一志・小玉　友裕
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	㊡811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地1　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
原の辻遺跡 (はるつじ)	長崎県壱岐市 (ながさきけんいきし) 芦辺町・石田町 (あしべちょう いしだちょう)	42423 42424	73-10 72-92	33°45′30″	129°45′55″	20020805 ～ 20030323	2,400m²	主要地方道勝本石田線道路改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	濠・溝・旧河道	弥生土器 磨石・敲石 銅鏃	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第27集

原の辻遺跡

2004. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　株式会社　昭和堂